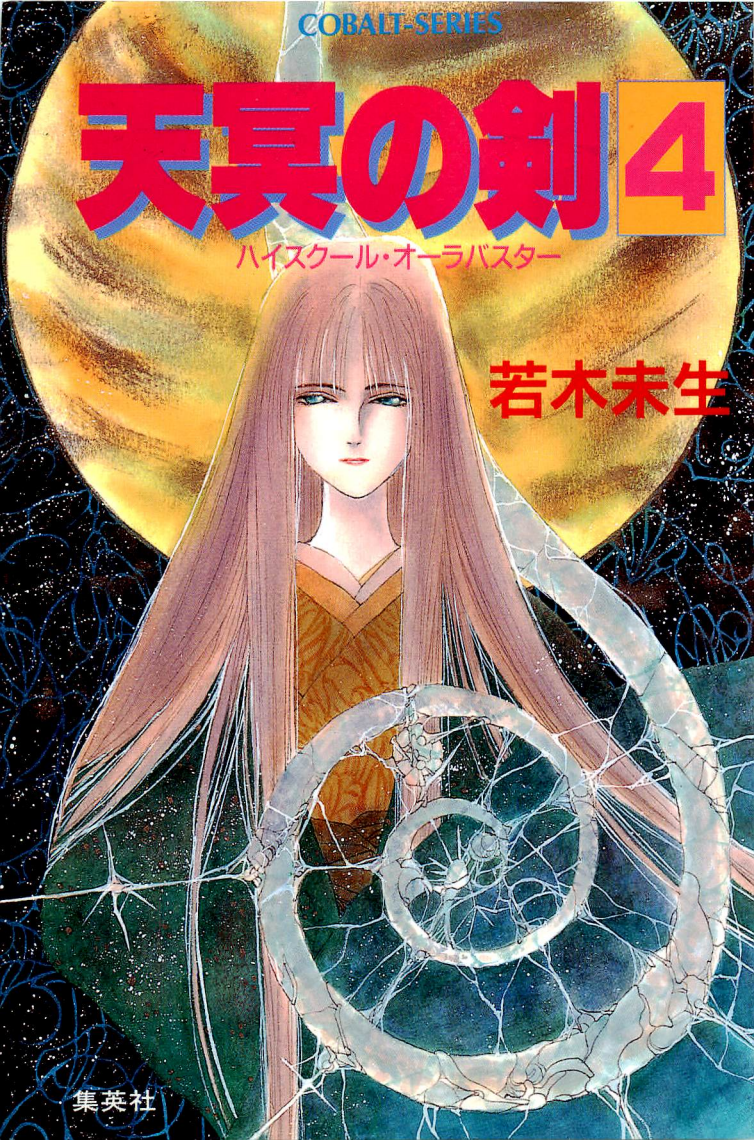

COBALT-SERIES
天冥の剣4
ハイスクール・オーラバスター
若木未生
集英社

空者総帥の死。その意味を理解しえても、その事実を受け入れることのできない者たち。いま初めて、術者たちは忍の意志に反した行動を起こす。伽羅王復活のために。しかし新大阪に向かった希沙良たちの新幹線が濃霧のために足止めを食らった。そして相次ぐ事故。拡大する混乱の中で、十九郎たちの形勢は不利にならざるを得ない。誰がこの戦いに終止符を打つのか？　『天冥の剣』ついに完結！

恋気分いっぱいの夢♥小説誌！

コバルト
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売
隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。
集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

天冥の剣4

若木未生

集英社

目次

天冥の剣4
天冥篇（承前）
第四章　残火……10
第五章　前哨……45
第六章　蘭……89
第七章　顕現……121
第八章　永劫の剣……163
終章　螺旋……211
あとがき……217



崎谷亮介（さきやりょうすけ）

おとなしく内向的な性格だが、実はとてつもない力を秘めた〈術者〉側の切り札的存在。忍を復活させるため珈織の所在をつきとめようと、手がかりを求め一路大阪へ向かう。

水沢諒（みずさわりょう）



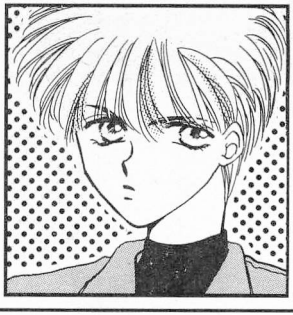
亮介の親友。戦闘的な〈術力〉と能天気な性格がウリ(?)の〈術者〉。忍の死に深く衝撃を受け、忍の身体とともに六本木のマンションに残る。彼が次に取るべき行動は…。



里見十九郎（さとみじゅうきゅうろう）

沈着冷静な参謀型の〈術者〉で、希沙良のフォロー役。忍を復活させることを決意。〈道者〉一真を説得したり、文彦と取引を交わしたりしながら、忍の身体を守っている。

和泉希沙良（いずみきさら）



諒に匹敵する攻撃力を持つ〈術者〉のひとり。奔放な性格だが、従兄弟の十九郎以外にはなかなか心を許さない。幽閉されていた本家から解放、亮介とともに大阪へ向かう。



七瀬冴子（ななせさえこ）

強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ〈術者〉。忍に鎌倉の本家での謹慎を命じられていたが、一真の判断で解放され、亮介、希沙良とともに珈織の行方を追う。

神原亜衣（かんばらあい）



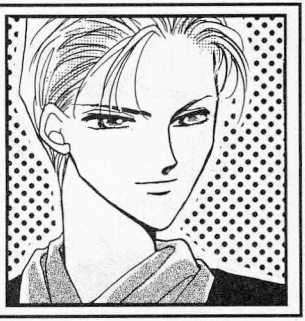
亮介の同級生でGF、〈術者〉ではないが、事情に通じており、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。だんだん「普通の」生活から離れていく亮介の身を案じている。



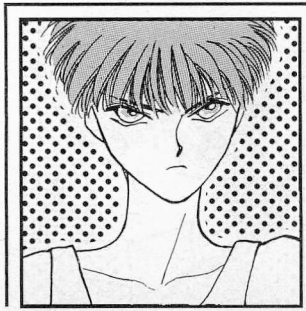
工藤珈織（くどうかおる）

六本木のテレビ局・CBSの新人レポーター。斎伽忍にまつわる謎をつきとめようと彼を追いかけていた。だが、彼女こそ、妖者総帥・九那妃が転生した〈器〉であった。

鷹木文彦（たかぎふみひこ）



カメラマン助手の青年は仮の姿で、その正体は妖者三忌将のひとり〈雷将〉勝呂。九那妃を復活させるため、十九郎たちと利害が一致。とりあえずの協力を約束する。



剡司（せんし）

妖者三忌将のひとりで、「ディアーナ」事件の黒幕。忍の前に苦い敗北を味わった過去をもつ。珈織とともに大阪にいて、亮介たちの行動を妨害すべく罠をはるが…。

遠野一真（とおのかずま）



斎伽の分家筋の後継者のひとり。幼少時に術力を失った元術者で、〈道者〉という伽羅王の親衛隊ともいうべき存在。十九郎の依頼により、冴子と希沙良を本家から解放する。



牙（きば）

亮介たちが軽井沢で出会った謎の男。実は〈伽羅王〉の側近〈使〉である。姿は変幻自在で、忍の命令には絶対服従。だが、忍が自ら死を選んだ今、牙の存在は…。

斎伽　忍（さいがしのぶ）



〈術者〉一族の若き総帥で、〈伽羅王〉が転生した現世ただひとりの〈空の者〉。亮介の中和能力により九那妃の封印をはかるが失敗。自らの死により九那妃を封じ込める。

イラスト／杜　真琴

天冥の剣 4

第四章　残火

I

荒れくるう闇が、草原を薙ぎ裂いていった。
鈍く重い紫の天が、覆いとなり、その地平すべてを封じこむかのようだった。
空涯はるかに、撃ち交い、灼き乱される熾烈な光彩のとどろきが響きつづけている。
あれは雷将勝呂と彼の軍勢が、追攻の嵐を迎えうけているさまに相違ない。
（くいとめている）
放たれた闘気は波となって、この地上まで叩きつけてくる。身を斬るほどの波動と化して降りそそいでくる。猛々しい暴圧に衣を羽吹かせながら、しかし冷静に彼女は戦を読む。
（雷将はよくやっている）
背高い草をかきのけ、けものの身軽さで彼女は走りだす。迅風の如く、影まぼろしの如くに——走る。
広大な原をわたった先の岩垣に、仮の本陣が設けられている。彼女の主君はその内に在り、

今ここにいる彼女と同じものを見据えているはずだった。

大戦の趨向を。

染まりゆく天の彼方を。

おそらくこの決戦においても、最終的な勝敗は定まらないだろう。双方ともに、またいくばくかの戦果と犠牲とを得て、いずれ剣を退くことになるのだろう。

永い、永すぎる歴史のなかで、すでにそれは容易に推測される事象と化していた。

だが飽いている暇はない。馴れている余裕はなかった。彼女は走りつづける。ただひたすらに走りつづけるしかないのだ。

『氷将殿の陣に揺るぎが生じてございます』

彼女の思念は宙をかけ、総大将として立つ主君のもとへと到達する。

先駆けを任ずる氷将透河の軍勢は、空者方白狼王および沙良耶の両名により迎撃され、ただならぬ激戦のさなかにあった。

支援の手を差し向けねば、突出したきり敵陣にて孤立することとなる。やむなく、銀将安椎が本陣の護りより脱け、最前線へと発った。

（こちらが手薄になる）

そう気遣ったのは、当然、彼女ひとりではなかった。折しも炎将剋司が、本陣をかこむ結界の弱まりを指摘し氷将透河の失策を非難する声をあげていた。その次に起こりうる事態は、と

うに読みきられていてもよかったのだ……。

「!?」

不意に、視界を一文字に断たれたのはそのときだった。ガウッ!!　と大気が渦巻きすべてをうち砕いた。

（何!?）

震撼が彼女を襲った。信じがたい光景がそこにはあった。

草原の中央、宙の高みに現出した影のかたちどるもの。

この世における、あらゆる力を超越するもの。

よもや、ただひとり、自ら彼が――!!

（わたくしが盾となるのだ！）

思考するよりも早く、持てる能力のかぎりを尽くして彼女は地を蹴っている。

見える。あざやかに灼きつく。吹きすさぶ風のうちに彼の姿が。白妙の戦装束に包まれた玲瓏たる神の姿が。霊光に凍りつく白刃の輝きが。すべらかな黒髪の舞うさまが。

「なぜここへ参られる……!?」

天冥の剣を携えて。

「なぜ来る!?　伽羅王っ!!」

彼女の問いに、空者総帥は返応しなかった。

蒼ざめた双眸にとらえられる。彼女は慄然とする。あまりにも酷薄な、あまりにも残忍な意図がそこには秘められている。

厳格な審判者としての。

殺意。

（九那妃様、）

ふりかざされる剣の軌跡を彼女は知る。

彼の美貌が宿す凄惨な闇を知る。

まぎれなき魔性を。

「伽羅王!!」

迫りくる光刃を前に、いかなる制止の声も無力。

「なりませぬ、九那妃様だけは!!　――伽羅王っ!!」

鋼よりも鋭い霊力の一撃が、天上より、まっすぐに疾るのを彼女は見た。逃れる間のあろうはずはなく、彼女の意識はそれを最後に暗黒の底へと陥とされた。

……天慶二年、西暦にして九三九年のことである。

II

小柄な少女がひとり、橋の欄干にもたれて、ぽつんと佇んでいる。
背後の大通りを走りぬけてゆく自動車の群れは、すでに、一様にヘッドライトを灯していた。
話し相手もなく、ただじっと橋の上から動かずにいる彼女に、だが寂しげなようすは見えなかった。その瞳にうつる街の景色を、耳に届く都会のざわめきとエンジンの呼吸とを、どこか愉しんでいるようだった。
大阪の夜景、だ。
「全部、こんなふうならいいのに」
夜の遠くへ視線を向けながら、小声で呟く。
「こんなふうに、きれいならいいのに」
ばさり、と上空にかすかな羽音がたどりついた。

（彩、さま？）

呼びかけの思念を送ったのは、真っ白な羽根をした小さな鳥だった。

彩は無言で頭上をふりあおぐ。白い鳥はふわりと風に乗り、すぐ目の前の欄干へと降りたった。

（ようやく、こうしてお会いできる）

翼をたたみながら、鳥は――彼女は――凛然として自らの名を告げた。

（わたくしが、蘭、にございます）

「……籠から出てきたの？」

いかにも、と白い鳥は応えた。

なにも語らずに、それからしばらくの間、彩はちっぽけな鳥の姿を見つめていた。

口に出す言葉は必要とされていないのだ。この……幼子のような、聖巫のような、不可思議な少女の前では。

伽羅王の〈使〉である牙との間に特異なつながりを生じえたのも、この少女の精神の清みようを思えばあまりにも合点のゆくことだった。

だからこそ蘭はこの少女を呼べたのだ。今現在、この現世において、かたちにならぬ声を濁りなく理解できる、ただひとりの存在……。

たとえそれが敵方に属する側の相手であろうとも。――いや、すでに敵味方のかかわりすら

意味を失っている現在であるからこそ。

（わたくしの『術』はもはや、効を及ぼしておりませぬ）

蘭は語る。

（あの方の本質はとうに、覆い隠しようのない境地まで先走ってしまわれている。わたくし如きの力で、この上いかにしてあの方をあざむきえましょうや!?）

彩の瞳は、湖水のようにその念を受けとめる。

予測以上に早く、工藤珈織の身に変異が起こりつつあること。炎将剡司の存在がさらに強く彼女の本質を呼び起こしていること。

やがて取り返しのつかぬことになる。このまま——伽羅王の封印に閉ざされたまま、不完全な状態で彼女が目醒めてしまうなら。

（一刻の猶予もなりませぬ）

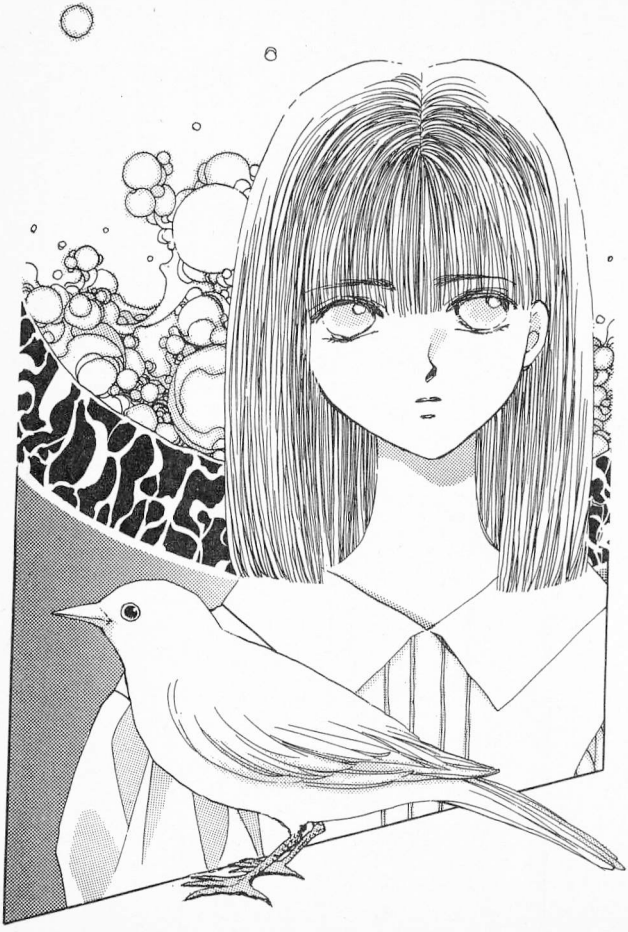
こうなれば、蘭の力だけで彼女を鎮めるのはかぎりなく不可能に近いだろう。蘭はそれを知っている。

わかりきったうえで、どうするかが問題なのだ。

「……どうするのが、いちばん、いいのかな」

彩が呟いた。

正しい解答はどこにもない。



事態は走りだしてしまっている。凄まじい速度で。理屈は役に立たない。かかわるものすべての、赤裸々な本心だけがあらわれる。

（どうなさりたい、と？）

心の内をうかがうように、小さく首をかたむけながら、白い鳥は問いかえした。

……わたし？

彩の意識はとても遠いところを見つめている。

さまざまに広がる望みの、ひとつひとつを。

……わたしは……。

「あや、は……あの人がいるのが、いいな」

さらりと彩が答えた。

「元通りになれるのが、いいな……」

＊　＊　＊

午後七時、間一髪でとびこんだ亮介たちを閉じこめて、列車は東京駅のホームから出発した。

「今生の別れってんじゃねえんだから……」

ぶつぶつとこぼしながら、希沙良が強引に亮介の襟首をつかまえて乗降口のドアからひきはがした。

「未練がましく見てんじゃねえっ。つきあってるこっちのほうが気抜けしてくるんだよな、おまえらの場合っ」

「別にそこで暴力に訴えなくても……」

「それが不思議だよな、なんだか知らねえけど勝手に手が出るんだよな、おまえがボーッと立ってるとさあ」

ささやかに抗議した亮介に、まったく言い訳になっていない台詞を希沙良は真顔で吐いてみせる。

「一種の美徳だよな」

「……何それ？」

「だからそれもおまえの個性なんだから自信持って殴られとけって話だろ」

「ぜんぜん嬉しくないんだけど……」

亮介はため息をつく。プラットホームの光はとうに後方へ過ぎ去って、外の景色は流れる速度を増していくところだった。

東京駅のホームには神原亜衣がひとり残されて、今もまだこちらを見送っている気がする。たしかに希沙良の言うとおりだった。これが最後の別れでも、このまま二度と会えなくなる

わけでもないのだけれど……。
「人がせっかく誉めてんのに嬉しくないの一言で片付けるか!?」
「どこが誉めてるんだよ!?」
「ふたりして何ガタガタやってんのよ?」
見かねて割りこんできたのが冴子の声だった。
「快適な座席を必死の思いで確保したあたしの尽力はどこに行っちゃうのよ!? コミュニケーション深めるなら席についてからにしてくれない!?」
「……すみません」
反論の余地はかけらもない状態で、亮介はすごすごと彼女の指示に従った。尽力っつったって要するに金だろ、と呟きながら希沙良があとに続いてくる。
「あ、ちなみに俺、今の所持金まとめて二千五百二十六円ジャストだからな、この先カネはある所から出せよ、あり余ってる所から」
「わかってるわよ、いちいちうるさいわねえっ。あたしだって今はそうそう自由にカードも使えない身なんだから、湯水みたいにお金が出てくると思わないでよ」
「ええと、俺、一万円くらいだったら……」
「だーいじょうぶよ、亮介ちゃんがそんなこと気にしなくていいのよ、とりあえずなんとかなるわよ」

「おまえ露骨に崎谷と俺とで対応変えてないか!?」
「あなたが亮介ちゃんと同じくらい可愛かったら不気味じゃないのよ、なに言ってんの今更?」
個室の扉をひらきながら、呆れかえった表情で冴子が言った。複雑な立場に置かれてしまった亮介は、あえて口出しをしないように身をすくめつつ扉の内側へ歩を進めた。
二人掛けの席が一対むかいあった室内は、亮介の想像よりも広くゆったりとしていた。普通の高校生の財力で気安く取れる切符では、あまりなさそうだ。事態が事態なだけに、どんな現象が起こってもなるべく他の乗客に影響しないよう考えたのだと冴子は説明していたが……。
「お金があるって大事なことだよね、こういう時……」
「素直に感心してどうするんだ、おまえ」
「だって本当のことだろ」
希沙良にはどうやら、亮介を小突かずにいられない習性があるらしい。台詞と同時についでのように指先で一撃されて、恨めしく亮介は低い声で言い返した。
少し会わないうちにがらりと印象の変わったような気がしているのだが、結局のところ希沙良は希沙良以外のなにものでもないということだ。……それとも、こう思わせてくれること自体が、彼の強さなのだろうか?
「とにかくメシ食おうぜ、晩メシっ」

どかっと窓際に座りこんで希沙良が言う。
「大阪まで三時間弱？　……二時間半って感じか。充電してられんのは今のうちだけだろ。崎谷もずっとキリキリしてないでネジゆるめとけよ」
「うん……」
亮介は頷いた。
本当に、希沙良の言うとおりにしようと思えるから不思議だ。
（慣れるものなのかな……）
もう、泣こうという気も起こらない。
辛さや悲しみも、今はない。
打つ手が残っているうちは正気を保っていられる……という里見十九郎の言葉を、亮介は思い出していた。そういうこと、なのだろうか。
動く目的があるなら。
「あ、その前に俺、電話してくるから」
ふと気がついて、亮介は座りかけたシートから再び立ちあがった。
「電話？」
どこに、とは希沙良は訊かなかった。亮介の顔つきから読みとれたのかもしれない。
「あたしがつきあうわ」

間をおかずに冴子が申し出た。
「亮介ちゃんひとりだと心配だから」
「心配って……」
「手紙のこと言っとけよ、例の『工藤らん』のやつ」
窓の外に目をやりながら、希沙良がそれだけ言ってよこした。

「たいへんな変貌ね」
狭い通路へ出て少し歩いたところで、冴子が言った。
「え？」
何のことだか察しがつかず、亮介は訊きかえす。冴子は片手の指で後方の個室のなかを差し示してみせた。
「強がりでもポーズでも、続けてられるなら評価されてしかるべきってことよ」
「……ああ……希沙良が？」
冴子の評価の仕方もどこか特殊なものがあるのだが、亮介としてはその言葉に異存はまったくなかった。
「何か……巻きこまれてく感じがするな、こっちまで……」

いつの間にか浮上させられている気がする。

動かずにいられない方向へ、知らぬ間に誘導されている気がするのだ。彼ひとりが存在するおかげで。

「凄く、ありがたいことだと……思ってる」

言葉を選びながら、亮介は呟いた。

「いずれはこうなる必要があったってことだと思うわ。十九郎君が何考えてたかは知らないけど、元々カヤの外に出されておとなしくしてる性格じゃないもの、あれって」

「……確かに……」

「だけど今まで、だからってカヤの内側まで入りこんでくる大義名分がなかったってわけじゃない？　逆に、邪魔になるとか負担かけるとか、ネガティヴなイメージばかり先立ってたみたいだし。そう思いこませちゃった十九郎君のほうに責任がまったくないとは言えないけど、結局そこで大義名分なんて、おまえがそこにいるだけで充分だなんてひらきなおられたら、いくら十九郎君が優秀な戦略家だってどうしようもないわよ、もう白旗あげて降参するしかないんじゃないの？」

ごく冷静な口調で、さらりと冴子はそんな言い方をする。

「な……なんか、凄いね」

そこまで客観的かつ適確な分析は、自分にはできない。亮介はため息をついた。

「こんなこと考えなくていいのよ」
どこか憮然とした風情で冴子が答える。
「だって考えるだけバカバカしくなってくるじゃない？　マジメに心配するだけ損よ」
「……そ、そうかな……」
それはそれで斬新な意見なのでは、と亮介は思う。
「今回の件で学習したのよね、あたしは。あの人たちは、あの人たちだけの世界で生きてるんだから、放っといてあげればそれでいいのよ。どうせ引き離したって離れようがないんでしょ？　しかもそれを本人たち自覚したうえでやってるんだから、今更救いようがないじゃないのよ、勝手に二人だけで幸せになってればいいのよ、祝電の一本くらいは打ってあげるけどって感じよ」
「なにもそこまで投げやりに……」
「これぐらい言わせてよ、くやしいんだから、あたしは！」
がん、と靴の踵を足元にたたきつけて、冴子が声をはりあげた。え？　と亮介は呟いた。
「そうよ、くやしいと思わないの、亮介ちゃんは!?　あんなもの見せつけられて全然平気でいられるわけ!?　あたしはくやしいわよ、情けないわよ、なんで全部そういうふうに行かないのよ、簡単きわまりないことのはずじゃないのよ!!」
「なっ、何……？」

いきなりの連続攻撃にしばしたじろいでから、亮介はふと目を瞠った。

（あ……そうか……）

全部が簡単にそういうふうに行くなら。

「情けないじゃないのよ」

もう一度、冴子が言う。

「……簡単に見えるけど、きっとそうじゃないんだよ」

亮介はそう答えた。

誰もが今の希沙良のように余計なものをかなぐり捨てて走れるなら、自分たちはこうして分裂などせずにいられるはずなのだけれど……。

「希沙良だって、今、本当はぜんぜん楽じゃないと思う……」

「だけどそれくらい百も承知で、無理でも虚勢でも、どんな死に物狂いになったって、自分の気持ちに嘘をついたって、それでも絶対にあきらめちゃいけない時ってものがあるのよ！」

拳を握りしめて冴子が言う。亮介は首を横に振った。

「そうだけど……！」

「他の誰があきらめたって知ったことじゃないわよ、どうでもいい人間に期待なんかしないもの、最初っから！　あたしが言いたいのは、自分がどうでもいい人間なのかどうかもわからなくなってる奴に何を期待したって無駄にしかならなくて――」

「それは、そうだけど、でも厳しいよ……！」
冴子の言葉を思わず遮って、かぶりを振りながら亮介は訴えた。
「正しいけど辛いよ……！　だって諒はちゃんと見てたんだ、ずっと本当の忍さんをわかって見てたのに、放り出すみたいにしたのは、先に裏切りみたいな真似をしたのは忍さんの……」
そこで亮介は声を呑みこんだ。
自分がどんなに非道いことを言ったのか、考えるだけで全身が苦しくなってくる。
「ごめん……」
少なくとも冴子にぶつけるようなものではありえなかったはずだ。
今、ここで口に出せるような名前ではなかったはずだ。
「本当に、ごめん……。謝っても仕方ないけど、今のは、俺の……」
「あたしが悪かったわ。やつあたりなのよ、ごめんなさい」
意外なほどあっさりと、冴子からはそんな返答があった。
「駄目ね、亮介ちゃんがそこにいると安心してつい愚痴なんかこぼしちゃうのよ」
「言う権利が、あるんだと思う……」
亮介は口ごもる。
彼女にはそれだけの権利がある。責める権利も、泣く権利も、すべての現実を詰る権利も。

むしろ今、彼女が平気でいられることのほうがずっと不可解で……。

「違うのよ、あたしが情けないのは、結局いつもあたしの力だけじゃ足りないってことなんだわ——諒にはね」

視線をふわりと泳がせて、冴子が言った。

「……」

亮介は答えられない。答えようがなかった。

「だからあの人は必要なんだわ。押しつけだけど、責任転嫁だけど、だからあの人にとってどんなに辛くても残酷でも、それでもあの人はまだ必要なんだわ」

「……」

「あんまりな言い方してるって思う？　でもあたしは平気よ、覚悟なんかしてたもの、昔から」

覚悟……？

「最初からわかりきってるわ。永く生きられるような人じゃないわ。生きてても重荷ばかりだわ。がんじがらめに縛られてそれでも生きてる意味があるなんて言えない。忍様はそういう人よ、それはわかりきったことなのよ」

「……」

「だから覚悟なんかしてるわ、あたしは。いつかあの人がこんな風にいなくなることくらい、

知ってたもの……子供の頃から、生まれた時から、ずっと考えてたのよ」
「……」
「あたしは平気だわ、いつあの人に捨てていかれても。だけど……」
「……うん……」
冴子はそれ以上言葉にしなかった。亮介はただ、頷いた。
（永く生きられるような人じゃない）
当然なのだと冴子は言う。自明の理、なのだと……。
（知っていたから）
遠い昔から、ずっと、ひそかに。
「きっと、それはそれで……悲しい、ね……」
ぽつんと呟いた亮介に、ばかね、と冴子はかすかに笑った。
「伊達にあの人の妹やってるわけじゃないわ」

III

工藤珈織のマンションから希沙良が発掘してきた手紙について、十九郎の反応はあくまで事務的なものだった。――要するに、得られた情報に沿ってそのまま工藤珈織を追いつづけるように、と指示を下しただけで、それ以上の言葉は彼からは語られなかった。

「名前が……」

テレホンカードの度数を気にしながら、亮介はぎこちない舌を動かした。なんだかひどく喋りづらくなっているのは、何故だろう……？

「その、工藤らんっていう名前が、ひっかかって……彩ちゃんの電話のこともあるから、それでつながるんじゃないか、ただの『実家』じゃすまないんじゃないかって、希沙良が」

『わかった、それは調べてみるよ』

「……」

突き放されたような気分になる。

もちろん、里見十九郎の態度に明確な変化があるわけではないのだ。
いつも通り――いや、むしろ普段より一層、ある意味で自制的な……つねに、こちらへの気遣いを忘れない話し方で。
けれど。
『他には、何か？』
「……あっ……」
亮介は受話器を握りしめたまま立ちすくむ。
きっと十九郎は何かを伏せている。
何を、などと……今更、迷うまでもないことだ。
どんなことより真っ先に亮介が訊きたかった事実を。
だがそれを彼が語ろうとしないのなら、つまり……。
『崎谷君？』
「あ……」
もう少しで亮介は口に出して、問いただしてしまうところだった。
（諒は）
「いいえ……」
無理やり声を断ち切って、亮介は答える。

「いえ……何も……」

『……わかった』

信じること。

ただ強く信じつづけること。

今、亮介にできることがあるとしたら、それだけではないのかと……そう告げたのは他でもない里見十九郎本人だ。

意地でもいい。わざと亮介は唇を噛みしめた。あのときの言葉を、自分から裏切るわけにはいかなかった。

……もう、今までに何度、自分たちは信じることに失敗してきただろう。

『じゃあ、また』

短く言って、十九郎は通話を終わらせた。はっ、と亮介は胸をつかれた。

もしかしたら、同じ時に、十九郎もまた、彼を置いて遠く離れてゆく誰かについて——もう彼自身の手では守れない場所まで来てしまっている従弟の——その安否を、その言葉を、動向を——尋ねようとすることを、自らに禁じていたのではないだろうか？

この自分と同じ理由で。

亮介がそう気づいたのは、すでに受話器が降ろされてしまった後のことだった。

＊　＊　＊

意外なことに、鷹木文彦はいまだに都内にいた。

〈雷将〉勝呂ともなればそれこそ真っ先に、工藤珈織の故郷である『大阪』に着目していてしかるべきだと、十九郎のほうは読んでいたのだ。

『そいつは非常に正しいご意見なんだが』

携帯電話で呼びだされた文彦は、十九郎がさりげなくのぞかせた疑念に対して、そんな言い方をしてみせた。

『残念ながら、俺くらいお偉いさんになると、余計な後始末なんかも絡んできちまうのさ、身内の恥ってやつだが』

「……何です？」

『美しくもないお話だ、パスさせていただきたいな。おまけに飛行機の時間も迫ってるのさ。バッドタイミングだったな』

背後から漏れてくる搭乗アナウンスが、その発言を裏付ける。

（羽田空港か）

となると、行き先は大阪空港だ。

だからといって、余計な後始末、という彼の言葉をそのまま見過ごしてやるわけにはいかなかった。……おそらく、彼〈雷将〉勝呂と〈伽羅王〉斎伽忍との間にくりひろげられた戦闘によって、この大都会のあちこちにひそんでいた妖者たちにも、ただならず、影響は及んでいるはずなのだ。そして、そこに九那妃の力の片鱗を見たものも、決して皆無ではありえない。

文彦の足をとどめさせた要件があるとすれば、それら厄介な波紋についての、妖者将軍の長としての後始末ということになる。

「雷将勝呂の名にかけて、後顧の憂いはいっさい絶ってある、と……あなたが明言してくださるなら、こちらはそれでかまわないんですが」

『物っ凄く、いやな言い方をする奴だなあ、貴様は』

つくづく実感したというように文彦が呟いた。

「知っていますよ」

『居直らなくても結構だが。ああ、そうだな、ならひとつ忠告だけはしよう。できるかぎり厳重に、伽羅王の——いや、〈器〉の在り処を伏せておけ。それくらい貴様らの力でもできるはずだな？』

「……」

十九郎は眉をひそめて、沈黙する。

当然、その必要ならこちらでも考えていたのだ。しかしそのように、文彦があえて忠告して

くるのなら、やはり……。

「他の二将が出てくる……。あなたがおっしゃっていることは、そういう意味にしかとれないが、間違いはありませんか」

『心っ底、いやな奴だな、貴様は』

文彦は苦虫をかみつぶして唸っている。演技でも諧謔でもなく、どうやら本気でそう思っているようすだ。別にどう評価されたところで十九郎の良心はいたまない。何を今更、だ。

「初めから、あなたにはそのことを確認しておきたかった。彼らとは、我々も、これまでに縁がないわけではないので……。この好機を〈炎将〉剋司、〈幻将〉皓、どちらも黙って見過ごすとは思えない。あなたがもし三将の長として彼らの動きを掌握しきれていないのなら、協力体制を結ぶ以上は、先に一言いただきたかったものだが」

『あああ、まったくだ、そのとおりだ、俺が悪かった、そう言えば満足か？』

「誤解されては困る」

声を荒らげるかわりに、白刃をぬいて斬りかえすような冷ややかさで、十九郎は短く答えた。

ざれごとには興味がないのだ。

『……そうだ、まったくもって、誤解さ。やれやれだな、さすがにあの厭味な神様の教育がゆきとどいていると見える』

いまいましげに舌打ちしてから、文彦が話を戻した。

『ぶっちゃけたところを申し上げればいいんだろう。貴様のご想像のとおり、九那妃様がいらっしゃらない以上、連中の首に縄をつけようったって無理な話だ。例のやかましい小僧は雲隠れしやがるし、もう一方の年増女ときたら受けた恩も忘れてケンカを売ってくる始末さ』

（遅い）

なぜそれを真っ先に示唆しておかなかったのか、と文彦を責める言葉なら十二分にあったのだが、三将の長としては明かしがたい内幕であることもわかる。今となっては水掛け論だ。十九郎は少し間をおいた。

……すでに希沙良が妨害にあっている。

工藤珈織の自宅で、というところが問題だ。

ためしに、それが文彦自身のしわざであったのか否かを問うてみる。

『冗談ではないな、なんだって俺がそんな不毛な駒を据えておく必要がある？』

文彦はその事実に意表をつかれたようだった。

「不可解であるという点では、同感だ。我々が彼女を追うのを、闇雲に妨げたものとしか……」

『そんな阿呆な真似をやってのけるのは、あの小僧くらいだろう。……待てよ、あのガキ、まさかとんでもなく笑えない大ボケをぶちかましてくれたわけじゃあるまいな……』

不意に、文彦の声音には、深刻な表情がただよいはじめた。十九郎は口をはさまずに、彼のくだす判断を待った。

罠をしかけたのが、文彦の推理にまちがいなく〈炎将〉剋司であったとしても。

これまでまったく一連の事件にかかわっていなかったはずの剋司が、工藤珈織のマンションを知っており、そして彼女を追うものの存在を意識しているとしたら、それは妙なのだ……。

『……わかった、とにかく俺がそちらのケリはつけてやるさ。で、もはや切実にフライト直前ってやつなんだが、そろそろ解放してもらえないことには、貴様の大切なお仲間を援護することすらままならないぜ、いいのかな？』

「……」

時間が迫っているのは事実だろう。それが口実に利用されているかどうかは、ともかくとして。

「ひとつだけ訊きたい。――工藤らん、という名に憶えはありますか」

『らん？　……ああ、蘭、か？　懐かしい名前だな、もちろん承知だが』

あっさりと、文彦からは簡単すぎるほどの返答があった。

『めんどうな小姑さ。九那妃様の〈使〉だ』

＊　＊　＊

同時刻、斎伽の護り役、すなわち〈道者〉のひとりである不破武人は、ともに四人衆と呼ばれる立場の明石川耕宇をひきつれて、武蔵野の一角にそびえたつ七瀬家本宅へたどりついたところだった。

そびえたつ、という印象は、決して武人の誇張ではないはずだ。巨大な敷地のなかに悠然とたたずむその邸宅は、すでにひとつの城と化している。

「魑魅魍魎の巣窟、というやつだな」

最先端のオートセキュリティシステムによる厳重な身元チェックを通過したのちに、ようやく重苦しい門がひらき、彼らの乗るホンダ・インテグラを迎えいれる。ハンドルを握る武人がついそう愚痴をこぼしたのも、それだけの警備コンピュータを総動員して保護すべきものは何なのか、と問わずにいられなかったからだ。

すでにこの館では、いったい誰が最大の権力をもつのかすらわからない。七瀬家、と銘打たれていながら、ここに存在する『七瀬』の名をもつ人間の数など、片手の指でことたりる。

あとの大部分は、七瀬の血にしがみつく傍流のものたちだ。分家の義務と称して、必要性もないのに、寄生するように、この館の内部に踏みとどまっている。

すべては示威行為だ。分家同士の、熾烈な利権の奪いあいがくりひろげられているだけの話なのだ。

「滅多なことを言うな」

助手席におさまっている明石川耕宇が、憮然としたように呟いた。

「貴君の言いようは、つねづね革命的にすぎてつまらぬ」

「めずらしく、我が忌憚なきところを語っているのにか？」

「それが本音とわかるから厄介なのだな。せめて冗談だと思わせる訓練くらいは、すべきだと思うが？」

「……なるほど、奥の深い助言だ、明石川先生にしては上出来と申し上げよう」

「もうひとつ助言しよう、貴君は俺を茶化すのを俺への礼儀だと誤解しているふしがあるぞ」

さらに不愉快な表情で、明石川は腕組みをしながら唸る。

「同年輩の気安さというものだ」

武人は顔色ひとつ変えずに、きまじめな言い方をしてみせる。

「嘘をつけ」

「私が明石川に嘘をついてどうなる？　貴君は容易に騙されすぎておもしろみがない」

「――おい！　俺は貴様のそういうところがだな……！」

すとん、とインテグラのエンジン音がやんだのはその時だった。あっさりとキーをぬき、武

人は傍らのドアをひらく。
「到着したが」
「見ればわかる！　……俺は貴様のそういうところが我慢ならぬな」
「しかしこれまで我慢してきた以上、ここでやめるのは口惜しいといった境地ではないかな、明石川ともなれば」
「臆面もなく……。ちょっと待て」
ふと明石川は運転席ごしに大きな身体をのりだして、武人のひらいたドアを再び閉じた。
館の地下にしつらえられた駐車場は、閑散として、人影はほかにない。しかしこの、五十台以上の車両を収容する大駐車場に、どのような配置で監視システムのカメラがひそんでいるか、当然のことながら彼らは熟知している。――システムの死角にあたる部分も、だ。
武人が車をとめた箇所は、ぬかりもなくカメラの可動範囲をはずれている。明石川がドアをしめたのは、さらに会話がマイクに拾われるのを避けるためだった。
「……くどいようだけどな、どうにも俺は腑におちてないんだ。この期に及んで、いまだに何ひとつわからないってのはどういうことなんだ？」
「それはあくまでプライベートな発言ととっていいのか？」
がらりと口調を変えた明石川に対し、武人は慎重に尋ねる。
「あたりまえだ、でなきゃこんなこと不破に言えるか」

道者としての役回りをはずれて、個人的に語りたいということだ。その切り替えは明確におこなわれなければならない。

四人衆のひとりとして動くとき、そこに個人の感情がもちこまれることは決して許されないからだ。

「俺が咸月だったら、真っ先に里見を呼びだして釈明させている。この事態の全貌をあきらかにしてみせろ、と」

「里見なら、今は呼んでも来ないだろうと一真が言っている。……少し痛い目にあったのではないのかな、あれは」

「ますます不遜じゃないのか!?　奴の独走じゃないのか!?　それでひきさがる遠野の神経も俺にはわからないな……！　いつまで奴にでかい顔をさせておくつもりなんだ、あいつは!?」

「確かに、一真には荷が重いかもしれないが……」

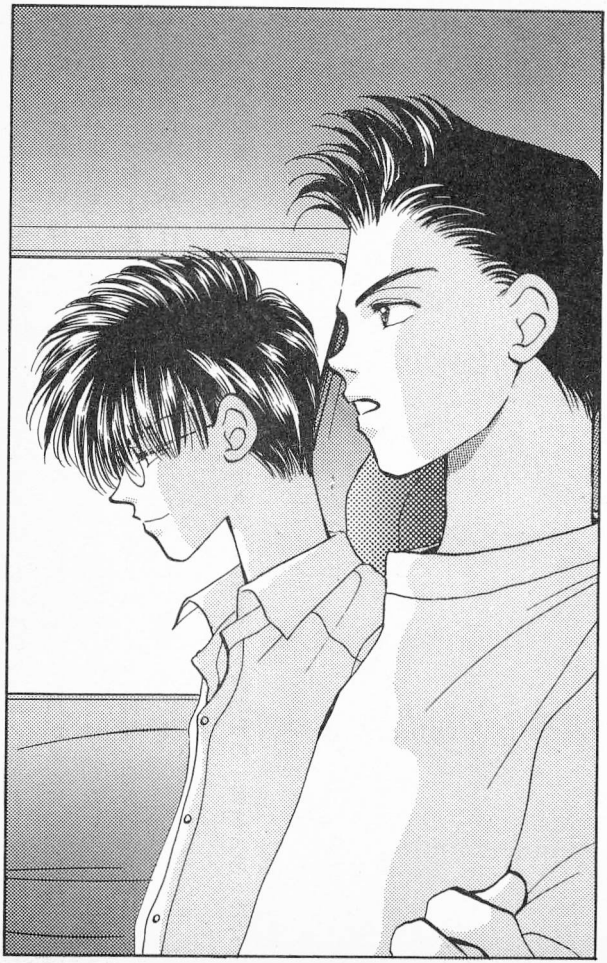
武人は言葉をにごした。

「妙に潔癖なところがあるからな、あいつにも……。もう少し肩の力をぬけば楽になれるかと俺は思うんだがな……」

「とりあえず俺も同感はするが、青少年の人生相談やってる暇はないぞ」

つまらなそうに明石川がそんな台詞を吐いた。武人はため息をつく。……まったくそのとおり、なのだ。

「そうだな……。ときどき、明石川はずばぬけて正しいことを奇跡的に言うから困る」
「ときどき奇跡的に、は余計だ」
現在、遠野一真は鎌倉方の護りを——当然、ほかならぬ〈桜〉の間についても、だ——単身ひきうけて、むこうの屋敷に居残っている。
四人の〈道者〉のうちでも特に勘のすぐれる咸月陣は、あらゆる『気』が不吉な色に満ちている、と他の三人だけにひそかに告げて、その気配の奥深くをさらに見極めるために、ひとり社に籠っている。
トップの咸月陣が動くべき方針をさだめず、そして里見十九郎と縁の深いはずの遠野一真によると、術者たちとのコンタクトは現在のぞめないという。
自分たちにすら事態の本筋がのみこめていないのに、それでどのように武蔵野の長老どもを黙らせるのか、と明石川は訴えたいのだ。
「それが我々の役目である以上、腑におちようがおちまいが、年寄りの連中に口を出させてはならない。そういうことだな、他に納得のしようもない」
「自分の本意でもないのにか!?　それで平気なのか!?」
明石川が尋ねる。武人はかすかに眉をしかめた。
「誰も平気じゃないからこんなことを言っている。だがここで悶々と唸っていてどうなる？——行こう」



インテグラのドアを今度こそ押しひらいて、武人はしらじらとしたコンクリートの平面に降りたつ。なにか言いたげに、だがやむなく口をつぐんだ風情で、明石川があとにつづいた。

自分たちが事態をつかんでいないからこそ、長老どもに先をこされてはならないのだ。武蔵野方を牽制しておく意義は、迷うまでもなく、かならずある。そんな理屈を自分のうちに持ってはいながら……武人は、いったいここに何が足りないのかを知っている。

一言でいい。

唯一の〈空者〉、そして自分たちすべての長である、七瀬忍——彼からの一言さえあったなら……。

第五章　前哨

I

「おい、なんだか変じゃないか？」
二人分のシートを独占して悠然と両足を投げだしていた希沙良が、ふと呟いたのは、列車が名古屋を通過してしばらくたったころのことだった。
「変？」
冴子が問いかえす。
はっ、と亮介は瞼をひらいた。無理にでも休んでおけとふたりに強制されて、やむをえず頭から上着を――といっても、亮介の上着ではなく冴子が希沙良から勝手に奪いとった代物だ――かぶって仮眠の真似事だけはしていたのだが。
「スピードが落ちてる……」
ひとりごとのように言った亮介を、冴子がふりむいた。
「走り方が、おかしい。ブレーキかけてる感じじゃなくて……」

「ちょっと待て、おまえ大丈夫かよ」
希沙良が口をはさむ。亮介の顔色が思いのほか青ざめて見えることに気づいたのだ。
「うん、あんまり……よくないみたいだ。これって、多分……」
妖気、だ。亮介がそう言葉にするまでもなく、冴子と希沙良にはともにその意味が伝わったはずだった。
「やっぱり、新大阪駅まで平和におとなしくってわけにはいかなかったわね」
「ったく……結局そういうこったろーと思ってたけどさ……」
希沙良がいまいましく舌打ちして、リラックスしていたシートから、いつでも動ける姿勢に座りなおす。暗い窓のむこうに、冴子が目をこらした。
「止まりそうだわ」
冴子の声が合図のようだった。ゆるゆると新幹線は速度を落とし、不意に、つんのめるように大きく揺れたかと思うとそのまま停止してしまった。
亮介は強く眉をしかめて、感覚の底のほうに触れてくる、ずっしりとした何かをさぐりあげようとする。神経の使い方としては、ずっと遠くから飛んでくる鳥の羽音に耳をすますのと同じようなものだ。……決して容易になにもかもが伝わりはしない。
「……前に何かあるんだ」
「前って、どいつの」

「これの前だよ」
怪訝な顔をした希沙良に、亮介は自分たちの足元を指さしてみせた。
「何だそりゃ……。塗り壁でも立ってるってのかよ」
スピーカーから車掌の声で、制動機器に故障発生云々、とのアナウンスがはいった。
「故障なんかじゃないよ、きっと」
「まあ、勝手に止まっちゃって原因は不明です、なんて言ったら乗客が黙ってないってことじゃないの？　この手の事故って、なんでか知らないけどやたらマスコミにたたかれるものだし」
「それでどうするって？　いつまでもカンヅメくらってるわけにいかねえだろ」
尋ねながら、すでに希沙良は立ちあがっている。
本当にそのとおりだ。亮介は頷いた。
「あのさ、今、俺たちだけ黙って電車の外に出るのって……無理かな」
「いきなり線路に客が出ていったら、めちゃくちゃ驚かれるわよ、当然」
「それはそうなんだけど……」
「そうね、なんか別のことで注意をそらすとかして……」
腕を組みあわせ、冴子が考えこむ。いらいらと希沙良がつまさきを鳴らした。
「いちいちめんどくせえな、新幹線のドアなんか適当に壊して、あとでくくりつけときゃいい

んだろ？」

「あなたねえええっ、そういう見通しが何につけても毎回あまりにもアバウトだっていうのよ、どうして発想のひとつひとつがことごとく杜撰なのよ、もう少し計画性のあるアイデアに絞って口に出すようにしなさいよ、頼むからっ!!」

「そこでガタガタ連続技で悪口雑言くらわすんじゃねえっ!!　気に入らねえなら気に入らねえって、一言ですませりゃいいだろ!?」

「一言だけで学習と反省と改心をいっぺんにすませてくださる相手だったら、はじめっから何も言ってないわよ」

ずばりと一刀両断されて、さすがに希沙良がぐっと返す言葉につまったところで——言葉につまってしまったこと自体が、希沙良にしてみれば屈辱的なことなのではないかと亮介は想像するのだが——慌てて亮介はふたりの間に割ってはいった。

「ふたりとも、ちょっと待っ……。外の様子が、なんだか……」

「え？」

亮介の言葉に誘われ、冴子がふたたび窓の外を見やった。直後、その両眼が大きくひらかれた。

「……霧だわ」

列車の前方から、じりじりと浸透するように、グレイの影が流れてきている。ガラスにぼん

やり浮かんでいた夜景が消えうせ、窓一面が、あっという間にその灰色に染められた。
「おい！」
声と同時に希沙良が片腕をのばして亮介の胸元をつかまえた。一歩遅かったら、そのままっすぐに個室の床に崩れおちていたところだ。
「何やってんだ、危なっかしいな、おまえ……」
「ご、ごめ……」
ぐらつく頭をおさえながら、亮介は口ごもる。
ただの霧、なのだろうか？　この気分の悪さは、はげしい目眩は、まるで、ひどく濃密な妖気につつまれたときの……。
「亮介ちゃんが参っちゃうのもおかしくないわ、この妖気の強さってば普通じゃないわよ」
隣から冴子が庇うように手をさしのべ、亮介の肩をささえた。――ふっ、とそれだけで感覚の苦痛がやわらいでゆくのを亮介は自覚する。
穢れた気配が遠ざかり、すべてを浄化する、透明な力が満ちてくるのだ。
「つまり何か？　霧に見せかけた妖気ってやつか？」
希沙良はいやな表情になる。
「俺の専門じゃないぜ、そのあたりは……」
「だったらここで訓練しておきなさいよ。それくらい相手にできなくちゃ困るじゃないのよ、

先々」

「簡っ単に言うなよ、おまえもっ!!」

「なんにしても、これって不気味だけどチャンスでもあるんじゃないの？　この霧があるかぎり、あたしたちが線路に出ようが外で何をしようが、車内からは見えないんだから」

転んでもただでは起きないとばかりに、冴子がそう提案した。ふん、と希沙良は不満げに呟いている。

「で、どうやって外に出るって？　出してくれって車掌に言ってドアあけてもらえるもんでもないんだろ？」

「そんっなのあたりまえじゃないのよ!!　この際、ドアなんか適当に壊して、あとでちゃんとくくりつけときゃいいのよ」

「……おまえって女はよ……」

乗降用の自動ドアを強引にこじあけた末に、勢いをつけて高架線路にとびおりると、希沙良は向かい風にさからって列車前方に目をやった。意外なほど強い風が吹きぬけてゆくのに、グレイの霧はどんよりと溜まったきり動いていない。

「たしかに奇妙だな、こいつは」

自然の法則というものを無視している。
「どうなんだよ、崎谷」
「うん……」
ひらいたドアから半身をのりだして、亮介は希沙良と同じ方向を見ている。冴子がずっと隣にいてくれるおかげで、これだけ凝縮した妖気のなかでも、なんとか凶悪な目眩からは救われる。
「どうでもいいけどさあ……なんか、おまえらって幼稚園児と教育ママみたいじゃないか？」
亮介の腕をつかまえた状態でぴったりと離れない冴子に、希沙良が少々げんなりしながら言う。
「ほんとにどーってもいいわね」
「だよな、ほんとになっ」
徹底して冷ややかな返答に、ほとんどヤケになって希沙良が同意した——そこに、
「壁だ」
突然、亮介が口走った。あ？　と希沙良が問いかえす。
「だからそこに壁があるんだ。ほら、さっき希沙良が言ってただろ、『ぬりかべ』が立ってるって……まさにそんな感じで」
「いきなり変な話題に戻すなよ……」

分厚く不透明な気体の壁が、線路上に、頑とそびえているのだ。亮介の目にはそれが、微光を含んだような、はっきりした映像として浮きあがって見えてくる。

列車はちょうど、その壁に突きあたって一車両ぶんほど貫通したところで停まっている。粘土で胴体をかためられたように、がっちりとつかまえられたきり、まったく動きがとれない状態だ。

なんとかして、そこにある壁を消し去ってしまえれば……。

「一種の結界ってことだわね、ものすごく即物的だけど」

冴子がそう論評した。

「こういう風な通せんぼの仕方って、動機が明確で、なんだか好感が持てるじゃない?」

「んな好感、どこ捜したってカケラも出てこないぜ」

「あら、あたしには見えるわよ、こっちに来るなっ！　て大声で叫んだあげくに自分の居場所を自分でバラしてるタイプの敵さんが」

「……そういやその手のガキで、妖気ばらまくのがやたら得意な奴がひとりいたような気がするよな」

不機嫌に希沙良は呟き、亮介がさししめした先にゆらめく妖気の影を睨みながら、とりあえずの打開策を捜した。

いわゆる結界破りほど、希沙良の術力の性質からはずれているものはないのだ。

（俺がやる必要もなかったんだ、いつも）

しかしこれくらい相手にできなければ、先々困る。……間違いなく冴子の言うとおりだ。口惜しいことに。

「結界ってことは、どっかに全部を支えてる大本があるだろ」

確認するように希沙良が言う。

「時にこうやってあらかじめ仕掛けてある罠なら、多分ね」

冴子が頷いた。

「そいつが初めっからズバッとわかってりゃ楽なんだよな、全然」

「……そんなもの一目で見破られたらトラップにならないんじゃないの？」

「うるせえなあ、俺は崎谷に言ってんだろ!?」

希沙良は癇癪をおこしたが、残念ながら亮介としても、妖気の壁を形成する核になる部分までは読みとることができなかった。

まあいいさ、と希沙良はひとりごちる。

やる前からあれこれ考えていても仕方ない。がっ、と両の手首を重ねあわせて、希沙良は意識を切り替える——最も根源的な、本能に属する領域まで。

術力が光となって、握りしめた拳に集中する。この〈手刀〉という戦闘形態に、希沙良はまったく不満を感じるつもりはない。他人の能力をうらやむ気もさらさらない。

ただ、光の剣や〈発火〉の術、あるいは結界による〈縛止〉の技が使いこなせた場合と同じか、それ以上の……強力な戦い方さえ、できたならいいのだ。

「とにかく塗り壁ぶっこわしゃいいんだよな……。おまえら変に動くなよ、そこから！」

亮介たちに向かって、背中だけでぶっきらぼうに言い捨てて、希沙良はその場から勢いよく走りだす。暗い高架線路をダッシュして問題の先頭車両までたどりつき、まずは挨拶とばかりに固めた右の拳を分厚い影へと——。

「！」

はっ、と希沙良は息を詰め、間一髪で身をひるがえした。シャッ!! と正面から突きだされた気体の刃は、肌に触れるギリギリのタイミングで後方に流れてゆく。

（針!?）

思わず、そんな錯覚が脳裏をかすめたほどだった。ごく鋭く尖らせた妖気の〝長針〟が、瞬発的に、こちらの不意をついて撃ちこまれてきたのだ。

一発目をかわした先を狙うように、凄まじい速度で二発目、三発目が連続した。反射的に足元を蹴り地面に片手をついた勢いで一回転して、希沙良は隣の線路上までとびのく。身を起こした膝の下で、砂利がいやな音をたてた。

それだけの距離をあければ、追いうちの攻撃は届かないようだった。しかし……。

どうやらこのトラップを仕掛けた張本人は自分の芸術作品に触れる者すべてに対し、無差別

で制裁を下そうとしている。要するに、近付いただけであの針の餌食ということだ。

「ハリネズミじゃねえんだから……」

厄介なことにこちらは接近戦しかできないときている。

希沙良はひとつ深呼吸して、自分自身の周りに、可能なかぎり堅固な結界を発生させた。どこまで通用するものかはわからないが。

間合いをはかってから、あらためて、再挑戦のスタートを切る。ちょうど一発目の不意打ちをくらった元の場所をめざして、希沙良は一気に跳躍した。

ザウッ！　耳元で空気が唸った。見事にさっきと寸分違わない、目標の壁から二メートル弱といった範囲の枠が、妨害のはじまるボーダーラインとなっていた。希沙良はかるく舌打ちをしつつ高速で身体の位置を後退させる。やはり自分の結界ではまったく防ぎきれていないではないか！　来襲する〝妖気針〟の大群を前にして、それはせいぜい薄絹一枚程度の意味しかもっていない。常人ばなれした運動神経だけを頼りに、希沙良は数えきれない迎撃の雨から、かろうじてぬけだすことに成功する。——いや、成功した、はずだった。

「っ！」

まさか背後に逸らした一本が、はねかえってくるとは思わなかった。左肩に予測しなかった激痛が突き刺さり、希沙良は奥歯でその衝撃を噛みころしながら二メートルの範囲外へと転がり出た。

痛みというより、なにか巨大な力で思いきり殴られたような重苦しいショックが全身をめぐる。吐き気を振り払い、強引に頭を持ちあげて、希沙良は体勢をたてなおす。

（馬鹿にしやがって）

背中にじりじりと濡れた感触が広がってゆくのがわかる。左腕は完全に痺れたきりだ。無事に動くほうの右腕で乱れた前髪をかきあげて、希沙良はもう一度深く息をついた。

＊　＊　＊

不意に、左肩を、鋭い錐で射抜くような痛みが襲った。はっ、と右の掌で傷口をおさえようとして、十九郎はそれが一瞬だけの幻だったことに気付いた。

「……」

いやな想像が即座に生まれたが、だからといって今ここで何ができるというものでもない。電灯は無事についているのに、なぜか室内は不自然に暗い気がする。殺風景、なのだろう。十九郎がこの六本木の部屋を訪れるときはいつも、閑散とした空気を補ってあまりある『彼』の存在が必ず先にとらえられて、そこを占めている本来の寂しさまで感じとることができなかったのだ。……この部屋に来ること自体が、そう度々ありはしなかったのだが。

今は砕けた鏡の破片さえ、そのままに放置されている。あえてそれらに触れようという気分

は、十九郎にはおこらない。

ふと、十九郎は割れた鏡のむこう――外部からの気配を、感覚の片隅に察知した。誰かが近付いてくる……。

なじみのある波動（オーラ）ではなかった。斎伽忍（さいがしのぶ）を訪ねてくる者など、この状況に、まさかあり得るだろうか？

考えられるのは、なにか不吉な意図を抱いて到来する、招かれざる客か、あるいは本家方の――。

（違う）

戦闘的な方向へ流れかけた意識を、十九郎はかろうじて引き戻した。

（この相手ならどこかで……）

一階からエレベーターが上昇し、かすかな足取りが九〇七号室の前にたどりつく瞬間を見はからって、十九郎は黒い扉を押しひらいた。

「！」

予期しないタイミングで開かれた扉に、訪れた人影は思わず一歩あとずさったようだった。

彼女の姿を認めて、十九郎もまた別の意味で少なからず驚いていた。

「……ああ……君だったのか……」

「あ……突然で、ごめんなさい……。来る前に、電話すればよかったのに……」

恐縮してそう呟いた人物の正体は、コンビニエンスストアの袋を片腕に抱えた、神原亜衣だった。

II

電話でコンタクトを取ったことなら最近に二度ほどあるのだが——一度目は水沢諒の負傷にあたって崎谷亮介へのフォローを任せた件、もう一度は水沢諒との仲介を頼んだ件だ——実際に彼女と顔を合わせるのは、十九郎にとっては久しぶりな機会のはずだった。

「話は……崎谷君から？」

そう尋ねてから、十九郎はふと思いあたって言い直す。

「いや、崎谷君に何か頼まれた……？」

「なんにも言わないうちからわかっちゃうんですか？」

小柄な肩をすくめてみせて、仕方ないというように亜衣は頷いた。

「崎谷君はとにかく、今は里見さんがひとりで残ってるから何か手伝える方法があるかどうか

考えてほしいっていうことを言ってて……とりあえずここに来たのはあたしの勝手な判断なんですけど。でもまずはここに来ないことには他にどうしようもないと思って。今、あたしが来るのって迷惑になってませんか？」

「ああ、それは大丈夫……」

大丈夫と言うわりにはあまりに自分の態度に余裕が欠けていることを、十九郎はようやく自覚した。こちらの邪魔になっていないかと、会うなり彼女が危惧しているのも、多分そのせいだ。

「迷惑なんて少しも感じないけれど……ごめん、今は本当に、純粋に驚いているだけで、他に頭がなにも働かないんだ」

「里見さんの場合、そう言ってる状態で、普通の人の三倍以上はいろいろ考えてる気がするけど……」

「買いかぶると後でがっかりするよ」

「あたし別に誉めてないですからね？　何か不健康なところに神経使ってるんじゃないかって言ってるんですから」

心配しているのか批判しているのかわからない台詞を、亜衣はすぱりと言う。どちらにしても辛辣であることに変わりはない。

「正当な評価だね」

苦笑しながら、ありがとう、と言い足して、十九郎は室内へ亜衣を迎え入れた。粉々になった合わせ鏡には、さすがに亜衣も凄惨な印象しか抱けなかったらしい。

「ひどい有様って、まさにこういうのをいうんじゃないかしら……」

「掃除くらいはしておけばよかったね」

「あたしがやりますから、それは。足の踏み場だけでも作らなくちゃ」

とたんにこの室内の雰囲気そのものが変化しているのはどういうわけだろう？　よほど——それこそ不健康に——張りつめすぎていたのだろうが……。

「食事とかも、何も準備してる暇なかったと思って、一応ミネラルウォーターとお弁当と缶のお茶とカロリーメイトと……適当にひととおりは買ってきたんですけど」

「水はありがたいな。残念ながら、今は、食べないでいたほうがいいんだ」

「え？」

「結界を張っているからね……」

鷹木文彦に忠告された一件だ。十九郎は背後の、奥の寝室へとつづくドアを指さしてみせた。

寝室を包む小結界を核として、二重、三重にかさねられた防御結界は、ちょうど先刻、そのドアの部分までを覆い呑みこんだところだった。

「結界って、今？　現在進行形で？」

亜衣は目をまるくしている。何を包む結界かはあえて尋ねなくともわかる。
「それって……そうしていて、里見さんは大丈夫なものなんですか？」
「隠しているぶんにはね、それほどひどく消耗するものじゃない。もともと、ここは結界が成立しやすい『場』になっているんだよ」
斎伽忍が自ら、本拠地として選んだ場所だ。そこには一種、霊場とも呼んでしかるべき、特殊な〝気〟を定着させる〝土壌〟が約束されている。
本来は、この建物自体が、ひとつの微弱な結界としての役割を果たしていたのだ。彼の強烈な存在感が、外部の妖者たちに伝わらずにすんでいたのは、そのためだ。今はその守護の力もことごとく失われてしまったが……。
「隠さなきゃいけない……んですね……」
亜衣が確認する。
「そう……あらゆる手を尽くして、伏せなければならない」
そして守りぬかなければならないのだ、何があろうと……。
フローリングの床にそのまま、十九郎は腰をおろした。そうだ、手段を選んでいることはできない。〈炎将〉剡司が、あるいはあの女が、いつどのようなかたちで攻め入ってくるかわからないのだから。
「神原さんが来てくれたなら、頼れることが二つ、増えたかな……」

呟いた十九郎に、亜衣はわずかに意外そうな表情をのぞかせる。
頼る——という言葉を、こだわりもせず十九郎が使ったからだ。
「どうしよう、里見さんに頼られるなんて責任が重大みたい……」
「そのとおりだよ、俺がこともあろうに女の子に縋るなんて青天の霹靂なんだから責任はかみしめていただかないとね」
「……それって威張れることなんですか？」
「……威張るというより、脅迫に近いんじゃないのかな。非常に利己的に解釈すると」
「里見さんってやっぱり了簡の狭い人だったんだわ」
大真面目に亜衣が言うので、十九郎はこらえきれずに笑ってしまった。こんなに、いちいち手応えのある相手もめずらしい。
「自明の理、だと思っていたよ、俺は」
「でも了簡が狭いだけの人ならたくさんいるし、それで自己嫌悪したり性格改善したりする人もたくさんいるけれど、なぜか里見さんって自分の性格わかりぬいたうえで、努力と精神力でその部分カバーしようとするから……変わってるんじゃないかな」
「気をつかわないで、見栄と体裁だけに走っていると言ってくれていいんだよ」
「そうやって偽悪的に言うでしょ？　そこで見栄を張りとおせば誰も何も言わないのに」
首をかしげながら、十九郎の正面に、行儀のいい姿勢で亜衣は両膝をつく。

「結局、里見さんって心の内側がきれいだからそうなっちゃうんでしょうね」
「……それも誉めているんじゃなくて？」
「あたしは誉めているんだけど、里見さんは言われたくないかも……。でもあたしは誉めたいから、それだけなんです。あたしってエゴイストですから」
「いや……いっそ、かえって心地が良いという感じだね」
嘘偽るところのない、本心からの感想だ。
「なにか、千里眼の持ち主と話しているような気がしてくるよ」
「っていうか、すぐこんな話題に持っていっちゃうのは、あたしの悪い癖で……。たいていの場合、あたしが何のこと喋ってるのかがそもそも相手にわかってもらえないで終わっちゃうんですけど……里見さんが相手だと、話が伝わりすぎて歯止めがなくなるみたい。なんだか、一発でカンッて音がはねかえってくるみたいで、ああこちらも次から次へとくりださないとこの人には全然足りないんじゃないかしらって、無言のプレッシャーがひしひしと来るような……」
「ひどいな、別にこちらは普通に反応しているだけなんだから」
「崎谷君や水沢君もね、めずらしく、あたしの言うことに、すごくまじめに相手してくれる男の子たちなんです。でも崎谷君あたりだと、その延長線上で必ず悩んで落ちこむことになって……なんでいつもそんなに苦労してるんだろうって、あたしから見ていると不思議以外のなに

ものでもないんですけど、きっと崎谷君はまだ自分のことをよく知らないんですよね……。もったいないな、あんなに可愛い性格してるのに……」

亜衣はふかぶかとため息をつくと、そこできっぱりと気持ちを切り換えたように顔を上げた。

「じゃなくて、その重大な二つの責任について話してもらわなくちゃ。あんまり時間って余裕あるわけじゃないんでしょう？」

「ああ……俺は今、神原さんの最後の一言に少し感動していたんだけれどね」

可愛い性格云々といった台詞をいともあっさり吐かれてしまうと、聞いている十九郎のほうが降参せざるをえない。目の前でくすくす笑っている十九郎を睨みつけて、里見さんの意地悪、と亜衣が唸った。

「そう、その責任の話をしよう。つまり、神原さんには今から行ってもらいたい所があるんだ」

本来の空気をとりもどしたのちに、十九郎は一枚のメモを用意する。記された数字は携帯電話の番号だ。——鷹木文彦の元へとつながる。

「先にまず、この番号を預けておく。もしも神原さんが外に出ているあいだに、この部屋で何かが……たとえば戦闘が起きていたりしたなら、そこに連絡してほしい。無事に電話がつながるとはかぎらないけれど、うまく連絡がつけば、多分彼が味方になる。いいね？」

「戦闘……？」
亜衣は短い呟きで、十九郎の真意を問う。
しかし十九郎は、直截には、その何かについて説明しようとはしなかった。
「それがひとつめの、俺からの頼みだよ」

＊　＊　＊

三度目の挑戦がそれまでと同じ結果に終わり、希沙良は苛立たしく足元の砂利を蹴りとばした。収穫なし、というやつだ。
「希沙良」
亮介の声が背後にたどりついたのはその時だった。
「何だよ、おまえら、変に動くなっつっただろ!?」
「誰も変に動いたりはしてないわよ」
人がせっかく大ケガ治してあげたと思ったらまた流血沙汰やってるし……と、冴子は恨めしげに呟いている。
「とにかく先に治すだけ治しときなさいよ、貧血おこすわよ」
「うるせえな、ちょっと待てよ……！」

額の汗を右腕で無造作に拭いながら、希沙良は灰色の霧のむこうを睨み据える。

「おとなしくしてろ、人が考えてんだろ、一生懸命……」

高圧的に立ちふさがる、分厚い妖気の壁。

まるで巨大な蜘蛛の巣か、でなければとりもちだ。

一定の距離をこえて近付けば雨あられの一斉射撃をくらって、厄介なことになる。ということは、一定の距離をこえずに攻撃すればいいのだから……。

距離を……。

「そう、なんだよな……」

説明は何もせずに自分ひとりで結論づけて、その場から一歩分だけ希沙良は後退した。たったの一歩で微妙にバランスを崩しているあたりがあまりにもシャクで、無理やり肩の位置をたてなおす。

(呼ぶんだ)

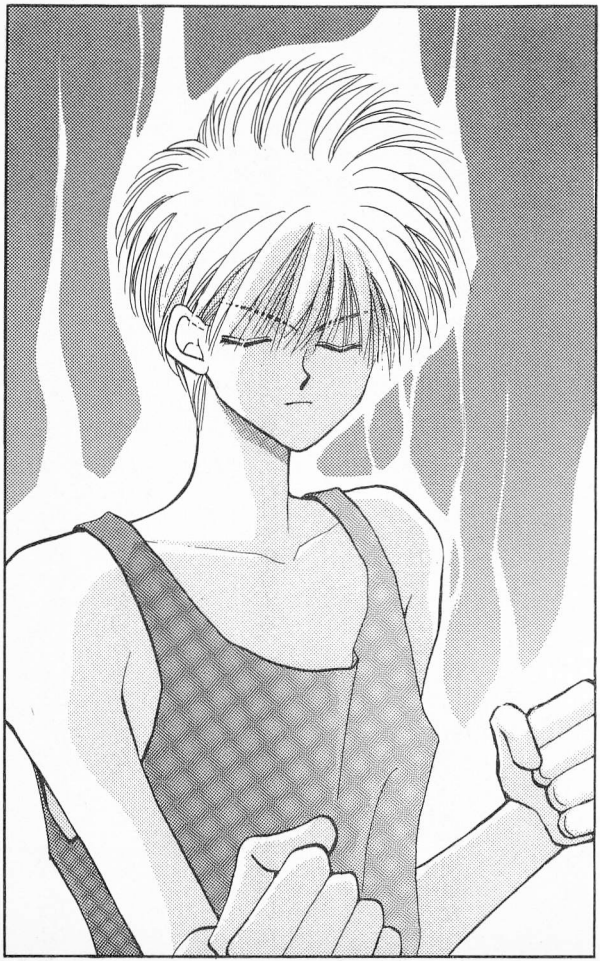
握りしめた拳。銀光を宿した指先が触れあう。

ものごころついた頃から、ずっと、この光とつきあってきた——あたりまえのように。

不満などもたずに。

それで事足りているうちは。

(呼ぶんだ)



（俺を）

けれどあたりまえの高さよりもう一段上の階段まで自分を押しあげる声を、今の希沙良は知っている。

願ったとおりのタイミングでいつも、スタートダッシュを切らせる一言を。

（いつもどおり）

他人の戦い方など羨む気はない。

自分にとっての階段しかそこにはない。

希沙良は両の目を閉ざし、自分自身の意識にむけて命令する。記憶の内側から、まちがいなく導くことを要求する。その声を。

……呼んでみせろ！

「！」

そのときの空白がどれほどの長さだったのか、希沙良にはわからない。

全神経がとらえていたのは、ただひとつ、いつだって背後から投げられる——ごく簡単な一言。

銃爪を引くように。

一瞬で。

『行け！』

かっ、と希沙良の視界がひらけたのはそれと同じ瞬間だった。
自覚している暇すらなかった。開放された力をそのまま、勢いに乗せて、希沙良は撃つ——。
標的に近付くことなく。足場を変えることもなく。
彼の手刀から放たれた術力が鮮烈な軌跡をえがいて宙を疾りグレイの霧を射ぬくのを、亮介は見た。ドオゥンッ！　と妖気を振動させてそれは分厚い壁面へくいこみ、即座に妨害壁のすみからすみまで拡散し侵蝕した。
（透ける……！）
亮介は息を呑んだ。
今の一撃が妖気の濃度に変化をもたらしたのだろうか？
「希沙良、右側だ！」
はっきりと、亮介の感覚にとびこんできたのだ。妨害壁をかたちどる力の構造が。
「線路の右の、標識のあるあたり……！」
「右!?」
かためた拳は反射のスピードにまかせて、ためらいもなく風を切った。
「ぶっつぶれちまえ、これでっ!!」
第二撃——白銀の閃光が不透明な影を貫いた。

III

それは、今までの希沙良が見せていた戦い方とは、まったく次元の異なるものだった。

彼が純粋な〈手刀使い〉として生まれついている以上、どのような場合にも、接近戦に持ちこまざるをえない——という大前提がつきまとってくるのは当然のことだったのだ。

まさかそこに宿した術力を、離れた目標物へ向けて撃ちこむことが可能になる、などと……想像のかけらもしていなかった。亮介はただ目を見開いて、列車にねばりついた結界の中心がはじけとび不快な妖気の粒子がひいてゆくのを読みとっていた。

「霧が晴れるわ」

周囲に鋭く視線を走らせ、冴子がそう指摘した。

両の手刀から光を消し去り、左肩の負傷を忘れたような身のこなしで希沙良が見返った。

「なにボーッとしてんだ、走れ馬鹿！」

「ええっ!?」

ふりむきざまに怒鳴られたと思ったら、ついでといわんばかりに襟首をつかまれて亮介は強引に走らされている。

「車掌にバレたら面倒だろうがっ」

「め、面倒って……」

しかしその前に怪我のほうはなんとかしなくていいのか。亮介は救いを求めて冴子を見やったが、後を追ってくる冴子の反応はさらにクールだった。

「バレるバレない以前に、ここであたしたち置いて発車されちゃったりしたら大笑いだわよ、亮介ちゃん」

「……なんか俺たち、東京駅でも同じことやってなかった？」

思わず亮介はそう呟き、生意気だという理由で希沙良に殴られた。

こじあけておいた乗降口にようやくたどりつくと、ちょうど灰色の霧は完全に見えなくなるところだった。すべりこみで車内にころがりこみ、ドアを力任せに無理やり戻して、自分たちの個室までダッシュしたあげくに扉を閉めきりカーテンまでかけてそれから——。

「だあああっ」

一声唸って希沙良が足元の床に崩れこんだ。

「畜生てめえら同情しろっ！　少しは！　この痛みにっ！」

「やめてよシートに血の跡つけないでよ！　だから先に治しとけってあたしが言ったんじゃな

いのよ！」
「さ、さ、冴子ちゃ……」
「心配しなくたってあたしが治すわよ、あたしの仕事っていったらそれくらいしかないものね！　ほら背中向けて背中！」
「おまえ何もそこでヤケになっ……痛えッ」
「人が働いてる間は、余計な口ふさいどいてもらいたいわね」
「誰が余計っ……！」
凄絶といえば凄絶な光景に、亮介は内心でひたすら天を仰いだ。
「けど、問題の『新必殺技』については、おめでとうなんて言ってみてもいいわよ」
さらりと冴子が言った。
「……どーってこたねえだろ」
希沙良は特に明るい表情も見せず、なぜか無愛想にそっぽを向いている。
亮介としても、言いたいことは冴子と同じだった。
「どうってこと、あるよ。……凄いと思う」
何が心にあれば、あんな進化ができるだろう。
「違うだろ!?　今まで弱すぎたんだろ、要するに！」
思いきり、希沙良にはズバッと一言で否定された。なんでそこで素直に人の話を聞かないん

だ、と亮介は脱力感にはまりこむ。
「はじめっからやろうとしてなかったんじゃ、そりゃ何もできなくて当然だったよな」
視線をはずしたまま希沙良が呟いた。
「それよりも、この先のこと考えとけよ。こんな中途ハンパな所にトラップひとつ据えたくらいで満足する相手じゃなさそうだぜ」
「あ……」
まだまだ、これだけでは済まないかもしれない。亮介は隣にいる冴子と目を見合わせた。
がたん、と足元が揺れた。
車掌のアナウンスが聞こえる。ゆっくりと列車が走りだす……。

＊　＊　＊

六本木の部屋を訪れた神原亜衣に対して十九郎がふたつめに依頼した要件は、里見夏江とコンタクトをとり彼女の向かう場所に同行することだった。
十九郎がはりめぐらせた結界を、現在よりもさらに強化するためには、なんらかの触媒が必要となるのだ。
それは護符として代用できるものであれば何でもかまわない。

里見夏江ならば、斎伽本家に秘蔵されているそれら『符』の在り処に近付くことまではたやすいだろう。問題は、そこから実際に、伽羅王の許しをも得ず本家の『神具』を持ちだせるものかどうか、だ。

「あの人をひとりで行かせるより、神原さんが一緒に動いてくれていたほうが、互いの状況がずっと伝わりやすくなると思う。仮に何かトラブルが起こったとしても、その事実がこちらまで伝わっていれば、こちらはこちらでそれをふまえた策を用意することができる」

亜衣を頼る理由を、十九郎はそんなふうに説明した。

どれほどネガティヴな未来予測も、ひとつの仮説として冷静に検討してしまうところがこの人物の困ったところだと亜衣は考える。とにかく最悪の場合にそなえてあらゆる手を打とうとする癖があるのだ。聞いている相手はまるで脅されているような気になってくるのだが……おそらく彼本人は自覚していないのだろう。

「里見さんの彼女になる人って、心臓が強くないと大変……」

亜衣は同情のため息をつきながら——といっても、その同情されるべき『彼女』の顔すら知らなかったが——フローリングの床から立ちあがった。

「あんまり女の子に向かって連発しちゃ駄目ですからね、『もしものことがあったら』って台詞……。里見さんに悪気がなくたって、充分に泣かせ文句なんだから。どうせそういうこと全然念頭に置いてないでしょう?」

「……凄く意義のある忠告だね」
さすがに十九郎からは、ひどく複雑な表情の一言が返った。
「じゃあ、あたしは行きますけど……」
動く方針が決まった以上、長居している暇はない。
さっさと部屋から立ち去りかけて、亜衣はふと、何かのついでのようにふりむいた。
「でも里見さん、結局最後まで教えてくれるつもりがないんですね？」
「最後まで？　何を？」
十九郎が目を上げる。
当然、亜衣が指している話題の内容など彼は知っているはずなのだ。
「いきなり、ひとりだけ行方不明になってる人がいるでしょう？」
「訊かなかったのは君だよ」
「そういうことって普通、協力者には真っ先に話しておくのがセオリーじゃないのかしら」
「定石？」
興味深げに、だが十九郎は微笑しただけだった。
「ところが今回の事態はことごとく掟破りだからね」
「……その論法って、ものすごく狡いんじゃ……」
「自分でもよくわかっているから心配はいらないよ」

「ひらきなおってる里見さんって、最高に質が悪いみたい……」

手に負えないと言わんばかりに亜衣は顔をしかめる。

「心配はいらないって里見さんが言うならあたし個人としては信じてもいいけれど、でもね、あたしの判断基準ってひとつだけなんです。それが崎谷君のためになってるんだったら、里見さんがどんな奸計を抱えてたって黙って見送っちゃうもの。あたしにとって大事なのって、要するにそういうことなんだけれど……こんな訊き方もまだ里見さんには迷惑?」

「いや……そうでもないかな」

その基準において亜衣が危惧するべきことはない、と十九郎は保証してみせた。

他には何も明かせないが、それだけは約束できるのだと……。

IV

冷気を含んだ夜風にあおられながら、錆びついた電波塔の頂点に立ち、闇空の遠くを見据えている人影がある。

不安定な足場をものともせず、たとえその足元が針の先であろうと一向にかまわないというような、超然とした態度で彼は立っていた。

ごくラフに装った、適度に流行を追っているといった風情の、普通のハイティーンだ。――外見は。

だがその眼差しにあらわれるきつい煌きは、彼の内面が決して『普通』でなどありえないことを示している。永い、永い戦いを自らの能力によってのりこえてきたがゆえの誇りと、そして敬愛する女神によって選ばれた者としての自負がある。なによりも彼は自分自身が優れた存在であることを知っているのだ。それは彼にとっては、初めから疑いようもない真実だった。……自分をとりまく側近たちはすべて、口を揃えてそのように称賛したではないか？　炎将こそ王の中の王、だと。

耳ざわりのよい賛辞を鼻にかけて悦に入るつもりは、まったくなかった。優越感ばかりを肥大させ鍛練を惜しんでふやけきった輩に成り下がるなど、言語道断だ。そのような自惚れとは違う次元に、彼は自らを律しつづけてきた。

必要なものは地位でも肩書きでもない。

将と呼ばれ、巨大な敵を前にして戦うのは、栄誉をうけるためではない。

使命だ。

並みならぬ能力を有する自分だからこそ課せられる責務、であるはずなのだ。

もしも女神が永遠に現れずにいたら——その使命を知らしめる存在がなかったなら——行き場のない力をもてあまし、空虚にすぎてゆくばかりの日々に、彼は絶望していたにちがいない。

「来たな……」

両腕を組みあわせ、〈炎将〉剋司は冷ややかに独白した。

三つめの『仕掛け（トラップ）』が現在、追っ手をくいとめ、その足を封じている。はりめぐらせた妨害の陣のうちの、ひとつだ。

別にそれらの仕掛けだけで、あのいまいましい術者たちを滅ぼせるとまでは剋司も考えていない。要するに、こうして陣を張っておきさえすれば、連中がどこまでたどりつきどこで足止めされているかが手にとるようにわかるのだ。

（数が足りないのか？）

ふと剋司はそのことに気付く。

罠（わな）をかけた現場が、ここから見えるわけではない。伝わってくる力の反応から読みとれる敵方の戦いぶりと、剋司の承知している術者たちの総戦力とは、ややズレがあるようなのだ。

……術力の種類が足りない。

伽羅王が術者たちを手放したという情報が〈雷将〉勝呂からはもたらされている。それが影響しているのか？

勝呂の言うことなど素直に信じるのも馬鹿らしい話だが。

（気持ちのいいものではないな）

相手の全貌がつかめずにいるのは、いやなものだ。どんな成り行きで連中が彼女を追うようになったのかすら、今はまだわからずにいる。

彼女自身に問いただそうにも……。

ばさり、と剋司のすぐ傍らを白い羽音がかすめていった。なびいた髪をかきあげながら、剋司は厳しい表情でその先へ目をやった。

夜に飛ぶ鳥？

すでに白い影を見出すことはできなかった。剋司は軽く舌打ちしたが、重要なのは女神の安全だけだ。ふわりと身を宙に躍らせ、彼は数メートル下のアスファルトに着地した。

「お待たせを……」

剋司のかけた言葉に、女神は特に応えはしなかった。

人としての名を、工藤珈織。

そして真の姿をあらわす名が――妖者総帥、〈空王者〉九那妃、だ。

先刻から、ごく必要な用件以外、彼女はまったく言葉を口にしていなかった。剋司もそのことについては何も気にせずにいた。

東京の片隅で奇跡的な再会を果たしてからというもの、ほんのわずかな時間のうちに、彼女

はあきらかに変貌をとげていた。光り輝く宝玉を覆っていた皮膜が、ゆるやかに剝がされていくように……。

美しさを増してゆくのだ。

顔かたちが変化したわけではない。別人と化したわけではない。それはかつて、伽羅王・斎伽忍に対して彼の〈使〉である牙が危惧した、強烈すぎる本質のあらわれと同じものだ。

斎伽忍の場合、その変貌は、九百年の時をこえて彼の半身ともいうべき〈使〉を手中にとりもどしたことから始まった。伽羅王としての意識が巨大化し、斎伽忍という人格の安定を揺るがすようになるまで——それから長くかかりはしなかった。

彼の輝きは、あまりにも烈しく鋭く、諸刃の剣の如くに、彼自身を灼きつくしてしまったのだ。

もとより剡司は斎伽忍にまつわるそういった事実関係など、何ひとつ承知していない。知り得る立場になかったのだ。まして、誰に想像できるだろう？　あれほど爆発的な、圧倒的な術力によって妖者ひとりを——〈髪切り〉の弥峨を、だ——いとも簡単に消滅させてみせた、その伽羅王が現在もはやこの世にないなどと……。

たとえ歴然とした証拠をつきつけられても、容易に信じられることではない。なんら情報を与えられていない剡司には、真実の断片すら伝わる余地がなかった。

「参りましょう。術者の奴らはまだ、しばらくは身動きがとれませぬ」

「……わかりました」
視線も返さず、短く、珈織が答えた。
夢見心地のようだった。心ここにあらずというべきか。
夜空の遠くへ目を向けたきり。
だがその声の内に甦りつつある凛とした響きを、剋司は聞きのがしていない。
彼女の奥深くに眠りつづけてきた魂が、確実に浮上していることを。
完全なる覚醒までは、もうわずかで足りるだろう。焦がれるような思いで、それが果たされる瞬間を、剋司は待っていた。
胸の底から、熱く、ひたすらに祈っていたのだ……。

＊　＊　＊

希沙良が呼ぶところの『塗り壁』を始末した後に、列車はさらに二度ほど線路上で立ち往生する『故障』を起こし、それによって乗客および世間から鉄道会社が管理責任を問われるのはもはや決定的だった。何の罪もない、高性能を誇ってしかるべき新型新幹線に、亮介は心から同情した。
「故障ってわけじゃなくて、気象の悪条件ってことにしちゃえばいいのよ。本家の財力だった

らそれくらいの情報操作、お金使ったうちに入らないわよ」
「やってもらえるのかな、そういうことって……」
「当然あたしがやらせるから亮介ちゃんがいちいち気に病まなくて大丈夫！　どっちにしてもまずあたしたちの最大目的が果たされないとお話にならないけど」
「それは……そうだね……」
「……余裕ぶちかました相談やってる場合か、おまえら!?」
疲労困憊の希沙良が、さすがに癇癪玉を爆発させてきた。
結局、妨害に対してまともに戦えるのが希沙良ひとりである以上、彼ばかりに負担がかかってしまうのは仕方ないといえば仕方がない。
冴子の能力で怪我を治すことならできるが、受けたダメージを消すわけにはいかないのだ。休む時間もろくに許されない状態で、おそらく亮介が想像する以上の重労働を希沙良はこなしてきている。
かといって、心配すれば鬱陶しがられるし、誉めればこの程度で騒ぐなと叱られるし、何も言わずに放っておけば拗ねるし、希沙良という相手はこういう時、果てしなく扱いに困る……。
「あ……そうか……」
何が希沙良に足りないのか、亮介はそこでようやく思いつく。

黙っていたらまた例によって冴子から辛辣な発言が返されるところだ。亮介は強引に理由をこじつけて、無理やり希沙良を個室の外まで連れ出した。

「何だよ、おまえ、いきなり……」

遅れに遅れたとはいえ、新大阪駅到着はもう間もなくのはずだった。希沙良が怪訝な顔をするのも当然だ。

「ひとつ訊きたいんだけど……」

あくまで生真面目に希沙良を見上げながら、亮介はそんな風に問いかけた。

「もし俺が希沙良のこと、痛い目にあって面倒な仕事させられて大変だよねって言ったら嬉しい？」

「……すっげえ迷惑」

本格的にすさまじく嫌な表情で、希沙良は明確な答え方をする。だと思った、と亮介はあっさり頷いた。

「じゃあもうひとつ訊くけど、もし冴子ちゃんが希沙良のこと、ずっと頑張ってて偉いから大好きだって言ったら嬉しい？」

「大っ、迷っ、惑!!」

この上もなくはっきりと、身も蓋も遠慮のひとかけらもない一言で希沙良が片付けた。やっぱり希沙良ならそう来るよね、と亮介はとりあえず納得をする。

そこで咳払いを一回はさみ、亮介はおもむろに息を吸いこんだ。
「つまり！　そこまでわかってんだったら、誉められて嬉しい相手のほうに素直に誉められてくればいいだろ!?　なんで今更そんなこと俺に言わせてるんだよ、馬鹿っ!!」
「……あ？」
希沙良が不意をつかれるには充分の台詞だった。
「よく考えたら今の希沙良ってもう問題なんか全然ないんだから、俺がいちいち気をつかうことないんだ！　黙ってて損した！　希沙良にはできるんだから自分で勝手にやればいいんだろ、なんにも訊けなくなってる俺なんかとは違うんだから最初っから!!」
「おい……」
「俺は俺の問題で手一杯だし希沙良のことも気になってたけど手伝おうとするのはやめた！　実際そんなこと手伝ってるヒマないし、自分より器用な人間の心配するほど余裕があるわけじゃないから俺は！　ストレス解消したいんだったら俺よりずっと心が広くて辛抱強くて神経のこまかい立派な人が東京にいて電話待ってるから！　こっちが六本木の番号、これはさっき買ったばかりのテレカ、きちんと報告すますまでは戻ってこなくていいよ、じゃあね」
ぴしゃり、と希沙良の目の前で個室のドアが閉まり内側から鍵までかけられるのに、わずかな声を割りこませる時間すらなかった。
――キレた崎谷亮介ほど恐ろしいものも滅多にない。何か、この世ならぬものを目撃してし

まった心境で、希沙良は茫然と閉じたドアを眺めていた。
しかし……問題が全然ない、なんて、いったい誰がいつ決めたというのだろう？
あれだけのご大層な宣言をたたきつけて堂々と出てきておいて、まだ目的地にもたどりついていない今現在、何を言えというのだ、あいつに？
思わず、六十秒間ばかり、希沙良はその場で深刻に立ちつくしてしまった。打開策があるなら見つけようと考えたのだ、が。
（……駄目だ!!）
結論はあっけなく出た。情けないことに。
「崎谷っ!!　わかった!!　俺が悪かった!!　だから開けろ、こいつをっ!!」
がんがんとドアを蹴りつけた希沙良の前に、呆れ顔で冴子が鍵をはずして現れ、ほんっとにしょうがないわね、とこぼしながらその手からテレホンカードを取りあげた。
「電話くらいあたしがやってきてあげるわよ、やかましいわねえっ。これだから使えないのよ、男どもってば……」
捨て台詞を残して冴子はすたすたと去っていく。
「何がわかったって？」
亮介は亮介で、シートの奥から冷たい視線を投げてくる。
「性格悪いよな、おまえ……」

「性格なんか関係ないよ。怒ってるだけだよ、別に」
「だからその性格がっ！」
声をはりあげて指摘した希沙良に、ぽつんと亮介が言った。
「……本当に、希沙良のこと待ってると思うよ、あの人……」
「誰かのこと待ってんのは、そりゃおまえだろ」
「傷ついた……」
「どっちがっ!?」
「お互い様だけど。……なんで俺たちこんなことばっかりやってるんだろう？」
「……」
その理由なら知っているように、希沙良は思う。
きっと、ごく他愛ない一瞬と、ひどく普通な一言のためで——ただ、それだけなのだ。
けれど口には出さない。
今は言わない。
希沙良はどさりと亮介の足元に座りこんで、床に両膝を投げだした。
「男だったら、勝つのが先だろ」
「……」
負け犬のままでは慰めしか得られない。

そんなものが欲しいわけではない。
「俺はやったぜって、胸はってあいつに言えなきゃ駄目だろ？　それってのは意地とかカッコじゃなくて、男なんだから仕方がねえんだよ……」
何も成しとげないうちに甘えてはいられない。
誇りたい相手なら。
大切な約束なら。
「……なに黙ってんだよ？」
「あ……希沙良にしては、すごく深く練りこんだ言い訳だと思って、びっくりしてただけなんだけど……」
「おまえなああっ!!」
「いや、別にけなしてるんじゃなくて、硬派ってそういう考え方なんじゃないかなって、感心してるんだけど……」
「いいから黙ってろ、いつまでもっ!!」
「……でもここで俺が黙ったら希沙良が困るんじゃないかと思って……」
「大馬鹿……」
げっそりと希沙良が天を仰いだところに、こちらもまた消耗した面持ちで冴子が戻ってきた。

「ご歓談の最中にお気の毒だけれど、もう一仕事してもらわなくちゃいけないみたいだわよ」
「何、それ？」
亮介が眉をひそめて問いかえす。——ゆるり、と足元のスピードが変化を始めたのは、その声と同時だった。このパターンは……。
「四度目……？」
「の、ようだわね」
なにも駅から目と鼻の先の位置にまで、律義にトラップを残しておかずとも……。まったく共通する思いで、亮介は冴子と顔を見合わせた。
それから亮介はおそるおそる、手前の希沙良をのぞきこむ。
「あのガキ絶対ぶっ殺す……!!」
脱力のあまり倒れこんだ希沙良からは、殺気立った一言だけが返ってきた。

第六章　蘭

I

心斎橋から薄暗い横道へとはずれ、点在するバーやカフェの光を眺めながらごみごみした路地を通りぬけたところに、そのちっぽけなアパートは建っていた。

慣れた足どりで珈織は軋みつづける階段をのぼる。慎重に、彼女をとりまくすべてのものに警戒の念を向けることを忘れず、数歩後から剣司がそれを追った。

二階の奥の、その扉に、鍵はかかっていなかった。いや、鍵の有無にかかわらず珈織の手はそれを開くことが可能であったのかもしれなかった。

古びた二間ばかりの室内に、ふわりと彼女は歩を踏み入れる。

彼女の見知った、克明に記憶のなかに留められた、なつかしい祖母の姿はそこにはなかった。

珈織の視線は静かに宙をさまよい、やがて——。

とらえる。

「……あなた……」

半開きになった窓枠。

どこか、この世のものならぬ冷気を宿した眼差しで、珈織が問いかけた。

ひっそりと翼を休めている、純白の小鳥に。

「あなたのせい、なのね……？」

彼女に瞳を向けられた瞬間が、まるで雷炎の一撃のようだった。白い鳥はびくりと全身を震わせた。

「！」

直後、そこにあらわれた変化の現象に、珈織の傍らで剋司は愕然と目を見開いた。

白い鳥の姿は溶けるように失われ、その像は幻のごとく実体を消し去った。圧倒的な力の粒子が流動し、新たな形状を構成する。

血のかよわない、決して生身でありえない肉体が——自然を超越した神の力によって創りだされるのだ。

それをどのように呼べばいいのか、剋司は知っている。

空の者の〈使〉のみが可能とするメタモルフォーセ。

変形、だ。

（そうか……！）

女神をここへ導き寄せたものの正体は。

「蘭――か！」

剋司の呟きに応じる声はなかった。

速やかに鳥から人間へと姿を改めてみせた存在は、何事も口にすることなく、ただひたすら珈織の前に跪いているだけだった。

男であるのか女であるのか、即座には判別のできない……中性的な、若者の姿。

線が細い青年、といえば通じてしまうだろう。だが主である女神と同じく、それの本質はまぎれもなく女性だ。

狼のようにしなやかな女戦士。

毅然とした面立ちの右半分は髪で覆われて見ることができない。彼女のその姿には理由がある。だが蘭への同情など剋司は抱かない。剋司の内に女神として君臨する九那妃と異なり、〈使〉である蘭はつねに妖者の将と反りの合わぬ存在でいつづけたのだ。

そもそも、この〈使〉は、自分たちが必死に九那妃を捜している間、いったい何をやっていたのだ!?

「……無念……に、ございます」

色褪せた畳の上に手をつき、ぽつりと蘭が言った。

「だからこそわたくしが、決してこの者たちと関わらぬようにと、あれほど申し上げましたも

のを……!!」

「何だと!?」

珈織は答えず、かわりに剋司が声を荒らげた。

「どういうことか、それは!?　よもや貴様、〈使〉の分際でこのお方に指図など……」

「炎将、剋司！　あなたもまた罪を負ったひとりに相違ない！」

キッとその顔を上げ、蘭が鋭く言い返した。

「あなたの行動がすべての元凶となっているのだと、なぜ気付かれぬか!?」

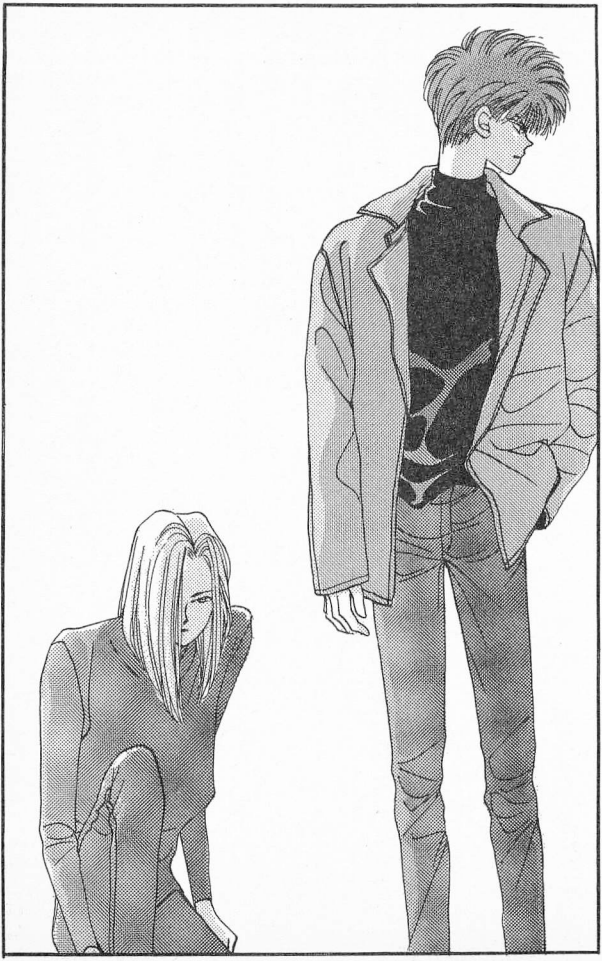
「笑止！　臣下の道を誤っているのはどちらであろうか!?　われらを欺き、九那妃様のお傍をも離れて、得手勝手な道理を並べるのが〈使〉のやりようか!?」

「それは違う！　炎将よ、今のあなたには見えていないことが多すぎるのだ！　浅墓な早合点で先走られては、あなたの見上げた忠誠心も、愚かしさをひきたてるばかりとなりましょう。それでもかまわぬと言われるか!?」

「よくぞそこまで無礼な物言いができるものだ、女……!!」

これだから女と名のつく連中は許しがたい。白熱した怒りがかけめぐるのを剋司は自覚する。

「しょせん貴様は心から我々に与するものではないのだったな!!　この剋司がどれほどの覚悟で九那妃様にお仕えしているか、貴様ごときには永劫、わかるまい!!」



「今はあなたの覚悟が問われている時ではありませぬ！　よろしいか、炎将剋司、伽羅王はもはや――」

激しく蘭がその先を言いつのろうとした時だった。

「そう……あなたのせい、だったのね」

不意に、珈織の声がそこに割りこんだ。はっ、と蘭が言葉を呑みこみ、衝撃を隠せぬ表情で眼前の主君をふりむいた。

その珈織の一言に、なにか……名状しがたい、危うさが含まれていたから……だ。

夢と現とをさまよう者の声だ。

「姫様……！」

すがるように膝を進め、必死に蘭は待ちこがれた主へ向けて呼びかけた。

「どうか御心を静めて、そしてお聞きくださいまし……！　わたくしは姫様にこのような思いをさせるために、これまでの年月をすごしてきたわけではありませぬ！　ただ、二度と戦乱のうちに姫様を置くことはゆるされまいと……」

「嘘ばかり、だったのね……」

ついと目をそらしながら、珈織が呟いた。

「はじめから私には祖母などなかった……実際にいたとしても、私のところまで来られたはずがない。私の両親は、逃げていたのだものね……ふたりの家から……世間から、全部から、隠

れていたのだものね……だってあのふたりは、血のつながった兄妹だったのだから……」

「おやめください、姫様、どうか……」

蘭が訴える。珈織の耳にはその声すら届いていなかった。

「私に暗示をかけて、たったひとりの味方になって、私の近くにずっと入りこんでいたんだわ……工藤らん、だなんて、そんな人どこにもいなかったのに……」

「……」

すでに蘭はなにも口にすることができず、苦しげに顔を伏せるだけだった。剣司は燃えるような瞳でその蘭の姿を見据えていた。

「……いつからだ？」

乾いた声で彼は尋ねる。

「いつからだ!?　十数年か!?　二十数年か!?　貴様ひとりの独断で、このお方をわれらの目から覆い隠していたというのだな!?　――そのためにどれほどの同胞が伽羅王の手勢に封じられてきたか、承知の上であるだろうな、女っ!!」

「伽羅王の側に荷担したわけではない……」

奥歯をくいしばり、蘭が答えた。

「断じてそうではない!!」

「利敵行為であるか否かはこちらの決すること、貴様の言い訳など私は知らぬ!!」

頂点に達した怒りにまかせ、刻司は猛々しく言い放った。

それは許しがたい裏切りだった。どんな思いで自分たちは今まで、手がかりのかけらすらなく、ただ慕わしい記憶のみを頼りに彼女を求めつづけてきたものか……！

「普通に生きて……何も知らないまま、寿命が尽きるのも、楽しいことだったかもしれないわ」

ぽつんと珈織が言った。

おそらくその寿命は、常人よりはるかに短いものとして彼女を訪れただろう。そう思い至って刻司はぞっとする。

「そしてわれらは置き去りにされるというわけでありましょうか、九那妃様……!?」

悲痛に顔を歪めながら刻司は問う。

「あまりにも——それでは、あまりにも……」

「……」

珈織は黙りこむ。まるで幻想の内に沈みこむように。

刻司も蘭も、ともに彼女の視界にはとどめられていないのだ。ひとりきり彼女は遠ざかり、自分は別の次元に隔絶されている——。そんな錯覚が刻司にさらなる恐怖を抱かせた。

本当に彼女は、熱望される総帥、九那妃として、甦ることができるのか？

「……けれど私は出会ってしまったのよ」

珈織の声が、その直後から、わずかに変わったようだった。
「私……私が見た、あの女……影のない、あれは……」
斎伽忍にひどくよく似た、冷たい空気をまとった女性。
珈織が動きだす、すべてのきっかけとなった遭遇。
あれは、珈織の内面に眠りつづけたもうひとつの意識からの呼びかけに他ならない。
誰の目にも映ることのない、けれど確かに今生に、現在のこの世界に、哀しく存在する自分自身からの訴えに他ならない。
追わずにはいられなかった。
知ろうとせずにはいられない。それがどれほど恐ろしく、正視に耐えぬほど残酷な真実でも。
「逃げることなんて、できない……」
彼女はゆっくりと瞳を閉ざす。
茫然と見つめる蘭の、目の前で。
「あれが、私なのだから」
瞬間、だった。
放たれた強烈な霊気に、思わず一歩、剋司は退いた。激しい光が室内すべてを灼き、彼のまわりを埋めつくした。

光の源は、言うまでもなく——女神。

ざっ、と霊光のなかで彼女の黒髪が舞いあがるのを剣司は見た。

何かの魔法のように珈織の髪はその長さを増し、気の圧力にまかせて宙に広がっていた。彼女の美貌はさらに凄絶なものへと研ぎすまされ、氷よりも冷ややかに輝く。

そこにいるのはもはや、それまでに生き、語っていた、工藤珈織ではありえなかった。

たおやかな、そして凛然と澄みきった、その姿こそが——九百年の時をこえ炎将剣司が求めつづけてきた女神の面影だった。

「……九那妃、様……！」

「姫様……!!」

剣司と蘭の声が、それぞれの驚愕をはらんで交錯する。

「なりませぬ、姫様、伽羅王の封印がっ!!」

蘭の警告は間に合わなかった。

蒼く透ける双眸を珈織はひらき……。

「！」

ぐらりと彼女の精神は平衡を失った。

空白が珈織を支配した。ごくわずかに残されていた抑制の防壁さえ、その覚醒はあとかたもなく打ち砕いたのだ。

II

「ああ……!!」
悔恨の呻きを蘭は漏らした。手遅れになる！
工藤珈織の意識が完全に押しのけられてしまったら。
伽羅王が――いや、斎伽忍が自らをもって九那妃を封じている現在の状態で。
（このままでは）
そこに理性など存在しない。
いかなる人格も。ただ空虚な混乱ばかり、が……！
「九那妃様!!」
息を呑んだのは剋司も同様だった。彼が見ていたのは珈織を襲った混沌ではなく、苦しげに揺らいだ珈織自身の姿だったのだが。
「九那妃様、御手を！」

バランスを崩した彼女を片腕に抱きとめ、剋司は凍りつく蘭へと厳しい目を向けた。
「今のは何事だ、女……!! 伽羅王の、何だと!?」
「炎将……剋司……!」
すべるように畳から身を起こし、激しく蘭も剋司の視線をはねのけた。
「姫様からすぐさま離れなさい、あなたの発する〝気〟は今のこの方には強すぎる!!」
「勝手な理を唱える!!」
蘭の言いようを剋司は一刀に両断する。ばかばかしいかぎりの言いがかりとしか思えない。
「……なんということを」
神々しい、やわらかな呟きが、剋司の耳元において生まれた。はっ、と剋司はその表情をこわばらせた。
ゆらりと蘭のほうを見やりながら、珈織は微笑とともに告げたのだ。
「伽羅王と、結んだのだわ」
「!?」
蘭は瞠目する。いったい何を——。
「あのひとを、選ぶのだわ……蘭」
何を彼女は言っている!?
前触れもなく、暴風にも似た不可視の力で、外とつながる扉がひらかれた。バン! と壁に

打ち当たった扉のむこうには。
夜闇を背景に立ちすくむ、ちっぽけな少女の姿があった。
ひらくはずのない扉の前に。
――水沢彩(みずさあや)、だ。
蘭がここまで招いた、まだたった十四歳の、小さく、無力な……。
「姫様?」
扉をあけたのは珈織だ。蘭にはそれがわかる。しかし、なぜ!?
「そうか……!!」
剋司の内ではその光景と彼女の言葉とは、ひとつの結論へと行きついた。
「そういうことかっ!!」
あらわれた少女の持つ空気は、まぎれもなく例の術者どもと通じるものなのだ。
女神の〈使〉でありながら敵方の手先をこの場まで導いた――それを背信行為と呼ばずして何だというのか。
(こうも堕(お)ちるものか!!)
がっ、と火炎にも似た闘気が総身に満ちるのを剋司はあえて抑えず、怒りの勢いのままに声をはりあげた。
「九那妃様……!! この剋司、〈炎将〉の呼び名にかけて、かくのごとき不埒(ふらち)なおこないはも

はや捨ておくわけにはゆきませぬ!!」

それは九那妃の命を、すなわち攻撃の許可を求める声だった。

炎将剋司は、そして、まちがいなく自らの耳で聞いたのだ。

……好きにすればよいでしょう、という女神の一言を。

「違うっ!!」

愕然と蘭が叫んだ。

「今の九那妃様は、まことの九那妃様では……っ!!」

すべては誤解と誤認からのことだ！　あまりの憤りに蘭は慄えた。

「戯言は充分っ!!」

珈織の身を背後へとまわし、剋司は蘭がいかなる動きをおこすよりも早く、燃えたぎった戦意を力にかえて放出した。ふりおろされた右腕から叩きつける妖気の塊――。

バリッ!!　と鼓膜を裂くほどの轟音があがったのは、その時だった。

古ぼけたアパートの壁が、紙よりもたやすく吹きとんだ。

「！　何っ！」

自分の放った〈熾炎斬〉が強引に割りこんだ何者かに防がれたことを、剋司は知る。

しかもその相手は。

「愚か者め!!」

剋司の前に姿をあらわすなり、凄まじい気魄とともに彼は吐き棄てた。
優男を気取った彼も今は、スーツの乱れすら気にかけていない。冷笑する余裕などどこにもない。
鷹木文彦、またの名を〈雷将〉勝呂は、間一髪でそこにたどりついたのだった。

部屋をかこむ壁の大部分は破壊されてしまっていた。将軍同士の力がぶつかったとなれば当然の結果だ。
蘭をかばうつもりは、文彦のほうにはなかった。そうなってしまったのは成り行きだ。蘭は蘭でとっさに彩をかばったため、かたちとしては、文彦は二人分の生命を救ったことになった。文彦の目的はただ剋司を止めるという一点に集約されていたのだが。
「このっ……早とちりの先走りの大っまぬけな小僧が!!」
思わず『文彦』の調子をひきずった罵声を雷将勝呂である彼は吐き出し、そして。
そして——見た。
「九那妃様!」
すっかり変貌を果たした珈織の姿に、現在の彼女の状態を、文彦は確実に読みとった。まさに、おそれていたとおりというやつだ!

「勝呂かっ!!　貴様!!」
不意をつかれたとはいえ剣司の怒りは冷めてなどいない。むしろ逆だった。
「よもや貴様まで九那妃様に刃向かうか……!!」
「相手をよく見てから物を言え、坊主っ!!」
文彦を包む空気がかんだかい悲鳴をあげて帯電した。問答は無用――。痛い目にあわねばガキは黙らない。
「!」
その瞬間だった。
やぶれた壁のむこうへと、珈織が身をひるがえしたのだ。
制止する声のひとかけらさえ、文彦は投げることができなかった。
(馬鹿な!)
ここで彼女だけ逃がすわけには……!
それが隙になった。つけこんで攻撃に出たのは剣司のほうだった。
「遅い!!」
女神がこの場を離れたなら剣司にとっては好都合なのだ。気兼ねなく、ここに在るすべてを破壊してかまわないのだから。
「貴様ら全員、まとめて葬ってくれるわ!!」

「ちっ！」

文彦は舌打ちする。

しかしなおも、それきりで勝者の決することを、運命は許そうとしなかった。剣司が圧倒的な妖力をときはなつ寸前、その足元から、狙いすましたタイミングで――白い炎が爆発した。

（発火!?）

誰の仕業だ!?　文彦は目を瞠りながら、今度こそ遅れをとらずに雷撃をうちおろした。襲いかかった業火からはかろうじてのがれたものの、連続した雷将の技には剣司も対応しきれなかった。

稲妻が天地を貫く。

ほんの数瞬であきらかになった結着を、蘭は立ちつくしたまま、厳しい表情で見守っていた。

「だから俺は忠告してやったんじゃないのかい!?」

ドッ!!　と剣司の身を片腕一本で足元に押さえこみ、まるで子供を寝かしつけるような気安さで文彦が言った。

まともに雷将勝呂の力をくらったショックで全身が痺れ、剣司は微動だにできない。屈辱に満ちて彼は文彦を睨みかえす。だがさらに酷薄な眼光でそれを受けとめ、文彦は台詞を続けた。

「ガキはひっこんでいろとさ……！　違ったかい、坊や？」
「……！」
「念入りにお仕置きしてやりたいところだが、そうもいかないようだな。わかるか？　坊やが大切な姫君をあっさり行かせてくれたおかげ、だぜ……」
ただの猫なで声がこれほど不吉に聞こえることも滅多にあるまい。雷将勝呂は、心底、一分の妥協もせず、純粋に、怒り狂っていたのだ。

III

例の〈発火〉によって介入した力の主はわからなかった。それが蘭でも、そしてもうひとりの少女のしわざでもないことは、文彦もとらえていた。
発火をおこなえる者の数は、術者のうちでも限られているはずだ。だいたいの見当はそれでついたが、文彦は頓着しなかった。今はそんなことを気にかけていられない。珈織を追わなければ。

「一刻も惜しい」
ずるり、と無造作に剣司を腕にひきずりあげ、彼は蘭のほうを見返った。
「このガキはこちらで引き取る、俺の好きにさせていただこう。ところで蘭殿よ、せっかくの再会だというのに我が胸にあたたかい言葉のひとつもなしかい？」
「……今のわたくしに、あのお方の居所を問うても無駄」
かたい表情で蘭が答えた。
「遠き、はるかな高みにあの方はのがれられた。しばらくは戻られない」
「ふん……。ならばそれなりの手を打つまでさ」
不機嫌に口元をゆがめながら文彦は呟き、そのまま、身動きのとれない炎将剣司をひきつれて蘭の前から姿を消した。
（さすがは雷将か……）
九那妃から最大の信頼を得ていただけのことはある。どう放置しておいても、ともかく女神にとって害をなす行動は決して選ぶまい。そのようには、蘭は彼を高く評価していた。――混乱に巻きこまれた炎将は哀れといえば哀れだろう。あの炎将は、雷将ほどに賢しく立ち回れなかったというわけだ。
（問題はあの女）
そうだ、もっとも厄介なのは……。

「！」

そこで蘭はふりむいた。

「やっとあなたがたも、ここまでたどりつきましたね」

半壊した階段を苦労してのぼりきったところでその声をかけられ、無言で希沙良は彼女を見た。

相手がこちらに好意をもっているか否かは、たいてい、勘だけでわかるものだ。そして彼女が自分たちをまったく歓迎していないことは、希沙良には一目瞭然、だった。

「誰だ……？」

呟きながら、しかし希沙良は気づいている。

この相手には影がない。

つまり導かれる結論はひとつ。――『蘭』だ。

彼女の背後にもうひとり、ずっと小柄な少女の姿があらわれた。希沙良が知らない人物だ。

「彩ちゃん……！」

階段の下で亮介が目を瞠った。その亮介の隣には冴子がいる。

蘭の瞳は不意に、いかずちのように冴子をとらえた。

そこに秘められていたのは敵意と憎しみにほかならなかった。冴子もまた敏感にそれを知り、相手に劣らぬ敢然とした視線を投げ返した。

「……人が参ります」
冷ややかに蘭が言った。
「場所を移しましょう。お話は、それから」

剣司が仕掛けた防害の網をいちいち破りながら――新大阪駅の構内にまでそれはあったのだ――ようやく最後のトラップからぬけだし、入手済みの住所をたよりに工藤珈織の実家へとたどりついてみれば、目指したアパートはすでに骨組みだけの残骸と化している。はじめから事態が安穏と進むとは思っていなかったが、それにしても予断が許されない状況だ。さらに剣司と鷹木文彦とが戦闘に到るまでの経緯を聞かされて、亮介はめまいを起こしたくなった。
誰もいない夜中の工事現場を、蘭はとっさの移動先に選んだ。今頃になって、爆発したアパートの方角へ突っ走ってゆくパトカーのサイレンが聞こえる。
「わたくしは九那妃様の〈使〉……。伽羅王の配下にあるあなたがたとは、もとより相容れることなどありますまい」
蘭が言う。
「ですがついにあのお方の本質はあきらかになってしまった。こうなった以上、なんとしても伽羅王の封印を解かねばなりませぬ。そのためには敵味方と声高に唱えていても仕方のないこ

と……」

「あたしたちに協力してくださるということかしら？」

腕を組みあわせながら冴子が尋ねた。

「それにしては今まで、情報面でのフォローも自己紹介その他も徹底的に足りなかったと思うのよ。なにか事情があってのことなら、きちんと釈明していただきたいわ」

「ケンカ売ってどうするんだ、おまえ……」

希沙良が眉をしかめて呟いたが、冴子は無視する。それは重要なことなのだ。気を許した背中をバッサリ斬られる羽目になったら、たまらない。

「つまらぬことです」

あっさりと蘭は答える。

「わたくしが〈使〉であることをお忘れか。九那妃様が完全に覚醒された今でこそこのように自由な姿をとり、語りもいたしますが、それ以前はわたくしなど定まった地盤より離れることもできぬ陽炎のようなもの。もっともわたくしは、その状態こそ継続させておきたかった。——伽羅王さえ踏みこんでこなければ」

最後の一言は皮肉らしい。

愛想も何もない喋り方や表情は、たしかに牙とそっくりだった。〈使〉という同種の存在ならでは、なのか。

（ああ……。だから、彩ちゃんが……）

亮介はそう納得した。

きっと蘭にとって唯一コンタクトをはかれる相手が、彩だったのだ。かつて牙がそうだったように。

彩は終始、ぽつんと、おとなしく蘭の傍らに立っていた。

なんとなく話しかけるのはためらわれて、亮介は彼女と同様に黙りこんでしまっていた。

本当は諒のことを話したかったのだけれど……。

「踏みこまれたのどうのと被害者顔する前に、妖者のほうを教育しておくべきだったわね。あの連中が総帥復活って大騒ぎしたのがそもそもの元凶じゃなかったの？」

「復活の希望は、彼らが滅びぬために不可欠のもの。九那妃様が必ずよみがえると――その期待だけで充分。実現するか否かはまた別の話かと」

「たいしたサギだこと」

「あなたがたの好まれる弥勒信仰とさして変わりますまい？　五十六億七千万年後の復活など誰がたった今、まことにしてみせましょう？」

「居直りは勘弁してほしいわ」

「あのさあ……ガタガタやってるヒマって俺たちにあんのか？　どうせなら中身のある話を先にやってほしいんだよな、こういう場合……」

見かねて希沙良が割って入った。女同士の尖ったやりとりなど、聞いているほうは全然楽しくない。

なにか、このふたりには相性の二文字で片付けられない問題があるようだった。蘭が冴子へと向ける感情の厳しさが尋常でないのだ。

……怨恨？

「空者沙良耶の息子ですか……あなたが」

ゆっくりと希沙良を見返り、蘭はそう呟く。言われた希沙良は少し不快に目を細めた。

「……そしてあなたが、この世に替わるものなき中和能力者……第三の力というわけですね」

蘭の視線はそのまま亮介のほうに移った。亮介は無言で、彼女の、左側だけの眼差しをうけとめた。……重い、視線だった。

何かを背負わせてくる重さだ。

「よろしいでしょう、ならばあなたがたに問いましょう」

ひととおり三人を眺めたのちに、蘭は再び正面から冴子に向き直った。次の瞬間、蘭の右腕は、その中性的な顔を半ばまで覆っている髪の毛を、無造作にかきあげた——隠れた右の瞳があきらかになるように。

「！」

亮介は反射的に眉をひそめていた。

痛ましい姿、だったのだ。……それは。

在るべき右目は、そこになかった。かわりに彼女の眼窩を占めていたのは、にぶい深緑の石だった。

その身を形成する分子が再生不能なまでの傷をうけ、醜く石化した痕だ。

「これは伽羅王の潰したもの。……九那妃様のお力をもってしても、この傷を癒すことはなりませんでした」

あまりにも激しい力が、伽羅王から放たれたために。

かつて——あの天慶の戦において。

「わたくしの恨みではありませぬ。わたくしは身代わりとなったのですから。伽羅王の矛先はまちがいなく九那妃様に向いていた。悪鬼のごとく、暴戻に、非情きわまりなき意思のもとに伽羅王があのお方を滅ぼそうとしたことを、わたくしは身をもって証し立てる者となれましょう。

このようなわたくしが、伽羅王を蘇生させる企てになど、心安くかかわれるとお思いか？」

「……」

殺気めいたものが蘭の言葉には宿っている。

決して消えない過去がそれを支える。

歴史とはそういった闇のことを呼ぶのだ。戦乱の果てに生まれるものとは……。

「もうひとつ……。わたくしは遠い前生にばかり拘泥してはおりませぬ。いうなれば、あの大戦は今生のあなたがたには関係のないこと。それよりもわたくしがあなたがたに問いたいのは、今生における『斎伽』の仕打ちにございます。……そう、あなたの家のことですとも、七瀬殿」

それを告げる時を待っていたように、蘭は冴子に対して七瀬の名を強調してみせた。

「お聞きするわ」

冴子が答える。

どんな例をあげられるまでもない。七瀬の家の仕打ちなるものが、ろくなことであるはずはない。

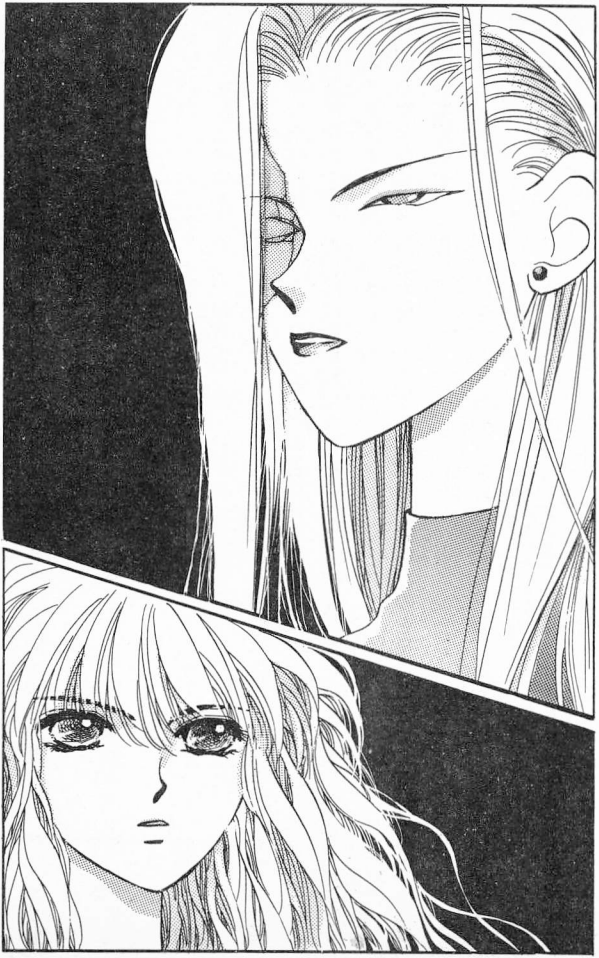
本家のやることなら。

……実の兄妹同士の婚姻を平然と望むような連中だ。

「術者として斎伽の暗黒より逃れているあなたがたには、こんな話は縁遠いことでしょう」

そう前置きして、そして蘭は言った。

「しかしわたくしは忘れませぬ。——今より十八年前、七瀬の手の者は、罪なき姫様の、すなわち珈織様のご両親に刺客をさしむけて……おふたりを亡きものにしたのですから！」



斎伽の一族を構成する『家』は、すべてで十一。

前の大戦が伽羅王と九那妃の相討ちといったかたちで終結を見たのち、現在まで存続を可能としたのは、そのうち『七瀬』の一家のみだった。

大戦についての克明な記録は残っていない。しかし伝承されつづけた事柄もあった。空者九那妃を降臨させ得る血筋『九堂』にかかわる知識もまたそのひとつである。

空者には、それぞれに、転生するにふさわしい——降臨するに適した血筋があるのだ。総帥伽羅王を転生させ得るのが、天乃城、源、七瀬の三家にかぎられていたように。

だからこそ、絶えて久しいと思われていた九堂の末裔が現代に到って発見されたとき、七瀬本家の者たちは動揺した。かつての大戦が夢物語ほどに遠くなった今、この現代において、ふたたび戦乱をおこすことだけは避けねばならない。九那妃復活を暗示する条件など、一片たりとも見のがすわけにはいかなかったのだ。

九堂の血をひく者たちが、自らの正体をも知らずにいたのを良いことに、七瀬の長老たちは謀議のうえ刺客を放った。

相手は、身寄りのない二人きりの兄妹だ。闇のうちに、巧妙に葬るのは、たやすい仕事だっただろう。

まさか、その二人の血をひく娘が残されていようとは——彼らでさえも気付くことがなかった。いくつかの幸運と蘭の尽力とが、かろうじて珈織の生命を救うことになった……。

「……」

誰も、すぐには、蘭に言葉を返すことができなかった。吹きぬけていく風さえ、不意に冷気を帯びたようだった。

伽羅王に被せられた罪は、冴子にとっては痛みをもたない。前生の伽羅王と現在の斎伽忍とは、冴子の内ではまったく異なる。

しかし七瀬の罪は……。

本流直系の生まれである冴子が、知らぬことといって責任をのがれられた話ではない。そして最終的な汚名を負わねばならないのは、まちがいなく、一族の長である斎伽忍なのだ。たとえ彼自身の本意でなくとも。

「姫様が知らずとも、わたくしは忘れませぬ。白紙へ戻すには、われらはあまりにも犠牲を負っている……幾重もの恨みを！　だからこそ、ひとたび伽羅王の封印を解いたが最後、そのときより新たなる決戦がはじまるのは避けられませぬ。あなたがたが、自らの罪も恥も知らず、優越に甘えるばかりの者であるなら、わたくしはあえてあなたがたと結ぼうとはいたしません。覚悟なき者たちに九那妃様の復活を託すほどなら、わたくしひとりで九那妃様を追ったほうがましですから……」

つまるところ、蘭が問いたかったのはその覚悟なのだろう。
「……けど、こっちはこっちで、妖者の連中には今までさんっざん痛い目にあわされてきてるわけだろ」
ジーンズの腰に片手の指を添えながら、顔をしかめたまま希沙良が言った。
「それこそ大昔の、俺らが生まれる前までさかのぼってたら恨みなんか山積みだろ？　きりがなくなるって気がしないか、それって……」
「もしもあなたがあなたの慕う肉親を無惨に殺されても、そのとおりのことが言えますか？」
すらりと切りつけるように蘭は一言で答え、さすがに希沙良も返す声をなくした。
「きりがないとおっしゃるなら、それはあなたが今まで幸福であった証拠かと」
「……何も知りゃしねえくせに……！」
希沙良は苦々しく吐き出して、顔をそむける。
確かにそれは、希沙良に対しては酷な質問だ。重い気分で亮介は代わりに口をひらいた。
「多分……」
どんな風に言えばいいのかなどわからない。
器用なことは言えない。
「そういう理屈でいったら、俺たちの全員がもう何も言えなくなる。蘭さんは本当に、恨みとか、罪とか、そんな話を俺たちにしたいのかな……」

「本当に？」

蘭がわずかに目を瞠った。

ぎこちなく、続く言葉を亮介は自分の内側から捜し出す。

「だから……今はどうしたって敵同士になるしかないけど……忘れたり許したりできないことが多すぎるけど……でもいつか、何か、戦わなくてもよくなる方法が見つかるのを蘭さんは待っているのかなって……」

「……」

「でなかったら俺たちの覚悟なんて、蘭さんには関係がないと思うから……」

そこまで言って、亮介は黙りこんだ。蘭もまた、信じがたいものを見つめる表情で、しばらく沈黙した。

蘭の隣で、ふと一瞬だけ彩が微笑した。薄闇にまぎれてそれは、亮介たちの目にとらえられることはなかったのだが。

「……終わらせる方法がありますか」

硬い声で蘭が尋ねた。亮介は首を横に振った。

「今は……今すぐ皆が止まることなんてできないけど、でも……いつかそれも変わるかもしれないって、あきらめないでいることなら……」

戦いなど終わらせて。

いつか誰もが幸福になれるなんて。

今はまるで夢のようなことを。

「わたくしにもわかりませぬ、あなたは純粋なのか、それとも……」

蘭は複雑に言葉をにごしながら、その左側だけの瞳を伏せる。彼女の内面になんらかの波紋が広がったのは確かだった。

「……そうね」

ぽつりと、冴子が口をひらいた。

「償いとか、報復とか、そんな話はできないわね。あたしも七瀬の名前にかけて、あなたたちに申し訳ありませんでしたなんて死んでも言えないのよ。あなたたちさえいなければ——九那妃が反乱なんか起こさなければ、絶対に幸せになれたはずの人がいるから……！」

宿命づけられた重荷など負わずに。

あたりまえのように自由でいられたはずの人物が。

だが——今はそれを声高に問う時ではなく——冴子はきっぱりと宣告する。責任を課された者として。

「……だからひとつだけ約束するわ。亮介ちゃんの言うとおり、方法なんか今は知らないけど……でも必ず終わらせるわ！　あたしたちの後にまで、こんな鬱陶しいものを続けたりは絶対にしない……あたしたちの力で、こんな戦いは終わらせてみせる……!!」

第七章　顕現

I

その頃――。

七瀬本家の邸宅内において、不破武人は意外な人物と遭遇していた。

里見夏江である。

武蔵野の、この屋敷で、彼女の姿を見ることになろうとは思わなかった。一族の内でも特に例外的に奔放な人物として、武人は彼女のことを認識している。もとより、このような閉鎖的な場に似つかわしい相手ではない上に――事態が混乱しきっている現在、里見十九郎の母である彼女は、どう考えても要注意人物なのだ。

広大な邸内の片隅で、なぜよりによって自分が里見夏江と鉢合わせしてしまったのか、と少し悔やみたい気分が武人にはある。これが咸月や明石川であったなら、彼らは迷うことなく強圧的に夏江を拘束して、必要な情報だけを絞りとっていただろう……。

（楽といえば楽、なんだが……）

しかしファシズムで思考停止してしまえる神経は武人にはない。

（神経というより、才能か？）

やや自嘲的に結論づけながら、武人は足早に夏江へと近付いた。廊下の一角で、別に逃げ隠れするわけでもなく、夏江はそれを待ちうけていた。

「いったいどうなさったというのですか」

低く、生真面目に武人は切り出す。

「里見殿がこのような所に……」

「うまくあなたたちのアンテナを避けたつもりだったんだけど、駄目だったわ」

あっさりと夏江がそんなことを言った。

「そうそう、うちの子たちがお世話になったわ。お仕事ご苦労さま。あなたたちも大変だったわね」

「……いいえ……私は……」

思わず武人はたじろぎかけて、自分の動揺ぶりに呆れた。さりげない彼女の言葉の裏に、『親衛隊』の一員である武人さえ気圧される何かがあったということだ。

和泉希沙良に関する一件は、今はもう視界の外の問題だろう。それどころでないというのが正しい。

それより現在は……。

「うかつではありませんか？」

武人は声を落として問いかける。

「我々が現在、どういった状況にあるかご承知ですか。六本木CBSにおける戦闘行為に、あなたのご子息がまったく関わっていないと考えるほうが無理というもの……。私は今すぐ、重要な情報提供者としてあなたを連行するかもしれない……」

「かもしれない、と言っちゃうところが不破君の困った性格ね……」

夏江は肩をすくめた。

この手の役回りに向いていない、と明言されたようなものだ。武人もまた同感の溜息をついた。自覚があるだけに辛い。

「あなたがそういう人だってことはあたしも昔から知っているのよ。だからアンテナにひっかけたのが不破君ならまともに話ができると思って、ここで待ってたわ」

「……あまり歓迎できた評価ではありませんが……」

「本当にそうかしら？　厄介でも何でも、その性格を変えないでいるのはあなたの意志だとあたしは思うのよ、違う？」

「……」

確かに……。

「この身が斎伽の流れに属するものである以上、自分自身において、律も則も、遵守したいと

願う心にいつわりはまったくありません。むしろ、私はその自分を誇りに思いたい」

ゆっくりと、そう武人は言葉を切り出した。

「しかしそこに理性の余地は残しておきたいと考えることは、矛盾ではないはず」

そうでなければ——彼の命を受ける者が自らの理性のもとに本心から従っていると、そう思えなければ、一族の長として君臨するあの人物があまりにも不幸ではあるまいか。そのように考える自分が仲間たちの内でなぜ異端となってしまうのか、本当は武人も疑問に感じてならないのだ。

「だと思ったわ。つまりあなたは頭ごなしの教条主義には、根っからはまらない人なのよ。あたしと同じ体質ね」

「……だからといって私があなたを全面的に認めるとはかぎりません」

今更ではあるのだが武人はそこで防衛線を引いておく。

自分は彼女ほど身軽にはなり得ないからだ。厳然として……〈道者〉のひとりである以上。

「あたしもあなたを丸めこもうと思っているわけじゃないの」

まっすぐに目を向けながら、夏江はついに本題を口にした。

「護符をいただきに来たのよ」

「……!?　しかしそれは……あの方の命がなければ……」

武人は眉をひそめて呟いた。

誰であろうと、独断で『符』を持ち出すことはゆるされない。伽羅王がそれを許可したなら話は別だが。

「しきたりは重々承知……。伽羅王からの許しはいただいていないわ。けれどどうしても必要なのよ。どうしても、今、必要なの」

「無茶なことを言われる……」

いくらなんでも無謀というものだ。

何故、と言いかけて武人はやめた。理由など問うことはない。

「どう考えても叶うはずがありません。お引き取りになったほうが……」

ふっ、とその瞬間、突然のひらめきが彼を黙らせた。

理屈よりも直感の導いたもの、だ。

さまざまな情報が、材料が、あるひとつの結論に向かっていないだろうか？

それはあまりにも非現実的な——。

（何を馬鹿なことを）

だが前兆が。

咸月の告げていたように。

さらに以前より表沙汰になりはじめていた怪事が暗示する、その先に。

「……里見殿」

乾いた声で、無意識のうちに武人は口をひらいていた。
「他言はいたしません。ゆえに、ひとつだけお尋ねしたい」
「……」
血の気を失った武人の表情から、彼が何を問うつもりなのか夏江はすでに悟ったようだった。
「まさか……まさかとは……しかし……あの方は、伽羅王は、本当にまだ存命されているのか、それとも……」
何と恐ろしいことを尋ねているのか、自分は!?
己自身に愕然としながら、武人は後につづく言葉を胸の内に呑みこんだ。
そして里見夏江は何も答えようとしなかった。唇を結んだきり……。
真実はもはやそこに在った。
覆い隠しようもなく。
「そんな、馬鹿な……!!」
やはり、という確信と裏腹に言葉は別の感情を語っている。
「結論を早まっては駄目よ」
芯の通った夏江の一声が、視野を眩ませかけた武人の精神にかろうじて活を入れた。
「あなたの考えは間違ってはいないけれど、それで全部でもないわ。あなたがもし斎伽傍流の

一員として正義をつらぬくつもりでいるなら――」
そこまで言いかけて、はっ、と夏江は背後をふりむいた。
「！」
武人もまた、そこに現れた人影を認めると同時に、鼓動が止まるのを感じた。最悪だ……!!
「不破……！」
蒼白になって立ち尽くしているのは、〈道者〉四人衆における仲間のひとり、明石川耕宇だったのだ。
「どういうことだ、今の話は……まさかあの方が、絶命され……」
「明石川……！　まだ事を荒立てるな、いたずらに混乱をひきおこす……！」
「いや、聞き捨てはならぬ!!」
咆哮に近い一言で、明石川は武人の言いようを拒否した。
「おのれの立場を忘れたか、不破!?　事を荒立てぬのはもとより我らの役目、しかしそれは黙して事実を見過ごすことでは断じてあるまい!!　俺はこの一件、咸月に報告し、我ら四人としての決議を求めるが異存はなかろう!?」
「……」
武人は何も反論ができない。圧倒的に明石川が正しい。道者であるならば。
だが、もし斎伽忍の死が事実であったなら、その重大事を隠匿した罪は里見夏江に、そして

彼女とつながりを持つ術者たち全員に、かかることになるだろう。果たしてそれが、今現在、まちがいなく必要なことなのだろうか……？

日付はすでに、とうの昔に二十五日へと移っている。

人通りのまったくない真っ暗な門の傍らで、神原亜衣は長い時間、里見夏江が邸内から戻ってくるのを、ひとりきりで待ちつづけていた。

「失礼……！」

かすかな足音とともに、ひきしまった人影が近付いてきたのは、夜も更けきってむしろ明け方へと踏みこむ頃だった。

「里見殿の代理の者です」

不破武人、とその青年は名乗った。ひどく真面目な、地味ではあるが毅然とした人物だった。

まるで軍人のようだ、というのが亜衣の抱いた第一印象だった。有能にして果敢な青年将校、あたりの役回りが似合う。

「あなたには申し訳ないが、詳しい事情をお伝えしている時間がない」

声音を抑えて、不破武人はそう告げた。

何かがあったのは確かだ。あえて彼の話の邪魔になる質問は口にせず、亜衣は視線だけで彼に頷いた。

「これを……」

白い布に包んだ小さな塊を、武人は亜衣に手渡した。

「私が預かってきた。あなたへと」

「あ……」

固い手触りが内側にある。

見てもいいものなのかと確認してから、亜衣は手早く白布をひらいた。

細い、飾りけの何もない小刀が、わずかに姿をのぞかせた。……小柄、というのだろうか？

「わかりました、あたしが受け取ります。あの……」

布を包みなおしながら言いかけた亜衣の声を、片手をあげて武人はさえぎった。

「よく聞いてください。これから、われら四人衆は内密の決議をおこなわねばならない。結果が出るまで、里見殿の身柄を解放することはできないだろう。いや……あるいは、その後も」

「……」

「この神刀をあなたに渡すのは私の独断だ。しかし四人衆としての方策がひとたび定まれば、私はたとえ自分自身に背くことであろうとその決定に従うはずだ。私も私なりの努力はするが、反逆者になりさがるつもりはない。あなたはそのように、あなたを待っている者に伝えな

さい。……これはひとつの賭けなのだと」

「……はい……」

あくまで感情を表に出すことなく、一種の覚悟が漂う顔つきで武人はそんなことを言う。意見や問いをさしはさむ余地などどこにもなかった。亜衣はただ小さく頷いた。

「では私はこれで」

短く告げて、そのまま武人は踵を返した。——が、ハッと息を呑んで、直後、彼は再び亜衣のほうをふりむいた。

「咸月が……」

「え？」

亜衣が目を瞠る。

「車が来る。……あれは勘の良い男です、あなたのことを気付かれるといけない」

咸月陣の愛車であるBMWのエンジン音を聞きのがさなかった武人の鋭さも、さすがというべきだったろう。

明石川からの報せをうけて、おそらく咸月陣も動揺しているのだ。常日頃のスタイリッシュな走りからはかけ離れた荒々しいコーナリングで、すぐ近くの曲がり角をすべりこんでくる気配があった。

相手が咸月では下手に姿を隠して目をごまかそうとしても無駄だ……。彼女を屋敷のどこか

にかくまうか、それとも、と武人は一瞬だけ決断に迷った。

「これくらいの壁だったら、あたし越えられます。それで警報にひっかからない方法はないんですか？」

突然、あっさりとそんな提案をされて、武人のほうが驚いた。敷地の外壁の高さは二メートル弱だ。確かに、まったく無理な話ではないにしても、この小柄のおとなしそうな少女が……。

「来なさい、こちらにシステムの死角がひとつだけある」

ものは試しだ。門から遠ざかり、西側の壁の上四十センチだけが監視網から外れる箇所を、武人は彼女に示してみせた。

「それなら大丈夫、すみませんけど足がかりお願いします」

君、と武人が口をひらく間もなかった。トン、と彼の肩に軽い重量が跳ねたと思ったら、神原亜衣の姿はもう分厚い壁のむこうに消えていた。

彼女が体操部のエースであることなどもちろん武人は知らなかったが、それを知っていたとしてもやはり同じ程度には敬服していたはずだ。この状況で堂々と跳んでしまえる度胸が凄まじい。

背後の門に、ＢＭＷのヘッドライトが突っこんできた。すかさず武人はそちらへと自分の足を向けた……。

II

「そういうことならば、それはそれで仕方がない。……大丈夫だよ」

夏江が戻れなくなったようだと電話で告げた亜衣に対して、十九郎の返答は落ちつきはらったものだった。この程度の展開は初めの時点ですでに計算されていたのかもしれない。例の『最悪の事態の予測』よりは、まだ、今の現実のほうがましなコースを歩んでいるということなのだろう。

「けど、このまま夏江さんを人質にとられてたら……」

本家の邸宅から走れるだけ走った先に見つけた電話ボックスから、亜衣はひそめた声で呟いている。

邸内に残された夏江の無事も当然気にかかるが、さらにそのことによって亮介たち全員に——特に里見十九郎本人に——のしかかるだろうプレッシャーのほうも、ただごとではないと亜衣は思うのだ。

めざす『神具』らしき品が手に入ったとはいえ、はたしてこれで収支は合っているのだろうか？

「まだ本家は動かない。時間は稼げるはずだ」

十九郎は断言してみせた。

時間の猶予なら、まだある。――遠野一真の言葉を信用するかぎり。

「勿論、それから先の厳しさは覚悟しておかなければならないだろうね……。でも逆に、だからこそ今までの布石が在るという考え方もできるだろう。神原さんは神原さん自身の働きを無駄にしなければいい」

「……そうですね……わかりました」

やむを得ず、亜衣は心配するのを諦めた。

総指揮者の立場に自ら身を置いてしまった以上、確かに、里見十九郎がこの程度の局面で私情をはさんでくるわけがない。

今の自分たちすべての立場が、大いなる私情の上に成りたっていないこともないのだが。そんな理屈を彼に持ち出したら、また、きりのない会話になりそうだ。

「じゃあ、あたしはこれから急いでそちらに行きますから」

「ああ、気をつけて」

その十九郎の一言で、通話は終わる――はずだった。

亜衣がそこで受話器を降ろさなかったのは、何か、かすかに、彼が息を呑む気配を感じたからだ。

十九郎がただひとりきりで護りをかためている、六本木のマンションの室内で。

「里見さん……？」

それは異変の兆しだった。不吉な遭遇の……。

回線の向こうから問いかけてくる亜衣の声を聞きながら、だが十九郎は応答を口にすることができずにいる。神経の集中を逸らすことになるからだ。

こちらの死角を突くような巧妙さですでに決定的な至近距離まで、新たな存在はたどりついていた。

目の前まで。

九〇七号室の黒い扉が、音もなく開かれた。結界の一端として固定されていたにもかかわらず。

かつん、とフローリングの床を鳴らしたのは派手なパンプスの踵。

「こんばんはぁ……おはようかな？」

舌っ足らずな喋り方で、甘ったるい無邪気な声を彼女は投げこんできた。

その声と、そして漂うプアゾンの香りになら、確かにおぼえがある。

浜口マキ、という彼女の名前など十九郎は知らない。今はその名がどうであろうと関係がな

い。

問題は本質だ。

「もー、やだ、さんざん捜しちゃった。結界でがっちり固めてあるしー、気配ぜんっぜん隠してるしー、それはもお大変な思いして見つけたんだからねえ？　たまたま手がかりあったからよかったけど」

話している内容と口調とが、ひどく不釣り合いに聞こえる。

「手がかり？」

十九郎が呟いた。独白に近い問いだった。

「忘れちゃったんだ？　借りてたじゃない、これ」

片手に持ったハンカチを、浜口マキはかざすようにしてみせた。

CBSの局内で十九郎が彼女に手渡したものだ。強引に奪われて。

――波動のつながりを読まれた……！　十九郎は唇を噛みしめた。物に宿った気から、持ち主である十九郎の居場所を導くことに彼女は成功したのだ。幾重にもはりめぐらせた結界の壁をものともしないで。並みならぬ実力がなければ、そんな芸当はできない。

「それは、俺の不覚だったな……」

電話ごしに、この会話は神原亜衣へと伝わるだろう。わざと通話を切らず、十九郎は受話器を床へと置いた。

「いずれにしても……ここで出会う相手がいるとしたら、おまえしかいないと俺は思っていた。小手先の細工が通用しないこともわかっていた。ならばこれで予定どおりだ」

「待ち望まれていたとは嬉しい話だよ」

ふと、浜口マキの喋り方が——消えた。

媚びる態度も、甘えた声音も、もはや彼女とは無縁のものだった。

かわいらしい顔つきは、鋭く艶やかな美貌へと変化する。別人のもつ表情に移行する。

一瞬のうちに。

「私も早くおまえと再び出会いたかった。これで念願がひとつ叶ったというもの……」

彼女の唇がなまめかしい笑みのかたちを描き、そんな言葉を告げた。

惑わせる、魔性の笑み、だ。

妖者三忌将、最後のひとり……。

〈幻将〉皓はついに今、十九郎の前にその新しい姿をあらわしていた。

＊　＊　＊

「……急がないと……」

ぽつりと、かすかに、そう呟いた声があった。



それまで一度も口をひらくことなく亮介たちと蘭とのやりとりを見守っていた彩が、不意に――促すように、告げたのだ。

「急がないと、東京で、もうひとり……」

「え？」

亮介は両の目を瞠った。蘭もまた彩へと視線を向けたが、彼女の言葉が何を指しているかはすでに了解しているようだった。

「思ったとおりですね。炎将の一件が片付いた今、もっとも厄介なのはあの女……幻将の皓に他ならない」

厳しい表情で蘭が言う。

「あれは利口な女です。ゆえに九那妃様がいらっしゃらない今、幻将ほど危険な相手はおりませぬ……」

「どうして、そんなことが……!?」

遠く離れた東京での動きまでが、なぜ彩にはわかるのか。蘭の語った内容について深く考えるより先に、亮介はその疑問のほうを口にしていた。

ふっ、と彩が一歩前に出た。亮介に向かって。

「……牙、が」

白い手がさしのべられる。

「牙？」

亮介は彩の手を見つめかえし、そして突然思い至った。

ポケットの内に眠らせてあるちっぽけな水晶片――牙の本体のことに。

「あやは何も見てない。あの人に見えることを、牙が、代わりに言ってる……一生懸命、言おうとしてる……わたしはそれを聞いただけ。今までの、全部、牙の声……誰も聞いてあげなかった」

とぎれとぎれに彩は説明すると、最後に小さくつけたした。

「可哀想……」

「……」

それは一種の奇跡なのだろう。

彼女以外の誰が、この世の外からの訴えを誤りなく牙の声として聞きとれただろう？

亮介は彼女の掌に、透明に輝く破片を手渡した。そうするのがいちばん自然なことだと思えたのだ。

「ありがとう」

彩が言った。

いや……もしかすると、その言葉もまた、彩がどこかから感じとったものなのかもしれなかった。

本当のことはわからない。

「東京であの女が何だって……？」

こわばった声で、話題をそちらへと引き戻したのは希沙良だった。

はっと亮介も胸をつかれた。そうだ、最大の問題は……。

数か月前、斎伽忍の力によって甚大な傷を負わされ、それきり〈幻将〉皓は消息を絶っている。その彼女が始動するとして具体的にどんな手段をとってくるかなど、ここで知るすべもないが。

（あの人を護るのも俺たちの仕事だと思う）

里見十九郎はそう言っていた。六本木の部屋から自分たちを送りだす時に。

亮介は広く漠然とした意味で彼の言葉をとらえていた。しかし十九郎は初めから、皓の存在をはっきりと想定してはいなかっただろうか？

「危険な相手だってことは知ってるけど、つまり要するに何をしでかしてくれるっていう話？」

冴子が問いかけた。

「断定はできませぬ。幻将となれば」

皓はおそらく、あらゆる選択肢のうちから最も効果的と思われる策を見出してくる。蘭はそんな答え方をした。

効果的であるかぎりどのような策をもいとわない――という部分が不吉なのだ。
「やむを得ません、あなたがたを認めるしかないようです」
そう言って、蘭は互いの動きを拘束していた論議にピリオドを打った。
「わたくしは九那妃様の〈使〉、あのお方がどこへ降りられるかは容易につかめるというもの。あなたがたにその場所を教えましょう。――速やかに東京へ戻ることです」
「東京に……」
亮介は口の中でくりかえした。
ひとつところに落ちついている暇もない。めまぐるしいが、しかし止まるわけにもいかない。
「あなたも一緒に来ていただけるのかしら」
蘭に向かって冴子が尋ねる。冷静に、蘭は首を横に振った。
「われらの場合、別行動をとったほうが良いと思われますので」
戦略的判断なのか彼女の矜持による言葉かは、はっきりしないところだ。おそらくは両方なのだろう。冴子は頷いた。
「！」
傍らに強い光を感じて亮介がふりむいたのは、その時だった。
何が起きているのか、最初はまったくわからなかった。光の発生源はすぐ近く――彩の掌の

内、だ。

「あ……!!」

まさか、と亮介は息を呑んだ。

そこに現れたものの名を、亮介はよく知っていたのだ。

なめらかな、銀色の杖――。

見忘れるはずがない。

間違いなくそれは、かつて斎伽忍が亮介に託した唯一の武器……地涯の杖〈爪牙〉だった。

「彩ちゃん……？」

呟く亮介に、彩は無言のまま銀杖をさしだした。

そうすることを牙の意志が望んでいるというように。

さからえない流れの中で、亮介はその銀杖を受けとった。ひやりと冷たく掌に収まった〈爪牙〉は何も語りはしなかったが、なつかしく伝わってくる感情を確かに亮介の胸は覚えていた。

彩の告げた言葉は正しい。彼はまだいるのだ。牙も……そしてその主君である人物も。

なぜ彩が水晶片と化した牙をこの杖の形状まで変えられたのか、尋ねようとして亮介はやめた。それはいずれ彼に訊けばいいことだ。すべてが解決した後で、斎伽忍に。

だからこそ忍は戻らなければならない……。

「……じゃあ、これは俺が預かっているから……」
亮介はそれだけを彩に答えた。彩も特に、何も言わなかった。
「なるほどね、来た甲斐はあったということね……」
銀杖を見やりながら、冴子が真顔でそう呟いた。
「貴重な時間を無駄にはできないわ。すぐに帰るわよ、東京に」

＊　＊　＊

「おまえがまだ生きていてくれたことが何より嬉しい」
美しい微笑とともに彼女はそんな言葉を告げた。
あながち嘘ではないようだった。率直な喜びが彼女の笑顔には含まれている。十九郎との対面を、皓は純粋に楽しんでいるのだ。
「忘れたことなどなかった。おまえを倒すなら私だと決めていたからね……。新しい器がこうして私のものになるまで、余計な者がおまえに手をかけはせぬかと、ずっと口惜しい思いをしていたのだよ」
見込まれたものだ。
「すると狙いは俺なのか？」

冷ややかに十九郎は問いかける。皓はさらに笑みを深めた。
「承知の上で言わせようというのかい」
「身の程を知っているだけだ。俺の価値と、おまえが持っている将の呼び名とは、釣り合いがとれない。特に、今は」
「寂しいことを言ってくれるではないか」
少々傷ついたような表情が彼女の面をよぎった。
「おまえは利口だが、まだ女の性根をよく知らないね。……女はいくらでも欲張りになれるもの」
赤い爪で髪をかきあげ、皓はきっぱりと言う。
「男どもはくだらない夢を見る。叶うあてを失くしても気付かずに、幻影を追っている。私はそれほど愚かになれぬゆえ、今はここにいる。このように答えればおまえは満足するのだろう?」
「確かに」
期待どおりの理屈だ。礼を言いたいくらいだ。自嘲的な感想を抱きつつ、十九郎はフローリングの床に右の掌をついた。
「一挙両得……。きっと俺もそう考えたはずだ。もし立場が逆だったなら」
「厄介な臣下なのだね、おまえも」

皓は複雑な色をその双眸に宿して、十九郎を見た。

簡単なことなのだ。斎伽忍を失った状態の術者たちと、現在の妖者方の戦力を比較すれば、そこに九那妃がいなくても、三将の健在な妖者方のほうが優る。それはあまりにも明らかな事実ではないか。

ならば何故、あえて伽羅王の封印を解き、九那妃を復活させる意味があるだろう？

伽羅王さえ消えてしまえば、もはや喰らわれる恐れも妖者たちにはないのだ。九那妃に保護される必要もなくなる。

あとはそれぞれに、本来の自由な身柄へ戻ればすむ話だ。〈妖の者〉全体のことを見渡して考えたなら容易にたどりつける結論ではないのか？

雷将勝呂も、炎将剣司も、おのれの忠誠心が先走りすぎて、それだけの単純な現実が見えていないのだ。皓が、この新しい器の提供者である鷹木文彦と決裂せざるを得なかったのも、受けた恩義を忘れたわけではなく、まさにその一点のためだった。

「裏切者と呼ばれても果たさねばならぬ役目というものはある。私にはそれが見えてしまっただけのこと」

皓が言う。

その立場を選びとる心情は十九郎もよく知っている。痛いほど。

おそらく自分たちはよく似ている……。

「九那妃様にはこのまま眠っていただく」

片腕を、彼女は十九郎に——そしてその背後の、奥の寝室へとつづく扉に向けて、持ちあげた。

閉じられた扉の先に真の標的がある。

伽羅王の再生を永久に阻むこと、すなわち、器である斎伽忍の身を完全に消滅させることこそが皓の狙い。さらに、結果的にそれが里見十九郎の敗北のうえに成りたつのだから、まさに一挙両得というものだ。

「中和者のことはどうする?」

最後にひとつだけ、十九郎は彼女の方針に疑問を投げかけてみた。

「仮におまえの目的が果たされても、こちらにはまだ中和能力者がいる。九那妃がいなければ不利になるのは……」

「ならば、中和者をこちらへ引き入れれば良い」

あっさりと、皓はそう言ってのけた。

「そうであろう、本来、中和者とはどちらにもつく者。使いようはいくらでもある。おまえには、そのように見えているものと思うが?」

「……」

わかった、と十九郎は呟いた。あえて一言も論評はせずに。

「よくわかった……。結局、初めから、俺の出せる解答はひとつしかないということだ」
「知っていたよ」
皓が微笑する。十九郎もかすかに笑みを浮かべたようだった。――バリッ!!　と両者の間で互いの力が凄まじい悲鳴をあげたのは、それから半瞬後のことだった。

III

空白の闇のなかに、彼女はいた。
時の流れから隔絶された、遠い幻の領域に。
はるか彼方に誰かの呼び声が響いたような気がした。わぁん……と、こもった木霊を残して消えてゆく。
（恒星が見える）
彼女は頭上へと視線を動かした。闇を透かして、いくつもの銀河は確かにそこに存在していた。明滅する生命光の集合体……だ。

何を思い、何を目指して、あのように我が身を輝かせるのだろう？　いずれはすべて塵と化し、誰に記憶されることもないまま、抗いがたい自然の理にまかせ消え去ってゆくのに。

（意味などない）

存在に。

生まれ、在る者に。

（理由はない。初めから……必然も、宿命も、ありはしない）

（ありはしない）

……そんなことは数千年の、数万年の、数億年の歴史の線上であらゆる哲学者が立証しつづけてきた真実。

その虚しさを知り、それでも……。

「意味が生み出されるものだと、なぜあなたは気付こうとされなかったのでしょう？」

彼女は問いかける。静かに。

誰かが彼の名を呼ぶ時、誰かが彼のために涙を落とす時、そして彼自身が愛の言葉を口にする瞬間、そこには新しい意味がしっかりと生まれていなかっただろうか？　本当に？

「あなたを変える者たちを、なぜあなたは……」

漠として広がる地平に、ひとり、彼女は立ちあがった。求める相手の影はどこにも見出されなかった。

捜さなければ――と彼女は考えた。この地平のどこかに必ず彼はいる。
見つけ出さなければ……。

＊　＊　＊

七瀬本家、武蔵野邸の一室において、咸月陣を筆頭とする四人の〈道者〉たちは、それぞれに息苦しい時間を耐えていた。
明石川耕宇の暴露した事実に全員が衝撃を受けつづけているのは、当然だ。その上、さらに事態を深刻にしたのは、遠野一真が担当していた鎌倉の屋敷から、隠密裡に二名の術者が脱出させられていたことだった。
この期に及んで、里見十九郎は独自に術者たちを結集させ、本家の存在を無視して何らかの行動を起こしたということになる。十九郎の要請に応じてしまった一真の責任も決して些少なものではないのだが、それはまた別に語られるべき問題だった。
彼ら術者たちの目的は、すでに里見夏江によって明らかにされた後だ。
あまりに常軌を逸した、あまりに理解しがたい目的が。
（……伽羅王の、再生……!?）
天をおそれぬ仕業とは、まさにこのことだ。聞いた瞬間に魂が冷えるのを不破武人は感じて

いる。

彼らには畏怖も恐怖もないのだろうか？

「提案する」

声音を硬直させたまま咸月陣が口をひらいた。

「あの者たちの行いは、われら一族の道に外れていること瞭然と見る……。奴らには、われわれの手で鉄槌を下さねば取り返しのつかぬ事態を招く。即刻、首謀者たる里見を拘置し粛清に至るべく考えるが？」

「異議はない」

すかさず明石川が同意する。

この二人の反応は、まったく武人の予想どおりのものだった。

「性急にすぎるのではないか」

慎重な物言いで、武人は咸月への反対を唱えた。

理屈の上で咸月たちと正面衝突しようとまでは思わない。必要なのは、ブレーキをかける力だ。

「私にはまだ彼らの本心が不明だな。いかなる思想もなく、あのように動けるものであるのか。見極める猶予がなければ裁決も成り立たぬ」

「不破の日和見は聞き飽いたぞ」

明石川が唸り声をあげた。咸月は何も答えない。結局、武人がそうした姿勢に出ることも向こうは初めから承知しているのだ。

ここまでは互いに予測したシナリオの範囲内ということになる。

問題は――次、だった。

武人は無言で視線を遠野一真へと向けた。末席にいる一真は、しばし口をつぐんだきり、自分の立場を表明しようとしなかった。

斎伽忍の死を耳にした時からずっと、一真は血の気が失せた唇をきつく嚙みしめているだけだった。

符牒が合ったのだろう。彼の内部では。里見十九郎の動きと、判明した真相との、つながりが……。

「遠野は」

咸月陣が促した。

一真が咸月たちの側に賛同すれば、三対一の多数決で四人衆としての方針は自動的に定まる。そうなれば武人も、本心はどうあれ、その決定に従って動かざるをえない。

すべて一真の返答次第なのだ。

「……私は……」

激しい葛藤を隠しきれない表情で、一真は呟いた。

これほど明白に迷いを抱えた姿を彼が見せるのも珍しいことだ。武人の胸には、ある種の覚悟が生まれた。仕方がない……と。

一真には重荷だろう。罪はなお、疑問を感じながらこれ以上の抵抗を果たしえない自分の側にある。

「遠野、あるいは票決より外れるか？」

さらに咸月が尋ねる。はっ、と一真が顔を上げたのはその時だった。

「いいえ」

そして一真は抑えた声で、彼らに告げた。

「……私の心は不破殿と同じです」

＊　＊　＊

夜が明ける……。

妖気の蠢きが浮上してくるのを、蘭は感じとっている。

高位のものから名もなき下級のものまで、さらに器をもたず浮遊している精神体の群れにいたるまで、あらゆる〈妖の者〉どもが現在、総帥九那妃の気配に反応してざわざわと微動を始めているのだった。

（危うい、か？）

彼ら、統制のとれていない妖者どもが、それぞれ勝手な方向へと暴発したら、いかに雷将勝呂が有能であろうと彼ひとりですべてを抑えることはかなうまい。

妖者総勢をたちどころに制御できる存在は、ただひとつ――女神として君臨する九那妃だけだ。

九那妃と、そして伽羅王が、今どのような状態に陥ってしまっているのか、妖者どもに一から説明するのは不可能だ。彼らが厄介な動きを起こすより早く結着をつけなければ……。

ともかく早く……。

（早く!!）

「何だよ、そいつは……!?」

新大阪駅の柱に、希沙良は右の拳をたたきつけた。

もう走りはじめているはずの列車は、全線、まったく動かせない状況にあるというのだ。

「飛行機も全部だめだわ」

空港へ問い合わせていた冴子が、勢いよく公衆電話の受話器をおろした。

「名神高速が閉鎖されちゃってるから、バスも無理として……あと何があるかしら、東京行き

っていったら」

東京どころか、この大阪を一歩出ることさえ危ぶまれる。亮介もまだ、目の前の現実を信じたくない気分で立ちつくしていた。

数時間前から兆しはあったのだという。全国の交通網がどこもかしこも麻痺しはじめたのは、つい先刻のことだった。——原因不明の事故が相次ぐように大量発生し、あまりに異常な発生率に、どの交通機関も稼動そのものをためらわざるをえないのだ。

ニュースキャスターたちは自家用車の運転を控えるようにと視聴者に呼びかけ、ほとんどの学校や会社は臨時休業となることを伝えた。

勿論、こんなものが偶然であるはずはない。

メーターの混乱、信号機の誤作動、運転者の幻視……。事故につながったさまざまな現象から、それが〈妖の者〉のひきおこした結果であることは亮介たちにも推理できた。

工藤珈織の覚醒には、それほど巨大な影響力があったのだ……。

「寝た子を起こしたってわけね……」

交通手段をあたるのも諦めて、冴子がそう呟いた。苦々しい表情で。

（こんな所で）

亮介は改札の向こうを見つめながら、唇を噛みしめる。傍らに立つ彩も、この状況ははっきり把握しているらしく、亮介たちの下す判断を待つような面持ちで無言を保っていた。

「畜生……」

希沙良の声を――かすれた一言を、亮介は聞いた。亮介はそっと彼のほうをふりむいた。

「……畜生っ……!!」

柱に預けた握り拳に、冷えきった額を押しつけて、希沙良はもう一度同じ言葉を吐き捨てた。

まるで他に身を支えるものが何もないように、見えた。

一緒に東京から出発して以来、希沙良のそんな姿を亮介が見るのは、これが初めてのことだった。

けれど、それが希沙良の、何が起きても失えるはずがない真実の部分であることを亮介は知っている。

（遠すぎる）

どうしたって手の届きようがない遠くで、ここから駆けつけようのない場所で、たった今も彼の『一対』は強大な敵の標的と化している。……そういうことだ。

希沙良でさえ――いや、今まで前進を続けられた希沙良だからこそ、こうなったら立ち止まるしかない。

「事故ろうが何だろうが、走りさえすりゃ妖者なんかこっちで片付けてやれるんだ」

苛立たしげに希沙良が言う。誰に同意を求めるわけでもなく。

「ビビってねえで動かせよ、馬鹿野郎っ!!」
「……」
亮介は声をかけることができない。
慰めの言葉はない。抱く想いは共通しているのだから。
切実に……。
「!」
ひらめきが、その時になって、亮介の胸に生まれた。はっと息をつめ、そして亮介は希沙良に向かって口をひらいた。
「そうだ……〈妖の者〉の力なんか、こっちで消しちゃえばいいんだ、希沙良」
「え?」
希沙良が目を瞠る。亮介はすかさず結論を告げた。
「余計な物は全部、中和する」
「!? おまえ、何っ……」
どうっ、と互いの足元が揺らいだのは、希沙良がまだ返答を言いきらない内のことだった。
「何!?」
反射的に彩の片手をとりながら、冴子が声をあげた。不意に、まるで地下から湧きあがったように急なタイミングで、不快な気配が眼前に現れるのを亮介は見た。濁った暗黒……!

「妖気が……！」

凄まじい耳鳴りが襲ってくる。亮介は激痛の走る頭を左手で押さえつけ、かろうじてそれだけ口にした。

改札前で同じように列車の始動を待っていた一般乗客の人垣にも、やはりざわめきは生じていた。特殊な感覚をもたない彼らにさえ、この毒に満ちた気配は、ある種の悪寒を呼び起こしたのだ。

それが誰より感覚の強い亮介ならば、被害の大きさは尚更だ。希沙良は自分の腕に亮介の肩を引き寄せ、ざっと周囲に視線を走らせた。八方をすべて取り巻かれている——鈍い陽炎に。

「妖気だけじゃないわ、これって本体の大群……!!」

「狙ってきやがったのかよ……」

無防備にさらされた術者の波動に、妖者本体の一群が反応してくるのは当然といえば当然の成り行きだろう。『器』をもたぬ精神体の身分から、うまくすれば力にあふれた術者の肉体に憑けるかもしれないのだから。

その飢えた連中が今、常よりもずっと過激に、前後の見境もないものになっているというだけの話だ。迷惑きわまりないが。

「おい、おまえ崎谷のっ——」

冴子に向かって希沙良が怒鳴りかけた、その瞬間、だった。

バリバリッ!!　と、希沙良のすぐ足元から——それは起こった。甲高い破裂音とスパークする閃光の火花が、半円を描くように亮介たち四人を囲んで走り……。

妖者の気配がどっと退くのを亮介はとらえた。結界……!?

誰の!?

「ちっ」

希沙良が舌打ちする。どう考えても、こんな真似をするのは。

（あの野郎だ）

プラズマは勢いのまま地面をさらに疾走し、改札までの直線をまっすぐに切りひらいてみせた。大気中を埋めつくしていた真っ暗な妖気のカーテンは、まるでモーセの両断した海面のように、左右へと苦しげに分かれた。

進め、ということだ。仕方ない、乗ってやる……！　希沙良は冴子のほうを素早く見返った。

「おい、走れんだろ!?」

「当然でしょ!?」

「上等っ!!」

それきり背後のことは気にかけず、亮介ひとりに片腕を提供した状態で、希沙良はダッシュをかけた。彩の手を引き、少し遅れて冴子がそれを追った。

（ああ……そうか）

ここはまだ人の目が多すぎる。希沙良に支えられて走りながら、亮介はそう納得した。閉じられた改札口の向こうまで――いや、いっそプラットホームまで上がってしまえば、余計な心配は……。

右手につかんだ銀杖〈爪牙〉を、亮介はしっかりと握り直す。

切り札、だ。これが。

「困りますっ！」

「ばあかっ、病人がいんだろ、見りゃわかるだろッ!?　急いでんだ、こっちはっ!!」

制止する女性職員に全然理由にならない理由を頭ごなしで怒鳴りつけ、希沙良はなしくずしに改札を突破した。

「大嘘つき……」

「うるせえなああっ、てめえのどこが病人じゃねえんだよ、え!?」

顔面蒼白の亮介をひきずって、希沙良は運転停止中のエスカレーターを駆けあがる。

「希沙良、後ろっ！」

亮介の一言で、はっと希沙良は視線を動かした。

シャッ、と掠れるような、かすかに空気の触れる音が……した。

「っ!!」

見開いた左の眼を逸らしている暇がなかった。不意に出現した紙の刃が最後の視界に灼きついた。ざくり、と深く喰いこんでくる衝撃と、そして。

——真紅。

「希沙良っ!!」

階段の半ばで膝をつきながら、亮介が震える声で叫んだ。さしのべた手は間に合わない。バランスを失くしたきり、十三段目の高さから、手すりを越えて希沙良は真下へと落下した。亮介は愕然と手すりのベルトをつかんで身を乗り出した。

「希沙……!!」

だが亮介の呼びかけた声は、そこまでで永久にとぎれてしまった。

どこから、なんてわからなかった。何も見えなかった。

ただ、背の高い影がたった今、ギリギリで絶妙の位置に走りこんで——。

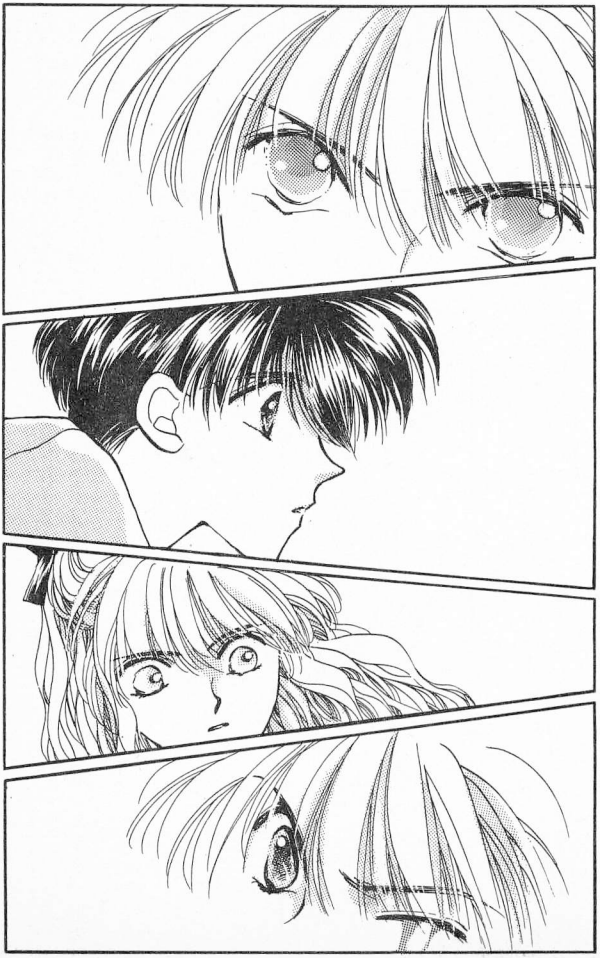
落ちてきた希沙良の全身を、ほとんど音もたてずに、その人影は両腕で受けとめた。勢いを消しきれず、薄汚れたスニーカーがザッと床を滑った。

「冴子っ!!」

口をひらくなり、真っ先に彼が呼んだのはその名前だった。

呼びつけた、というのが正しいのだろう。

「この阿呆のこと任せたっ!! 左眼やられてる、急げっ!!」



間違いない。その声は。

亮介はまばたきもできずに、その力強い声の主を見つめていた。

まだ、どこか、ひどく怖いような、熱くてたまらないような、なにか叫びたいような、説明のつかない気持ちで。

今、自分はどんな顔をしているのか……知らない。

——そこにいるのは、確かに、水沢涼、なのだ……。

第八章　永劫の剣

I

「あああああっ、色気がない色気がっ!!」

両腕に希沙良を抱えあげたまま、おもむろに何を言い出すかと思えば、諒は地団駄を踏まんばかりに悔しがっている。

「なんでここに来て俺が、よりによって和泉バカ希沙良のために貴重な腕を二本も使わねばならんかねっ、あああ勿体ないっ!!」

「てっ……てめえ、なああっ……」

押し殺した声で希沙良が呻いた。

「今まで、誰が、散々、てめえの代わりに苦労して……痛っ……畜、生……」

顔の左半分を覆った掌の、指の間から、生々しい鮮血がにじんでくる。傷はかなり深い……。諒はそれを見てとり一瞬だけ眉をしかめる。希沙良にこの傷を負わせた犯人が何なのか、諒はすでに知っている。

「怪我人に発言権はないってことになってる、黙ってろ」
強引に決めつけておいて、諒は背後を見返った。
「ねえねえ冴子さん、この患者さんてばやかましい上に性格に問題有りなんだけどそちらで引き取っていただけますかね」
「どこかの困ったバカよりは数段マシじゃない？」
追いついた冴子の反応も白々としたものだった。……いつもどおりに。
まるで離れている時間など少しもなかったように。
希沙良の治療を冴子に預けたところで、シュッと耳元の空気を裂いて飛んできた例の凶器を、諒は片方の掌で受けとめた。凄まじい飛来速度のせいで重たい反動が肩まで残る。
「なるほど……？」
銀光で強化した掌で——要するに『手刀』だ——とらえたそれを、諒はあっさり握りつぶした。くしゃり、と軽い音がした。
足元に放りだした正体は、ちっぽけな紙片。
この駅という舞台にはいやというほど有り余っている材料。
切符、である。
「特急券、指定席券、自由席券、入場券、その他よりどりみどりでスライスカッターに化けられちゃかないませんな」

「ん……だよ、切符なんかでっ……!!」

たかが紙のせいで傷を負ったことに腹を立てて希沙良が唸った。やかましいわねっ、とすかさず冴子に叱られる。

「しかもこいつがどこから飛んできたかというと」

希沙良の境遇には構わず、諒は反対側に視線をめぐらせた。

「……やはり思ったとおり」

天井付近に不吉な渦を描いて、蜂の大群のようにざわざわと紙片の集合体は膨れながら浮上していた。

あんなものが一斉に飛散したら、死傷者が続出だ。洒落にならない。

そこで初めて、諒はその肩のすぐ後ろ——エスカレーターの段上へと、目を向けた。

「亮介！　どうする!?」

「……!」

手すりをつかんだきり凍りついていた指が、瞬間に、揺らいだ。やっと亮介は正面から諒の瞳を見たのだ。

眼差しを。

止まった時間が急に流れ出す……。

「諒、俺が……!」

ほとんど無意識の勢いで、亮介はそう呼びかけていた。
「俺が消すから……！　諒は結界でフォローしてくれたら……」
「――――」
わずかな空白は、諒が亮介の真意を確かめるように見つめた、その一秒分だ。
ザッ！　と飛びこんできた紙片の弾丸を一瞬で現出させた〈朱雀〉の光で両断し、そして諒は短い言葉で亮介に尋ねる。
「わかってんだな、亮介!?　わかってるなら許す!!」
「絶対……!!」
亮介もそれだけの言葉で諒に答えた。
「絶対に、わかってる！」
「そう来られちゃ仕方がない……」
少なからずいやな顔をしながら、諒はやむを得ない様子で頷いた。
「しょおがないから亮介くんの好きにしなさい、後はこっちが任されたっ」
（大丈夫……！）
亮介は握りしめた地涯の杖〈爪牙〉を、自分の目の高さまで持ちあげる。
（大丈夫だ）
息をつめて。

今は、怖くないわけじゃない。
不安ならずっと抱えたままでいる。
けれど――……

はっと冴子が目を瞠り、亮介に向かって何か言いかけた。傷からの出血で真っ赤に濡れた掌を床に叩きつけて、希沙良が思わず身体を起こす。
銀杖のきらめきを、彩はまっすぐに見上げていた。
停止したエスカレーターの段上。
その瞬間、亮介は〈爪牙〉を逆手に持ちなおし、渾身の力で突き立てた――自分自身の胸元へ。

白色の、透明な嵐が解放されたのは、直後のことだった――。

＊　＊　＊

……どこからか、何者かの巨大な力が、この世界までも波紋を及ぼしたようだった。ゆるやかな圧迫を知覚して、彼女は歩みを止めた。

（外は、嵐）

清浄でありながら爆発的な……。

天の理を乱すもの。

（いつまでも、ここにはいられない）

きっと。

嵐が来る。今はどれほど遠くても。いずれ必ずたどりつく。壁を打ち砕いて。

「思いもよらなかったのでしょう、貴方」

彼女は空虚な天涯を仰ぎ、呟く。

「それとも、試されたかったと……？　彼らを？」

あるいは自らを？

彼女は笑う。なんと愚かしい問いだろう。

解答など誰に出せるはずもない。

（貴方には何もわからない）

だからこそ彼は〈神〉であり、そして〈空〉なる者、なのだから。

外は、嵐。彼の影はまだ見えない。

＊　＊　＊

ビシッ！　と不快な音をあげて、設定した結界のひとつが弾けとんだ。
幾重にもはりめぐらせた結界の層が、すでに今、半分以上を破壊されている。床についた右手は激しい攻撃をうける結界を支えつづけ、氷のように冷たく痺れきっていた。
（まだ防げる）
弱まった防壁に新たな力をさらに注ぎこみ、相手が隙につけこむより先にすべての態勢をたてなおす。時間の経過を感じとっている余裕もない。
十九郎の神経は、ずっと、ただ一点に集中したままだ。無意識の感覚が遠くの出来事を何か伝えかけたが……それも消えた。
防ぎさえすればいい。攻めに転じることも決して不可能ではないが、今の目的はこの相手を倒すことではないのだ。
命題は、ひとつ。背後の扉を死守すること——。
「もう諦めてしまえばいい……とは言えないね、おまえには」
口にするのも無駄と知っている表情で、むしろそれを喜ぶように、皓が呟いた。
たとえどれほどの劣勢に陥っても、十九郎が戦いを放棄する者ではないことを、彼女はとう

に確信している。

かつての戦闘で、充分に。

「だからおまえは厄介になってゆくのだろうに、尚更……」

鋭く凝縮した妖力の一矢を、強靱な波動にのせて皓は撃ちおろす。

「！」

耳をつんざく擦過音とともに、衝撃が十九郎自身の片頬を容赦なく切り裂いていった。ざっ、と鮮血の霧が広がったが十九郎は両の眼を閉ざそうともしなかった。

直撃をかわしてなお、余波だけでこの傷か……。

もとより結界は、今の攻撃に対して盾にさえなっていなかった。このままでは、次の一撃で確実に倒される。

（読まれているのか……！）

結界の最も脆くなっている部分を、皓はギリギリまで見抜いて、そこへ仕掛けてきているのだ。さすがと言う他なかった。

しかし、ならば……。

伝わり落ちてくる自分の血液を素早く掌に受けとめ、そして十九郎は間をおかず〈専心（コンセントレーション）〉に通じる真言を口にした。

雷電のような刺激が、結界を覆いつくした。わずかな驚愕が皓の瞳にはあらわれた。

十九郎は、この局面に及んで、まだ、さらに結界を強化してみせたのだ。
「……何をした？」
彼女が尋ねる。
「触媒を使った……」
蒼ざめた顔を上げながら、毅然として十九郎は答えを返した。
「術者の血なら、その程度の役には立つ」
「……」
意表をつかれたように皓は目を瞠り、やがて、美しい唇にじわりと笑みを刻んだ。
「面白い……」
発想そのものより……そうして望む結果を出してのける十九郎の姿勢が、何より皓の気に入るのだ。
「本当に、おまえは面白いね。……死ぬよ」
微笑したまま、さらりと皓はそんなことを告げた。
「おまえのような人間は、いずれ自ら滅びずにいられない。死に急がずにいられないね……」
「死ねたらどれほど楽かと考えることはあるさ、いくらでも……」
不吉な予言に対して、十九郎は真顔でそう答える。
「けれどそれは今ではないんだ」

「おまえが私の知らぬ何処かで犬死にするなど許せないと言っているのだよ」
皓は厳しく声を高め、赤い爪をまっすぐ十九郎の面へと突きつけた。
「何があろうと、たった今、この私の手で殺してくれよう、苦しまぬように……！」
「断る」
十九郎は一言で斬り捨てた。くっと皓は喉の奥で笑った。それは愉悦を含んだ。魔性の笑みだった。

＊　＊　＊

もう何十回ダイヤルしたかわからない番号を、神原亜衣はさらにくりかえした。緑色の公衆電話は、結局同じ反応しか返さない。回線がつながらないのだ。
六本木の街はどこもかしこも酷い状況だった。路上は壊れた自家用車や、ビルの壁面から落ちてきたネオンの破片や、ビデオショップの棚からあふれ出た商品の山や、歪んでねじ切れたガードレールなど雑多な物で埋まっている。ハンドスピーカーで外出禁止を呼びかけている警官たちの言葉によると、どうやら全国的に大変なことになっているらしい。
この大規模な騒霊現象には、亜衣はそれほど驚いていなかった。崎谷亮介とつきあっているだけで、この手の体験に慣れてしまうというのも少し悲しいが……。

それに、六本木まで駆けつけてくる間も、到着した後も、まわりでは事故や故障が続出し、さんざん足止めをくらいはしたのだが、亜衣自身にかかってきた被害はまったくなかったのだ。最初はその理由など思いつきもしなかった亜衣も、やがてひとつの可能性を悟った。

不破武人から預かってきた『神刀』の存在が、もしかしたら、何らかの力で自分を保護しているのではないだろうか？

「ここも駄目……！」

がしゃん、と勢いよく受話器を降ろし、亜衣は唇を噛みしめた。

どこかにひとつくらい、まともに回線の通じる電話はないのか。メモに書かれた番号は、おかげですっかり暗記できてしまった。非常の事態にはここへ連絡するようにと指示したのは里見十九郎だ。

言われたとおり、戦闘が発生したとわかった時点ですぐに電話すればよかった。先にあの斎伽忍のマンションをめざしたのが失敗だったのだ。

あのマンションには今、外部からは誰も入れない。

エレベーターホールで防火シャッターがぴたりと閉じたきり、微動だにしないのだ……。

「あ……！　それなら……」

どうして試してみなかったのかと、亜衣は間の抜けている自分の頭を拳で叩いた。そうだ、もしも『神刀』が本当に力を発揮しているのなら。

包んだ白布を電話の上でほどき、細い小刀をとりだしたその手で、もう一度番号どおりに亜衣はプッシュボタンを押してみる。

（お願いだから！）

ここでもし里見十九郎が敗れたら――そして斎伽忍の身が敵の手にかかったら、その瞬間に亮介たちの望みはすべて断たれてしまう。

すがる思いで亜衣は祈った。たった一回、余計な妖者の妨害を払いのけてくれるだけでいい。

この一本の電話線さえまともにしてくれたら。

「！」

あまりに切実な祈りをこめていたため、それが実際に聞こえてきた時、亜衣はとっさに対応できなかった。

『俺だ、何かあったのか!?』

亜衣の知っている声ではない。

鷹木文彦（たかぎふみひこ）、もしくは雷将勝呂（らいしょうすぐろ）という名も。

だがその相手が現在、唯一、救いを求められる味方であることは、疑うべくもなく確かだったのだ。

II

目を醒ましたら、周りの景色が変わっていた。

横になった背中にかすかな震動が伝わってくる。亮介は何度かまばたきをした。

「希沙良……？」

すぐ目の前の座席で頬杖をついているのは、間違いなく希沙良だった。ここは……新幹線の車内……？　個室？　見覚えがある……。

「あ、動いてる……」

列車が無事に走っているのだ。やっと前後の流れを把握して、亮介ははっきりと瞳をひらいた。

「崎谷、おっまえなああっ……」

待ちかねていたのか、とたんに、超高速レベルの足蹴りが鼻先まで飛んできた。がんっ、と枕がわりのひじ掛けを蹴りつけられれば、いやでも意識がまともに戻る。

「平っ和なカオして『あ、動いてる』じゃねえだろ、ぼけっ!!　めちゃくちゃやりやがって……」

「え、えっ!?　あ、俺……」

「そこで慌てて起きるなっ!!　変にじたばた動くな、寝てろっ!!」

焦って起きあがろうとした亮介は、希沙良の手で思いきり頭を押さえこまれて、仕方なく沈黙した。もう少し優雅に扱ってもらえるとありがたいのだが。

「おとなしくしてろよ、どうせあと三十分もしないで東京着だとさ」

亮介の額を掌で包むようにしたまま、希沙良が言い足した。

「そうしたらおまえも、あと一仕事だろ」

「……うん……」

希沙良が言うとおりだ。

いちばん大切な、本当の仕事が残っている。亮介は頷いた。

喉の内側がまだ熱っぽい……。強引な、かなり乱暴なやり方で中和能力を爆発させたのだから、それも仕方ないのだろう。

けれど心に重苦しい濁りは残っていなかった。そのことが、今の亮介には嬉しかった。

前の時のような、暗い虚しさのないことが……。

「……諒は？」

問題の親友の姿が、いつまでたっても視界に入ってこない。気になって、亮介はそっと尋ねてみた。

「野暮」

おそろしく簡潔な一言が、希沙良の返答だった。

一瞬何のことか考えている空白があり、それから。

（えええっ!?）

がばっ、と亮介は上体を起こした。扉側のシートに、ぽつんと座っている彩とはすぐに目が合ったが。

あとの二人はどこにも……。

「あ……そうか……」

どうして自分がそこで、と思いつつ亮介はなぜかカッと赤面している。希沙良が呆れた眼差しで亮介を見おろした。

「おまえさあ……」

「……わかってるから何も言わないでほしいっ……」

自己嫌悪しながら亮介は口元を片手で覆った。そうでもしないと、なんだか意味もなく笑ってしまいそうだ。

「なんでもないんだ、ちょっと嬉しくて……」

「おまえの反応って、時々すごくよくわからねえよな……」
げっそりした様子で希沙良は亮介の隣に勢いよく座りこみ、片手をのばしてぐしゃっと亮介の髪をかきまわした。のばされた腕ごしに、ふと亮介は真顔になって希沙良のほうを見返った。
「……希沙良」
言いかけて、適切な言葉が見つからず、結局亮介は別のことを口にした。
「左眼のって、もう、全然……？」
「俺に振るなよな、その話題っ!!」
プライドの傷つく一件らしく、希沙良は噛みつくように怒鳴りかえしてくる。ごめんなさい、と亮介は神妙に謝った。これならきっと怪我のことは心配ないのだ。なにしろ冴子が治したのだから……。
「関係ねえよ、あんなの」
希沙良が呟いた。亮介は目を上げた。
「……怖いんだ？　希沙良……」
「……」
震えが止まらないのだ。
希沙良の、その腕の。

めざす先は――東京は、もう間近まで迫っているのだけれど。
「ばあか」
ぐいと亮介の首にまわした片腕を乱暴に自分のほうへ引き寄せて、まるでそこにこめた力で震えを消し去ろうとするように、希沙良は視線をそらして吐き捨てる。
「おまえがんなとこ見てんじゃねーよ、馬鹿……！」

水しぶきを派手にはねとばしながら、洗面台から諒は顔を上げる。人目に触れない所ばかりを選んで走り回っていたので、必然的に頭から全身、やたらと汚れきっているのだ。おまけに流血状態の和泉希沙良を受けとめたりしてしまったし……。
「冴子さん、すかさずタオルなんか出てきませんか、こーゆー時？」
だらだらと雫の落ちてくる前髪を諒は指でかきあげ、背後の冴子へと問いかけた。
「あるわけないでしょ」
不機嫌に、腕組みをした冴子が答える。そりゃそうでしたね、と呟いて諒は自分の上着で無造作に顔を拭いている。
少しの間、冴子は無言でそれを眺めていた。髪に残った水滴を払って、諒も特に口をひらかなかった。

「……絶対、真っ先に止めると思ったのに」
ぽつりと冴子が言う。
「何を？」
諒が目を向けて、訊き返した。
「亮介ちゃん……。絶対、あんなことさせないと思ってたのよ」
「俺が？」
「しらばっくれんじゃないわよ、慢性過保護病患者のくせに」
「ばっくれているわけでは……。あっ、もしかして冴子さん、俺のココロの痛みなんか心配してくれたりした？」
「しないわよ、あたしに心配されるの大嫌いでしょ、あんたって」
怒ったように顔をそむけて、冴子は力一杯言いきってみせる。
「だから心配なんかしてないわ、ひとっかけらも!!」
「……あのねえ冴子さん、物事には程度というものが」
「程度って何それ!?　あたしの知ったことじゃないわね、初めっから、全っ然っ!!」
「……はいはいごもっとも」
素直に引きさがったはいいが、次に告げるべき言葉に諒は困っている。
冴子が怒るのも無理はないのだ。まったく無理はないのだが、しかし……。

「さえこさあああああんっ」
「なっ、何情けない声出してんのよっ!?」
「いや、こうなったら泣き落としかないかと思って」
「――馬鹿っ!!」
真っ赤になって冴子が怒鳴りつける。諒は口元でかすかに笑った。
「……だって絶対わかってるって亮介くんが言うんだもん、仕方ないじゃありませんか、俺としては」
「あたしも聞いたけど、何がわかってるっていうのよ、それって?」
新大阪駅の構内で。
亮介が自分自身の手で中和能力を発現させようとした時に。
どれほどそれが危険な行為か、考えなかったはずはないのだから。誰も。
「秘密」
あっさりと諒は一言で片付けた。あんたねええっ、と冴子が唸った。
「どおーせ、あたしにはあんたたちの約束事なんてわかんないわよ、どおおっせねね!! 勝手にやってれば!? じゃあね、さよならっ」
「違うっ! そうじゃなくてっ! 俺の言葉だとうまく説明できんから亮介くんに直接訊いたほうが感動もひとしおであろうかとっ!」

「だったら最初からそう言いなさいよね!!　面倒くさくなると秘密主義に走るクセも結局ぜんっぶ前と同じじゃないのよ、進歩のしの字もないんだからっ!!　この薄情者っ!!」

「は、薄情っ――面倒っ――あっ、あのなあっ、俺には俺なりの深い考えがあるのであって、それを面倒の二文字で」

「なああっにが深い考えよ、頭脳労働はみんな十九郎君がやってくれたでしょ、あんたはこれ幸いとばかりに隠れてただけよっ!!」

「さーえーこーっ」

「反論できないわね?」

びし、と人差し指を諒の鼻先に向けて、冴子が宣告する。

「……」

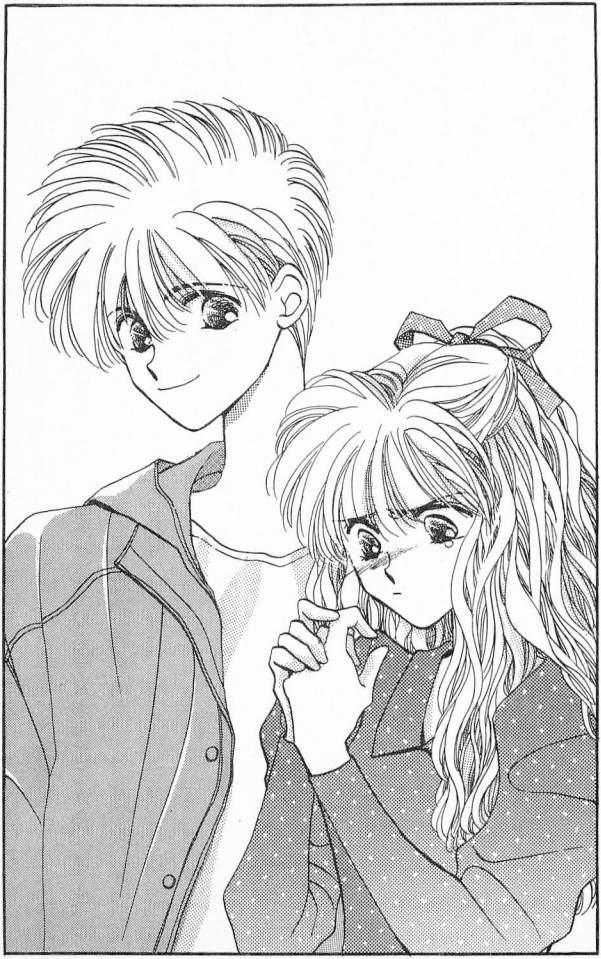
さあてどうしてくれようか、と目の前の指を眺めながら諒は思案する。

「冴子さん……男とゆーものを舐めてはいけませんよ、舐めては……」

「あんたに言われてもなんにも怖くないわねっ」

「そう?」

ぱくりと犬のように人差し指に噛みつかれて、三秒後、やっと冴子が悲鳴をあげて腕をひっこめた。冴子の悲鳴など滅多に聞けるものではないので、とりあえずその場はそれで諒は満足してみたりする。



「だから『伏兵』の策は里見さんと俺の共同作戦であったと言うておるでしょうが」
「……卑怯者っ……」
「んなこと言ってていいんですか、冴子さん？　諒ちゃん今ひらきなおってるから、あんなこともこんなこともできちゃうよ？　すーごく手加減したのよ、今のも」
「あんたいつの間にそんなケダモノになったのよっ!?」
「それは冴子さんがそこにいるから」
ごく生真面目に、諒は責任を転嫁した。唖然としている冴子の瞳をまっすぐに見つめながら。
「冴子が今、俺の前にいるからでしょ」
「ず……ずるすぎるわよ、そんなの……」
「雇い主の教育がよろしすぎたんで。……シャレにならないか」
「何から何まで人のせいにっ……」
その声をさえぎるように、諒の左手が冴子の耳元の髪をすくいあげた。
冴子も唇を結び、じっと逸らさない視線で諒を見つめ返した。
動けない——。
互いに。
「……やめた」

突然、肩からすとんと力をぬいて、諒が冴子から離れた。ひどく簡単に。
「これじゃ結局、鬼のいぬ間のなんとやらにしかならない……そんなんじゃ意味がない」
「……よくわかってるじゃないの」
「どうせね」
少し目を伏せる笑い方をして諒は呟く。
冴子はそれを見上げ、やがてため息をつきながら背中を向けた。
「ばかなんだから……」
「せめて正直って言ってよ、冴子さん……」
意味がない。
斎伽忍の存在が、今、この次元になかったら……。
「冴子」
ぽつりと諒が言った。
冴子の背中に。
「俺が、忍に勝っていい？」
「……」
「それでもいい？」
「……どう考えても今の諒じゃ無理ね」

「知ってますけど。昔は昔、今は今、未来は未来……そういうことでしょ」
「算段なんかあるの？」
「強気の二文字くらいかな」
「ものすごく信用がおけないわね、それって」
「まさにそのとおりっ。――って、追いうちをかけずとも」
「だからあたしが見張っててあげればいいんでしょ」
冴子が言う。
ふりかえらないままで。
「……うん……」
諒は静かに頷いた。
（忘れないで）
見ている。ずっと。冴子と、そして亮介と、それから……。
「冴子さん、もう絶対変なことしないから、ひとつだけお願い聞いて」
「変なことって、あのね……」
「聞いて」
「……何？」
「一分間だけ、見ないフリしてて」

「……」

沈黙が、冴子の返答だった。彼女の背中に流れるウェーブの髪を一房だけ指につかみとって、諒は祈りを捧げるように目を閉じた……。

遠く、巨大で、冷酷な、あの美しい存在の名を、心の内に呼びながら。

地涯の杖〈爪牙〉は、その輝きを一切そこなうことなく、まったく変わらぬ姿で亮介の手元にあった。

この杖は本来、使い手の意思に同調して、自動的に敵を滅ぼそうとする頼もしい武器のはずなのだ。それを亮介のように——自分自身へ向かって——使った時、どんな結果が生じるのか、誰にも予測のできたことではなかった。

当然、亮介が無事でいられる保証も、ありはしなかったのだ。希沙良はそのことに呆れている。とにかくそれで今までで最大級の妖力中和が実現したのだから、結果オーライと言えないこともないが、しかし。

「崎谷、よーく聞いとけよ、おまえ……」

「え？」

「言いたかねえけど、おまえあの直後に……」

顔をしかめながら、亮介の耳元に口を寄せて、希沙良は小声で言う。
「心臓止まってたぜ……四十五秒間っ！」
「――えええっ!?」
「俺らが近くにいたからなんとかなったけど、ひとりになったら絶対やるなよ。マジで天国に行くぞ、今度は」
「あ……慣れたら平気になったりしないかな……」
「そういう問題じゃねえだろ、まぬけっ!!」
「ご、ごめんなさいっ……」
本気で頭をはりとばされて、亮介は前言を撤回した。
「ごめん、もう言わない」
「ったく自分だけのほほんとしてんだからよ……」
希沙良は舌打ちしてシートの背に沈みこむ。
「まあ俺たちもそこで、今すぐ東京に戻らないと死んじまう大病人がいるとか大嘘かまして、そのせいで今こいつが走ってんだけどさ」
以来、妖者からの手出しは一切ない。よほど中和者の存在は連中にとって脅威だったのか……。
「うん……」

亮介は小さく頷いた。

「うん、本当に、凄く怖いことをやったって自分で思うけど……でも、言い訳みたいだけど、それでも、わかってたんだ」

「何を」

希沙良が問いかける。その希沙良の両目を下からのぞきこむようにして、亮介が答えた。

「たとえば、希沙良は必ずこんな風に叱ってくれるだろうなとか……俺には亜衣ちゃんっていう世界一かわいい彼女がいるんだとか、そういうこと」

「――――」

希沙良は言葉を返せず、半ば唖然とした心境で相手を見つめる。何を言ってるんだこいつは、の世界だ。

「もし大怪我したって、そこに冴子ちゃんがいるんだから全然心配ないだろうとか……何か俺が失敗しても諒が絶対フォローしてくれるだろうとか、それに〈爪牙〉って、つまり牙なんだから、そのせいで俺が死んだりするはずがないし、俺もあんな所で絶対死んでやるもんかと思ってたから……だから、大丈夫だと思ったんだ」

「……」

「だって、俺が死ぬわけにいかないよ……俺はもっと、ずっと、見ていたい相手がたくさんいるし、特に諒なんて、少し目を離しただけでどうなるかわからないから……そんな面白いもの

放り出して死ねないよ」

そして自分が見ている相手が、ふりむいて自分の存在を認めてくれる瞬間の、その泣きたいほどの嬉しさを亮介は知っている。

知っているから。

「……おまえ、それって……一歩まちがえたら、ただの思いこみにならないか？」

「今でも充分、ただの俺の思いこみじゃないかな、こういうのって、結局……」

いつだって保証などないのだ。いくらでも変わってゆく。けれど。

それでも……と、亮介は呟いた。

「信じるしかないんだ。どうしたって、信じることしかできないんだ。……信じるって、そういうことなんだ」

「彩のこと、任せていいかな？」

扉の窓から車外の景色を眺めながら、諒が尋ねた。

「あたしはいいけど……。どうするの？」

「どうせ和泉君の行き先は決まってるし、あとは亮介と俺でやるしかないんじゃない？」

もう、手の届く先を流れてゆくのは都心の街並みなのだ。

「いずれにしても六本木ね。なら、途中までは一緒に行くわ」
冴子がそう呟く。目的地はすぐ近くだ。
工藤珈織の降りる先を教える――と、〈使〉である蘭は言い、そして彼らが忘れられるはずもない建物の名を告げたのだった。
……六本木CBS、と。

III

ごう、と強い西風が吹きぬけ、長く伸びた黒髪を舞いあげていった。
壁面といい足元といい、周囲は凄惨な戦闘によってずたずたに崩れ、瓦礫の傷痕を剝き出しにしたまま、翳る天空に向けて解放されていた。
ここまでは誰も来ない……。
冷えきった風を全身に受けながら、珈織はかすかな吐息を漏らした。ようやく独りきりになれたように思えたのだ。もう真っ平だった――すべてが――煩いことばかりで――。

この地上の、この地球上の、ありとあらゆる生命の声が、たえず鼓膜にまとわりつき、弱々しくからみつき、疎ましくてならなかった。声高に己の都合を並べたてるばかりの、無力で無能な魂たち……！

何をしろというのだろう。どう救えというのだろう。縋るばかりの、百億の生命を。

「知らないわ」

珈織はあっさりと呟いた。

重苦しい期待を背負わせてくる者たちも。

勝手に裏切ってゆく者たちも。

今の自分には関わりがない。

「私だって、神様じゃないんだから」

万能の神などであるものか。

こうして独り、なにもかもを棄てて、高層の高みからあの者たちを見下すこともできるのだから。自分には。

自由に。

「知らない……」

何もわからない。——同じ運命を分けあうべき青年は……斎伽忍は、存在の謎を問いつづけることに疲れ、珈織を置きざりに、その自らを消してしまった。

不意に、見開いた珈織の瞳から、思いもよらぬ涙が溢れた。透明な悲しみが。
関わりがない、とすべてを切り捨てた時、胸を占めるのは寒い孤独だけだ。
そんなものを自由とは呼べない――。
ほんとうに自分がなすべきことは何なのか。
ほんとうの救いとは何なのか。
幾千億の生命と、そして唯一の相手の、それぞれに。
（哀れんではいけない、おまえは優しい子なのだから……）
違う。本当の優しさなんて、自分はまだ……。
「伽羅王」
彼女は呼びかける。
それは珈織の声でもあり、同時に珈織の内側に刻みこまれた懐しい言葉でもあり――その境界は誰にもわからない。
「私たち、いつになったら……」

＊　＊　＊

雷将勝呂と斎伽忍のひきおこした戦闘で、中央テレビCBS本社ビルはその全機能を停止

し、立入禁止の危険区画と化していた。都内の異常な混乱のため警官隊が出払っているのをいいことに、諒は正面玄関から堂々と誰もいないCBS局内へのりこんだ。

「なんか変な感じがするよねえ……俺と亮介でCBSっていうと」

複雑な表情で諒が呟く。

「うん……」

たしかに因縁がいろいろとありすぎる。亮介もなにか困るような気分で、頷いた。ここに出入りしていた自分は、あまりふりかえりたくない自分に思えて。

けれどここで工藤珈織と出会った自分も、何のはずみか三島成之と遭遇した自分も、やはり決して消し去れない自分自身だ……。

「三島君のバイト代って、どうなるんだろう?」

「やーめーてーっ、俺ひそかにそれすーごく心配してるんだから言わないでっ」

ぽつりと尋ねた亮介に、諒は頭を抱えこんで情けない声を出す。

「いいけど……」

「ああ三島君びっくりしちゃった」

胸をなでおろしている諒を見やって、わけもなく亮介は苦笑した。なんというのか……。

「……やっと、諒と二人だけになれた気がするな……」

心の内から出てきた言葉を、亮介は声にして呟いてみた。愕然と諒がふりむいた。

「どっ――どうしたの亮介っ!?　何が起こったの突然っ!?」
「どうしたのって、別に……」
「水沢くん亮介の甘い言葉に飢えてるから増長しちゃうよ?　どうなっても知りませんよ、私……」
「……何、今更……。だから……いろいろ余計なことばっかり俺たち抱えてて、だけどそれは捨てるわけにいかないことだったから、今までずっと間に重い物がはさまってる感じがして、諒と話しても、俺が……全然、本当に、諒と一緒にいるって実感、できなかったんだと思う……」
ぎこちなく、亮介はそんな風に説明した。
「今の水沢なら、平気?　ホンモノの水沢になってる?」
諒が真顔で問いかけてくる。
「ホンモノ以上かな」
亮介も生真面目に頷いた。
「ものすごく、常識をかけはなれて遅刻してくるところとか……」
「あああああっ」
傷ついてしゃがみこんでいる諒の肩を、亮介は仕方なく片手で叩いた。
「別に、それが悪いって言ってるわけじゃなくて……」

「さーて急ごう、エレベーター使えないし階段徒歩で行かねばならんし、これが」

拗ねたままなのか居直ったのか、諒はさっさと立ち上がって足早に進んでいく。こんなところまで諒だ……と亮介は疲れたため息をついた。

正確には、諒は遅れたのではなく合流したのだ。亮介たちが剣司の目を引きつけている間、空路で先回りして、三人より早く諒は大阪入りしていたというのだから……。

水沢諒を援軍に送りこむ、と告げた十九郎は決して約束を破らなかったわけだ。どのように諒と十九郎のふたりが、そのためのきっかけをつかみとったのか亮介にはわからないが。

それでかまわないと亮介は思う。

いちばん諒らしい走り方を、十九郎は間違いなく見ぬいて、そのとおりに走らせてくれたのだ。

だから……いい。

(やっぱり、全然かなわないな……)

ピリッ、と電流のような勘が走ったのはその時だった。はっと亮介は見返りざま、降ってきた黒い影を右手に握った銀杖ではじきとばした。——いや、動いたのは〈爪牙〉のほうであり、亮介はただそれに従っただけだ。

「諒！　まだ何かいる……！」

「素晴らしいっ」

勢いよく右腕を振りながら諒が応えた。唸りをあげて朱雀剣が姿をあらわす。
亮介は自分が払いのけた物に目をこらした。一瞬、鼠かとも思ったがそうではなく。
「フィルムだ、ビデオの……」
「文化的財産になんということを」
向かう階段の上方に異様な気配がうごめくのを見てとり、諒は輝きを増す光剣をゆっくり移動させた。
「ここはひとつ頑張っていただこうか、朱雀さん……？」

＊　＊　＊

胸の奥がぎりぎりと痛んでいる。心臓が……。
長時間の苛酷な負担に耐えかねて。
だが凄まじい気による戦闘は、完全な膠着を保っていた。
精神力だけで——一介の、生身の人間の精神力だけで、望むとおりの奇跡が起こせるなどと十九郎は初めから信じていない。
限界を持たぬ、無尽蔵の力など——どこにもない。
斃れるときは斃れるのだ。誰でも。

けれど……。

（来る）

そのことを十九郎は知っていた。

（もうすぐ……）

眼前に氷のように鋭い光が渦巻き、胸元へ迫るのを、ゆらぐ視界のなかに十九郎は察知した。ビシッ!! と彼はそれを自分の左腕で受けとめる。鞭のしなやかさで光の刃は十九郎の腕にからみつき、骨に沿って深い傷を負わせた。

痛みをまだ感じていられるのはありがたい。意識が続いているということだからだ。

今の一太刀で、十九郎の結界はすべて消えた。あとは、妨げる壁もなく、おのれの身体ひとつで対峙するだけとなる——。

いまだその妖力に綻びを見せようとしない〈幻将〉皓と。

「どうする?」

次の狙いを十九郎の双眸へと定めながら、皓が尋ねた。

「もう……眠るかい」

（来ている）

（そこに）

言葉を発する前に、十九郎は一度、深く息を吸いこんだ。呼吸さえ肺の痛みとひきかえだ。

「……何ができる？」

十九郎がそう問いかける。冷ややかに。

「ここまで……戦いつづけたおまえに、この上、何ができる？」

「見下されたものだね」

皓は目を細めた。

「おまえこそ、私に何をさせようというのだろう……。そのような姿になってまで」

白く細い腕に眩しい気を宿らせて呟き……。

「まあ良い、おまえの願いなら……」

その独白が合図だった。

能うかぎりの慈悲をこめた、最後の一撃を皓は与えた——避けがたい間合いで。

「！」

それを待っていたのだ、皓が攻めかかる瞬間を。

「希沙良、今だ！」

襲いくる衝撃に自ら深傷の左腕を呑みこませ、十九郎はその名を呼んでいた。どうせ使いものになっていないのだ、左腕ぐらいくれてやる……！　灼熱が肩までを覆い焼きつくすのと、求める影が空をきって右の掌におさまるのとが、同時だった。

飾りけのない、細身の小刀が。

その内に秘められた波動に気付き、皓がはっと目を瞠った。しかし十九郎が右腕一本で逆手に鞘をぬき、半回転させて目の前の床に白い刃を突き立てるほうが——早かった。

「縛止！」

十九郎の放った言霊が、神刀の波動と響きあい、相乗の効果を生み出す。がっ、と稲妻に似た烈しい光の鎖が皓の全身を足元から包みこんだ。

「何っ……」

あらゆる動きを封じられ、皓が呻くように口をひらいた。ギ、ギッ……と彼女の身体に光が軋んで、その拘束をゆるめようとしない……。

そこまでが、また、十九郎の限界でもあった。これ以上、指一本さえ動かせと命じられても無理だ。

「っ！」

フローリングの床に片手をつきながら、一呼吸だけ遅れて、新たな人影がそこへすべりこんだ。疾風の勢いで、十九郎の傍らへ……はかったように。

——強く炸裂する白銀の輝きを、両の手刀にまとわせて。

「悪い……待たせちまった……」

十九郎を庇う位置に片腕をついたまま、低い声で希沙良が呟いた。

「大丈夫だ……」

穏やかにその瞳を閉ざし、短く、十九郎が答える。
「間に合ったよ……希沙良が来るまでは、負けないと、決めていた……」
「……この大馬鹿」
ひどすぎる失血と無惨な重傷を目にとめ、希沙良は顔をしかめて吐き捨てる。当然の流れで、その視線は、やがてすぐ間近に立つ皓へと向いた。
それだけの傷を彼に負わせてのけた相手、に。
どうしてくれようか、この女……？
「――希沙……」
希沙良の意図を悟り、なにごとかを告げようとした十九郎の声が、急にとぎれた。意識を失い不安定に揺らいだ彼の身体を、希沙良は自分の肩に受けとめた。凍りそうな胸に息をつめながら。
今、どんな行動をとるのが最も彼のためになるのか。
冴子なら階下にいる。神原亜衣との合流に成功して、そのまま。
一刻も早く十九郎を冴子に引き渡さねばならないのは、当然だ。しかし今がこの女を倒す絶好の機会であることも確かで。
「おっと……そこの可愛い坊主、盛りあがってんのはわかるがその程度にしておかないか？」
突然、黒い扉のほうから、からかうように気楽な声が割りこんだのはその時だった。

すかさず皓が、口惜しげな眼差しをそちらへと投げた。決定的な邪魔が入ったのだ。

「雷将か……！」

「おやおや、困ったな、マキちゃん、こんな所で何を遊んでたのかなあ？」

悠然と腕を組みあわせ、ごく不真面目な態度で鷹木文彦は問いかける。

だが彼の本心は、まっすぐに皓を射ぬいた厳しすぎる視線で、すでに明らかだ。

「ったく、どいつもこいつも当てにならないことはなはだしいってやつさ……」

九那妃が将軍の職を与えたのでなければ、とうの昔に、炎将であれ幻将であれ、文彦は自分の目の前から叩き出している。

（冗談でもすまぬことばかりを）

――それでも、なお彼らは将であり、九那妃の決定が違えられてよいはずはなく、だからこそ雷将勝呂は怒りの噴出をも抑えざるをえないのだ。

我慢せねばならないどころか、窮地から拾い出してやる手間も惜しめない。どう考えても割に合わない。

「これ以上、阿呆な大騒ぎを続けられたら、俺の正気がもちそうにないのさ。ガタガタ暴れるのはいいかげんやめてもらえないかな？」

＊　＊　＊

CBS本社ビル内に溜まっていた妖者の精神本体そのものは、〈爪牙〉の働きと、そして諒が全開にした朱雀剣の光（プラズマ）をもってすれば、苦戦せずに突破できるレベルの相手だった。照明の絶えた階段を邪魔者を払いのけながら上ってゆく危うさはあったのだが、それが怖いとは、亮介はまったく思わなかった。今は諒が隣（となり）にいるのだから。

怖いのは、もっと……。

（諒）

階段を上に行くほど諒の口数が減ってゆくことに、亮介は気付いている。

かすかな、目に見えない糸が一本、心の内にはりつめてゆくような気がする。

（怖いんだ？　希沙良）

自分の言葉を思い出す。そうだ、誰もが……。

怖いのは、結果が出てしまうことだ。

走りはじめる時より、走りつづけている間より、目指す先に何が待っているか——それがついに見えてしまう瞬間が。

積み重ねたひとつひとつの道筋がどんなに確かでも、未来に保証などはない。そして人の心

にも。

たとえば斎伽忍自身の心にも。

自分たちは今、彼にとって、最も罪深いことを試みているのかもしれない。

どれほど祈っても、望みは叶わないかもしれない。

(だけど走っているんだ)

一歩一歩を踏みしめながら、理由のわからない涙がこみあげてくるのを亮介は抑えた。

(だけど忍さん、俺たちは……)

闇に足をとられてバランスを失いそうになった亮介の背中を、諒の片腕が支えた。互いにもう、言葉は必要なかった。太陽の光線が直に射しこむ、砕け果てた最上階の舞台へとたどりつくまで。

その最上階が、本来、斎伽忍によって結界を設定されていた空間であることを亮介はそれまで忘れていた。忍はずっと、彼自身の観測場としてそこを封鎖していたのだ。

だからなのだろう。結界が消えても、そこにはおかしがたい清浄な波動が残り、濁った妖気の入りこむ余地を許していなかった。

在るのは、ただ……。

「珈織さん……」

瓦礫のなかに踏み出して、亮介はそう呟いた。



かつてこのCBSで出会った時から、すでに別人のごとく変貌している彼女を、亮介は決して見誤ることなく認識することができた。

伝わってくる何かが、『いい人』だと思えたあの時と同じで。

「珈織さん」

二度目の呼びかけで、ふわりと彼女はふりむいた。あおってゆく強風に、黒髪を流しながら。

「わかりますか、どうして俺たちがここまで来たのか……」

「私にわかることなんて、何ひとつありはしないのよ」

静かに、それが初めから定められていることのように、珈織は笑みもせず答えた。

ああ、似ている……と、亮介は痛いほど感じた。

本質があきらかになった今、さりげない表情さえ、わずかな仕種さえ、彼女は斎伽忍に酷似しているのだ。

面影のすべてが。

ばさばさっと羽音を鳴らして、その時、大柄な鴉が亮介の傍らを横切り、崩れた壁の残骸に着地した。

と思うと、もう鴉の姿はそこになく、するりと身を起こしたのは隙のない女性のシルエットだった。蘭、だ。

「幻将の企みが潰えた様子にございます」
口をひらくなり、鋭い表情で彼女はそう告げた。
「もはや妨げるものは何もありませぬ。雷将もすぐに、こちらへ参るでしょう……」
「……」
亮介は諒と目を見合わせた。
「……蘭」
ぽつりと、珈織がその〈使〉の名を呼んだ。
「私、あなたに悪いことをしたわ……なにもかも、間違えていたのよ……」
「姫様……」
蘭がかすかに、一方だけの瞳を見開いた。驚愕を隠せずに。
「あの人も、そうしたかったのかもしれないわ。なにもかも間違えてしまえたら、それで……」
珈織はそこで唇を閉ざす。
それで得られるものなど、刹那の――。
「あなたは恐ろしいことを考えているのね」
不意に亮介のほうを見やって、珈織が前触れもなく言った。ずきりと鼓動が胸を突き刺すのを亮介は感じた。

高なる心臓の音が、自分の耳に聞こえてくる。
それは恐怖だ。
拭いがたく、逃れがたい恐怖の圧迫。
(怖いのは——こんな風に——)
こんな風に、結果を問われてしまう瞬間。
「因果など私は知らないわ。あなたを語ることも、あなたを動かすことも、私には……」
ゆるやかに、亮介から視線を外し、珈織は彼らにそっと背中を向けた。
「ただ、あなたが行うことを……その行き先を、私は見るでしょう……それが、私……」
「……」
銀杖を握りしめる指が硬くこわばって動かない。
自分は恐ろしいことを意図している——。
中和の矛先がほんのわずか逸れただけで、貴重な存在を巻きこみ消し去ってしまうことさえ、絶対皆無とは言いきれないのに。
あらゆる未来の可能性が、そこには広がっているのに。
「かおるさん、すみませんがあなたの中に閉じこもってる困った馬鹿野郎に一言、言わせてもらえませんか」
ふと亮介の隣から声を投げたのは、それまで沈黙を保ちつづけていた諒だった。

珈織からの返答はなかった。諒も特に、許可を待ってはいなかった。向けられた後ろ姿に、諒は何か別の像を重ねるように両眼を細め、そして——ゆっくりと口をひらく。

「……忍、俺がここにいるってことは、おまえに挑戦状たたきつけてるんだって、それは知ってるんだろ？」

亮介は諒のことをふりむこうとして、けれどできなかった。

淡々と、いつもどおりの声で諒は告げているのだ。

厳しい内容の言葉を。

それなのに……。

「一生なんかかけなくたって、俺がちゃんとおまえに勝ってやる。安心しろよ、俺がおまえには勝ってやるから……」

それなのにどうして今、泣きたいほどそれが優しいと自分は思うのだろう。

「だから今は、おまえが戦わなくちゃならないんだ……おまえは戦っていいんだ、今はおまえが勝ったっていいんだ……それでおまえが誰に責められたって知らん顔で勝てばいいんだ」

そのまま両眼を閉ざし、振り切るように瞳をひらいて、諒が言った……。

「だから今はおまえが勝て!!」

亮介は〈爪牙〉をつかんだ右手を震わせた。知らぬ間に頬には涙が溢れ出していた。

（信じるしかないんだ）
（だって、信じることしかできないんだ）
（信じるって、そういうことなんだ）
たとえなにもかもが叶わない幻でも――。
もう亮介を縛りつける重苦しい力はなかった。流れる涙を拭いもせず、亮介は輝く銀杖を自分自身へと振りおろした。

終章　螺旋

「……ずいぶんと遠い所まで、あなたは……」
彼女は美しい眉をひそめて呟いた。
凄絶な銀河を見はるかす闇空にひとり、彼女にそう告げられることは承知しているように、彼は、いた。
「赤子のごとく迷いこまれたわけでも、ありますまいに」
「捜させてしまいましたね」
透けるような微笑を浮かべ、彼は静かに答える。
「星々を見ていました、蒼い星を……」
ゆきかう生命の閃光を瞳に映しながら。
変転の流れのなかに。

「うつくしいものを、ご覧になりたかったのですね、あなたは……」
彼女が問いかける。
「ええ」
漆黒の髪をかすかに揺らし、その青年は頷いた。
「希みは叶えられたのでしょうか？」
さらに彼女はそう尋ねた。
「私にもわからない……。けれど、おそらく……」
彼はそして首を横に振った。だがそれが寂しげな否定でないことを、彼女は見てとった。
「……では……あなたとはこれで再び、お別れをしなければ……」
彼女自身の願いが満ち足りるのを覚え、彼女ははれやかな思いで告げる——伽羅王に。
「いずれ、また見えることもありましょう……その時には……」
「ええ、いずれ……その時に……」
くりかえされてゆく、終わりと始まりに。
鈴の音のような、輪廻の響きを聴きながら、彼女は光る闇の内からその身を浮上させた。
——まるで……たった今、誰かが誕生してゆくような……。

＊　＊　＊

はっ、と強い力で胸を叩かれたように感じて、遠野一真はその顔を上げた。

眠っていたのだろうか？　彼は時計を見る。午後二時五十五分……。里見十九郎に約束した『二十四時間』の期限まで、あと五分ばかりも残されていなかった。

「どうした、遠野？」

隣席の明石川耕宇が問いかけてくる。いえ、と一真は首を横に振った。明石川の面にもまた、疲弊の色はあきらかだ。彼ら四人衆は全員、休む間もなく、秘密を厳守するため席を外すことも許されず、一室にこもったきり論議をくりかえしていたのだ。

意外だったのは、咸月陣に対して、どちらかといえば温厚であるはずの不破武人が真っ向から反対意見をぶつけ、一歩もひかずにいることだった。

何か、不破武人を駆りたてる大きなきっかけがあったということなのだろうが……。

（二十四時間……）

再び、一真は時計の針を見やった。

ある計画が一真の胸には浮かびあがっていた。もしも二十四時間がきっかり経過したところで自分が意見をひるがえし咸月と明石川の側についたなら、どうなるか……。

どれほど武人が強硬に反対しようと、多数決の結果まではくつがえせない。それはわかりきっている。

もし、本当に自分がそのように動いたら、あの里見十九郎がどう反応してくるか……なのだ。知りたいのは。

（どうするだろう？　君は……）

刻々と、秒針が進んでゆく。

誘惑が決意に変わったのは、残された時間が三十秒を切ったときだった。

「兄者方……」

ゆっくりと、一真は口をひらいた。

咸月陣の胸元で、まさにその時、軽いコール音が鳴りひびいた。

憔悴を隠しきれぬ面持ちで、舌打ちしながら咸月陣は小型の携帯電話を片手にとりだす。

「私だ、用件は手短に願いたいが――……」

だが――。

そこで咸月の声は、あまりに唐突に失われた。

何事かと、同席の三人もそちらへ目を向けはした。

咸月陣は、小刻みに震える手で電話器を押さえ、数秒の空白の後に、やっと、その相手の名を呼ぶことができたのだ。

「……忍様……!?」

＊　＊　＊

遠い空に雲が流れてゆくのを、里見夏江は見送った。
武蔵野邸の、広大な庭園で、自由な風を頬に受けながら。
「いい天気……」
これなら晴天は明日までつづくだろう。絶好の洗濯日和になりそうで、嬉しい。ざわざわと揺れる木々の緑までが、夏江の気分に賛成してくれているようだった。
明日になれば、しっかり者の神原亜衣はきちんと学校に行くだろう。崎谷亮介は一日くらい寝こむかもしれない。十九郎はこの際、強制入院でもさせておいて……ベッドをぬけださないよう隣に希沙良でも座らせておけばいいだろう。水沢諒は、明日にでも新しい『仕事』を命じられて嘆くかもしれない。それに追いうちをかけて冴子がついてゆき、そして……。
そして……。
「本当に、綺麗な空の色……」
……それはこれから語られる未来だ……。
空に向けて微笑んで、やがて夏江は歩きだした。彼女を待っている、大勢の子供たちの元へ

と……。

天冥の剣

――完――

あとがき

ハイスクール・オーラバスターシリーズ十冊目、『天冥の剣』四巻をお届けします。

これで「オーラバスター第一期」は完結です。敵味方のメインキャラクターが総勢そろったところで、「第二期」からはそれぞれの妖者将軍たちと、亮介たち術者諸君との、本格的な戦いがはじまることになります。頭脳戦あり、肉弾戦あり、謀略あり、謎あり事件ありの……しかし学校生活も受験勉強も恋愛戦争もあるのよ！　という物語がすでにスタンバイOKでわれわれを待ちうけております。（……え、そんなこと昔から知ってた？　それがオーラバスターだろって？　……まったくもってそのとおりだ!!）

この「第二期」と、それからシリーズ決着編となる「第三期」が待っていることは、『セイレーン』を書いているあたりからじわじわと、誰かさん（あの美しいお方だ）に知らされていたんですが、その新しい転換点にたどりつくためには、ひどくつらい道を通らないといけないことも当時からやはり明白で……それを承知で『天冥の剣』を書く、というのは実はたいへんな覚悟のいることでした。

どうしてそんな破滅的な方法しかとれないのよやめなさいばかばか、って泣いたところで里見と希沙良は戦うしかないし、あなたが死ぬとこなんか書きたくないのよ頼むから戻ってき

て、なんてどんなに原稿用紙にむかって祈っても斎伽忍の運命は変えられないんです。

それはあの人たちが、実際に動いて、自分の力で変えていくしかない運命で……。そしたらもう、こっちは、心臓が痛かろうが、何回泣くことになろうが、とにかく最後まで忠実に、あの人たちの戦いを、信じて、書いていくしかないじゃないですか。

実は私、天冥一巻が出る前に、雑誌コバルトに書いた予告編で「ついてこれる奴だけついてこい!!」という神をも恐れぬセリフをぶちまかしたんですが、本当にこの物語はそれくらい厳しいものだったと今でも思います。最初にそう言っとかないとサギだな、というくらい……リアルタイムで『天冥の剣』を読まされる（いや、待たされる、なんだよ本当はっ!!）のはつらかっただろうな、と……。

ほんとに長いことずっと、苦労かけて迷惑かけて心配させてごめん。

この一冊が、お詫びと、そして深い感謝のしるしになっているといいんだけど……。

……足りなかったかな？　まだこんなもんじゃねーだろとかいわれたりして。

ついてこい！　と若木がぶちかましたとき、「よーしわかった！」と応えてくれた人たち、一冊出るごとに「ちくしょー若木てめえ何とゆーことをっ」と泣きながら、それでも辛抱づよく読みつづけてきてくれた人たち、一年以上にわたる長距離走を黙々と見守って、一緒にゴール地点までたどりついてくれたすべての人に、この第四巻を捧げたいと思います。

どうもありがとうございました。ありがとうって、あんまりいうと感謝の安売りみたいだけど、でも他にいいようがないや。

それと、これからも、どうぞよろしく。
泣かせた分、幸せにもするからさ。……「にも」ってとこがポイント。（笑）

三ページ目に突入してから言うことじゃない気がするけど、実は！　今回！　あとがき用のページが四枚しかない!!　この「あとがき」を生きがいにまでしている若木に対してこの仕打ち!!　おのれえっ、はかったな編集部!!（いや、誰かさんの報復って気も……）

そんなわけで、ディアーナ以来ずーっとお預けになってる牙の名前の由来とか、イズミちゃんの正体は白鳥いづみちゃんらしいとか、緊急対談ではやたらデマがとんでたけどあれの真相はこうなんだってばとか、彩ちゃんの誕生日はいつだとか、陽子ちゃんは別に希沙良の現「彼女」じゃないみたいだとか、里見が喫ってる煙草の銘柄とか、六本木の忍さんちの間取りはどうなってるかとか、その他いろいろと書きたいことはあったが全部先送りだっ。

希沙良が「巻末に収録して笑いものにする！」と断言していた予告編と、忍様のインタビューも、今回は入らないそうです。ううう……こーなったら、おちゃらけた本を一冊作ってそれに予告からインタビューから「歌姫」から全部、無理やり詰めこむか……。

で、絶対先送りにするわけにはいかぬ最新情報を少々、ダッシュで書きますが。

まず、ついに『天使はうまく踊れない』のCDブックが製作されます。賛否両論のはげしいドラマバージョンですが、脚本に渡辺麻美さん、音響監督に千葉耕市さんという、若木の希望どおりの方々が揃ってくださったので、これは期待特大ではないかと……。この冬、CD、カ

セットともに集英社から発売されますので、ぜひぜひ本屋さんでチェックしてくださいっ。

それから漫画版のオーラバスターですが、『天使』の連載後には『迷える羊』が来て、さらに『セイレーン』の連載まで行くぞ!! ふふふ、凄かろう……。あと、十一月上旬に発売のララ増刊には『アニバーサリー』が再録されますので、本誌で見逃した人はこっちをぜひ。

そしてなんと!! 田村純子さんの漫画化した『XAZSA』が、この増刊で読めてしまうのよ!! こんなに幸せでいいのか!? どーしよー、もう少ししたら京平さんに会えちまう、どきどき……（主人公は誰だ、主人公は）。この秋、絶対に読むべし!! の一作だっ。

最後に、お知らせをもうひとつ。若木未生黙認FCプラーミアの連絡先が変わりました。新しい宛て先は、〒一六八 東京都杉並区下高井戸一―四〇―八 杉並下高井戸郵便局留「プラーミア」になります。問い合わせ等は、六十二円切手（郵便料金変更後は、新料金で！）を貼った返信用封筒を同封のうえ、こちらの住所にお願いします。

ああっしまった!! 渾身の力作だったイメージアルバムの話がぜんぜんできてないじゃないかあっ。だから最初っから四ページってのは無謀な……ううう……わかった、この件は『グラスハート』文庫版のあとがきにまわすしかないということだね？ 音楽の話題だからちょうどいいけど……。んじゃ次はグラハーで会おうっ。決まったからにはぜひ会おう。ではねっ。

（要するに、一部完でも落ち着いてるヒマなんかないんだね、これが……）

それでも今は幸せな 若木未生

わかぎ・みお

1968年12月２日、埼玉県生まれ、都内在住。射手座、A型。1989年４月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。ドラムを習う意志を固めたはいいが腰痛に苦しみ、いまだに望みを果たしていない。一方、やっとファミコンを始めたはいいが「勇者たくみ」のあまりの弱さに呆れはて、いまだにひとつも終わらせていない。やはり「勇者しょうご」にするべきだったのか……。コバルトシリーズに『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ(前編)(後編)』『エクサール騎士団1、2』『XAZSA Ver. 1～2』『天冥の剣1～3』などがある。

天冥の剣4



COBALT-SERIES

1993年10月10日　第１刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

〒101－50
東京都千代田区一ツ橋２－５－10
(3230) 6268(編集)
電話　東京 (3230) 6393(販売)
(3230) 6080(制作)

印刷所　株式会社美松堂
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1993
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611782-7 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

妖者に挑む少年たちの人気ファンタジー。

若木未生 〈ハイスクール・オーラバスター〉

イラスト／杜 真琴

天使はうまく踊れない
高1生の亮介のまわりに、奇妙なヤツらが現われて。

セイレーンの聖母
十九郎が狙われた！　とてつもない妖力に忍は。

十字架の少女
亮介たちは、諒の妹・彩を迎えて軽井沢で合宿を。

迷える羊に愛の手を
転校先での諒は!?　シリーズ番外編。

炎獄のディアーナ 〈前編〉〈後編〉
女の子を狙う〝髪切り事件〟が発生！

天冥の剣 1～3
〝吸血鬼殺人〟の背後に妖者が。



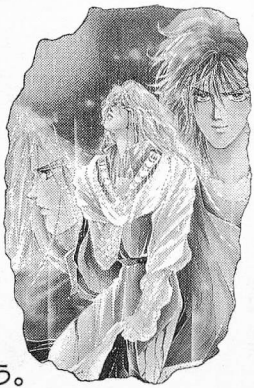
〈好評発売中〉 コバルト文庫

私は巫女（エクサール）、多元界の因果力（エニール）を制御する者――。不思議ファンタジー！

エクサール騎士団（ライエノーツ）1 2

若木未生

イラスト／羽音こうき



あきらは事故で両親を失い、来生家の養子になった。そこには彼女同様の立場の衛（えい）、閃（せん）、貢（みつぐ）がいて、四人兄妹として育つ。しかし、兄たちの真の姿は異界からの使者…あきらは守るべき巫女だという。

コバルト ノベル大賞 募集中!

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後(400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下)を、お待ちしております。

〈入　選　作〉**正賞の盾と副賞100万円**
〈佳　　作〉**正賞の盾と副賞 50万円**
〈コバルト読者大賞〉**正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「Cobalt」に毎号掲載されています。

人気作家の最新作が一気に読める夢♡小説誌!

コバルト **Cobalt**

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売!

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート ショート」を毎号募集しています。